Letters to the Kobe Fellowship

(下)

八代斌助主教の前任者、バジル・シンプソン主教が在英・神戸後援会にあてた書簡集

日本聖公会・神戸教区
歴史編纂委員会

序

旧約聖書を読むと、モーゼ、預言者、詩人らが、たびたび過去の事実を語っていることに出くわす。それは、イスラエルの上に常に変らず注がれているヤーウェの選びの聖旨と恩寵に思いをいたさせ、悔改めと希望を新たにさせるためである。

わたしは、神戸教区の教役者の子供として育ち、神学校を出てから三年間（昭和八～十一年）は、広島の教会で伝道師として過ごさせて頂いたものである。だから、今から半世紀前頃までの神戸教区の事情、空気は、ある程度、身をもって知っているつもりである。その頃、教区の大部分の教会、教役者は、いわゆるミッション（S・P・GとC・M・S）によって支えられているところが大きかった。しかし、ミッションの援助は徐々に減少しつつあったし、教区、教会の自給自立のときは否応なく近づいてきていた。そうなったら、教役者は働きを続けていくことが出来るだろうか？　教会は存続出来るだろうか？　こうした不安の思いはしばしば耳にしたことであった。

しかし、その後はそれどころでなく、戦時下、戦後の危機的状況の中をも通らねばならなかったが、教会はつぶれなかったし、聖職を志す人々は続出した。

思えば、二千年の教会の歴史は一貫して、困難の中にも不滅の教会の姿を見せている。教会は、人の手の業になる団体でも組織でもない。昔も今も明日も変り給わぬキリストの生命の働いている生命体である。終わりの日の来るまで、人が存在している限り、暗きを照らし、人々を、命の光にあずからせる家であらねばならぬ。「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」。このキリストが、神を知らぬ者を、永遠の神の腕の中に入れて下さるお方であり、死ぬべき者に命を与えて下さるお方である。この「お方」が臨在なし給うところが教会である。

現実の教会は、つねにキリストの中に生きねばならぬ。その中の一人一人は、このキリストに在って生かされねばならぬ。

バジル主教は、この教会を信じ、この教会に生涯を入れて生き、仕えた方であった。この主教が、神戸教区（地方部）のために祈りつつ、また多くの人々の祈りを求めつつ、キリストの業に励まれた跡が見られるのが、その書簡である。

一九八六年十月二十二日

前大阪教区主教　小池俊男

書簡集出版の経緯

西川正文司祭が教区歴史編纂委員長であった頃、この書簡集出版に手をつけられた経緯は、書簡集(上)に述べられている通りである。このたび、その後半二十通の出版にこぎつけることができた。

これら書簡の書かれた頃の日本は、一九二九年ウォール街に発した金融恐慌の大津波がわが国にも上陸し、国民の生活は苦しくなり、ことに農村の窮乏はなはだしく、労働運動、左翼の活動、弾圧、右翼の台頭、政財界の腐敗と、日本は転がるように軍国化の道をつき進んでいた時代であった。

書簡の文中にも、不景気の直撃をうけた製糸織布業の惨状、上海事変、二・二六事件、宗教団体法案などについての記述が見つけることができる。教会にとっては、伝道協会S・P・G、C・M・Sの援助縮小とともにまさに内憂外患の時代だったことが窺える。

広範な神戸地方部、教役者の慢性的不足、せまられる教会・学校の建築、新伝道地の問題、全てに重い責任を感じて同労教役者とともに働き、母国の友人につよく祈りを求めておられるバジル監督の姿に感銘をうけながら編集を続けていく中、偶然二枚の写真に出会った。一枚は、聖ペテロ教会の献堂式のプロセッション、もう一枚は、境大火救援の写真、どちらも、書簡27・36に引用されている写真であった。

そのようなことから、書簡に登場する出来事や人物をできるだけ特定してみようということになり、資料を探し、問合せをすることになった。その結果が、少々目障りになるかも知れないが、文中に（注：　）のかたちで説明を入れることになった。また写真も、できるだけ当時のものか、比較的年代の近いものを掲載するようにした。

勿論、非力な我々歴史編纂委員だけでは出来ることではなく、巻末に掲げたように多くの方のご協力ご支援があってのことであった。それでもなお、不十分な点、間違いなどが多々あることをお詫びするとともに、ご親切なご指摘によって、神戸教区史がより充実していくことを念願している。

一九八六年十二月

神戸教区歴史編纂委員長　司祭　佐藤真一

目　次

－序－

書簡集出版の経緯

書簡　第２３号　【1931年(昭 6)11月】……1
書簡　第２４号　【1932年(昭 7) 2月】……3
書簡　第２５号　【1932年(昭 7) 5月】……8
書簡　第２６号　【1932年(昭 7) 8月】……12
書簡　第２７号　【1932年(昭 7)11月】……17
書簡　第２８号　【1933年(昭 8) 2月】……22
書簡　第２９号　【1933年(昭 8) 5月】……27
書簡　第３０号　【1933年(昭 8) 8月】……31
書簡　第３１号　【1933年(昭 8)11月】……37
書簡　第３２号　【1934年(昭 9) 2月】……41
書簡　第３３号　【1934年(昭 9) 6月】……46
書簡　第３４号　【1934年(昭 9) 9月】……52
書簡　第３５号　【1934年(昭 9)11月】……56
書簡　第３６号　【1935年(昭10) 2月】……62
書簡　第３７号　【1935年(昭10) 6月】……68
書簡　第３８号　【1935年(昭10)11月】……75
書簡　第３９号　【1936年(昭11) 4月】……77
書簡　第４０号　【1936年(昭11) 9月】……82
書簡　第４１号　【1936年(昭11)11月】……88
書簡　第４２号　【1937年(昭12) 2月】……92

参考資料１　バジル監督を語る……98
参考資料２　当時のこと　あれこれ……101
参考資料３　歴史座談会から……105
参考資料４　昭和９年の教会・教役者……110

人名・地名・教会名索引……115
掲載写真索引……116
感　　謝……117

書簡 第23号

一九三一年(昭6)十一月二〇日
日本・神戸・四の宮 松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

ほとんどの宣教師団が、経済上の理由で季刊出版物のうち一号を削減することを決めました。しかし私はそうしたくありません。日本で、すべてのことがどうなって行っているか、皆さんのお祈りのためにも知っていただきたいからです。でも私流の節約で、いつもの二枚のかわりに一枚の手紙を書いています。

皆さんは、年次総会でベッキンガム師から、金本位制移行によって英国ポンドが弱くなり、通貨交換率が下落したために、我々がどれほど深刻な損害を受けたかということを、初めてお聞きになったと思います。

細かいことをお知らせするつもりはありませんが、最近の選挙運動では、人々にお金についてのミステリーがたくさん語られたと聞いています。現在の交換レートによれば、二ヶ月前に百ポンドで買えた日本円を買うのに、今では百三十ポンド必要なのです。

なんらいい進展がなければ、収支を合わすために、宣教師団スタッフの数を減らさなければならないでしょう。このことは本当に断腸の思いですし、我々の前進の多くの希望を消滅させてしまうように思われます。我々が勇気と忍耐に満たされ、正しい方法で、この問題に直面していく知恵が与えられるよう祈って下さい。神が、このひどい状況の中で、日本のクリスチャンが自立自給のために一層の努力をするように導いて下さるようにとも祈って下さい。

彼らは真剣にやっています。少なくとも彼らの最善をつくしています。9月の地方部会では、このことについて長い討議がありました。そして動議が通過し、委員会はこの問題について信徒全体の意識が喚起させられるようにと勧告しました。しかし、実際に日本人は貧しいのです。日本人教役者の最高の俸給でも、ようやく週給二ポンド一〇シリングで、もっともっと低い俸給の人たちもいます。

私は、淡路島の中心にある人口約二万七千の町(注・洲本)にある教会へ、按手のために行っていました。ここには紡績工場があり、かっては四千人が働いていました。彼らの家族を含めると、町の人口の三分の一を占めていたのです。しかし過去二年の間に、その三分の二が解雇され失業してしまいました。日本には失業手当はないのです。貧困救済の一般的制度もなく、おまけに生活費は大戦(注・第一次)前の二倍は

+Basil, Bishop in Kobe.

【聖オーガスチン教会聖別式のバジル主教。1928年】とサイン。

聖別式と祝賀会についての記述は、書簡(上)14号にある。
写真後列に、主教をたすけて働いた教役者方の姿が見える。
左から、ケテルウエル、覚前信三、中道政市、国広文吾、ゲイル、ストランクス、主教、八代欽之允、ストロング、アレン師。

かかるのです。

こんな状況にもかかわらず、彼らの教会の献金は、年々少額ながら増えているのです。

地方部会と夏期学校(注・教役者修養会のこと)のあと、ほとんどの司祭たちは聖職按手式のために、神戸にとどまっていました。按手を受けた聖職と、準備の祈りと沈黙を共にしたのです。とても素晴らしい式でした。

その日私は高知へ、聖パウロに捧げられるはずの新しい教会の定礎式のために出発しました。その後、建築は順調に進んでおり、聖パウロ節に献堂式ができたらと心から願っています。

葺合(注・神戸)聖ペテロになるはずの新しい教会は、まだ着工していません。定礎式どころか、土地問題がようやく解決し準備ができたところです。土地を貸していた植木屋が、また難問をもちかけて来ましたが、やっと先週立ち退いてくれました。しかし、市役所のお役所仕事ぶりはいつ決着がつくのか見当もつきません。実際まだケリがついていないのです。どちらの教会も、建築がすんだ時点で借金が残るのではないかと心配しています。本国の両協会は援助してくれると思っていますが、経済的に困難なときだから、このことについての協議は来年まで延期するように云わなければなりませんでした。とはいえ、来年の援助を心から期待しています。

交換レート問題をますます悪化させるかも知れないこの借金は、当座私が面倒をみなければならないでしょう。

この春、皇太后の積極的なご援助のお蔭で、日本政府は癩者のための施設の拡張と増設をせっせとやりました。年次総会でストロング司祭からお聞きになった方はご存じですが、この結果の一つとして、瀬戸内海の「長島」という島に、新しい国立癩者センターの一つが作られることになりました。

我々の団体が日本で運営している二つあるクリスチャン癩者センターの一つからの便りによると、そこから長島に移って行った十数人の受聖餐信徒が、島の役人が司祭の訪問を許可しないのではないかと心配しているとのことでした。しかし、神戸聖ミカエル教会の八代司祭の父君、岡山の司祭（注：八代欽之允）がこの役人と掛け合って、ついに訪問の許可を取り付けました。同司祭から最初の訪問と、かの地での初めての聖餐式についての長い報告を受け取ったばかりです。

この地方部で、我々が癩者にたいする活動をする経済的余力はありませんが、島の信徒方にサクラメントを執行できるだけでも有り難いと思っております。

金詰まりのお蔭で、松山のリチャード氏がイースター後離日したあとへ誰かを派遣することは難しくなりました。しかし私は簡単に諦めることはできません。どうぞこのことのために祈り続けて下さい。リチャード氏の情熱のお蔭で、彼ら

参照・P102

は将来の我々の働きのために土地を買おうとしています。神戸にある我々の教会が分担している「伝道祈祷日」の前日の礼拝を守ったあと、聖アンデレ日に松山へ行きたいと願っています。

今からクリスマスまでの五週間に、もう八つ按手式があります。今年按手を受けた人の数は、神戸が独立した地方区になってからの最高になります。いろいろな困難にもかかわらず、感謝しなくてはならないことが沢山あります。

クリスマスに際し、皆さんの上に幼子キリストの祝福と計り知ることのできない神の平安が豊かにありますように。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第24号

一九三二年(昭7)二月二七日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

先ず最初に個人的なことですが、クリスマスのプレゼント、お便りそしてカードを下さった方お一人お一人にお礼を云う時間がないので、そのお礼でこの手紙を書き始めます。

私が予想していた通り、日本が熱帯にあると思っておられた方は、雪景色の姫路城のカードにびっくりされたと思います。偶然先週はこの冬最高の寒さで、神戸で四日間雪が降ったのです。神戸の雪はそんなに長く積もっていないのですが、私がこの手紙を書き始めてから六時間降り続け、今はかなり積もっています。

姫路城は、我々の姫路顕栄教会からも、ミス・ボールスとミス・ホームズの住んでいる伝道師館からもすぐ近くにあります。今訓練を受けている婦人は一人だけです。ミス・ボールスそしてミス・ホームズが休暇に入るので、この訓練は7月から二年間休みになります。

姫路の日本人婦人伝道師(注・太田りう)は、一年前に男子

【教役者修養会】有馬で、昭8年頃。前列右より三人目、太田りう

伝道師が退職したように、イースターに退職しました。彼らは新しい地方部の恩給制度による退職の年齢に達したので、恩給受給者になったのです。日本にある我々のすべての教会が、全体的な恩給制度に加入することは大事なことです。今のところ、三つ四つの教区・地方部には恩給制度がありませんし、あっても内容に差があるのです。このことは、教役者が教区・地方部間で移動するときに、難しいことのもとになります。この問題は、三年前の三年ごとの総会(注・第16)に提案されましたが、持ち越しになり、今年4月の総会に再提案されます。どうぞこの案のために祈って下さい。総会は4月13日から16日まで、大阪で開かれます。討議されるはずの他の議案は、死者のための祈り、日課表の改訂、最近改訂された法憲法規にたいする批判などです。

韓国の新しい主教を総会の来賓として迎え、私のところに滞在してほしいと願っています。

C・M・Sは昨今の経済的困難に直面し、英国に休暇帰国中の人々を足止めすることによって、旅費を節約しようとしています。でも、二人の勇敢なC・M・S婦人ミス・ナッシュとミス・ウォージントンは、退職年齢に達し恩給受給者になったのですが、日本への帰任旅費を工面してこの春帰って来ます。ミス・スミスもイースター前に、そしてすぐミス・バーバーも帰って来ると期待しています。ミス・スミスは男子校

【ミス・ナッシュ】写真中央。最後列はバークレー師。カラーの人、大石虎太郎司祭。右二人目、早川仲司祭。

に帰任しますし、ミス・バーバーは幼稚園で働きます。ミス・ストークスには、ミス・リーが休暇の間松蔭で一年間働いてくれるよう頼んでいます。彼女はミス・リーと同じように聖ミカエル教会でも働くようになるでしょう。

ミス・リーは4月に、彼女が神戸に来るまで教えていて、大勢の友人のいるカナダ経由で帰国します。男子校は、ウォーカー夫妻のいない一年を迎えなければなりません。お二人は7月に休暇帰国します。

一組の人々が休暇から帰任するやいなや、他の一組が休暇をとる、我々の日本における実際の戦力は、全メンバーの数よりずっと少ないという実情を御覧になったと思います。しかし、宣教師にとって休暇が必要なこと、もし休暇がなかったら疲れてダウンしてしまうことは確かなことです。

もし誰かが帰って来なかったら、大変困ったことになります。これはゲイル司祭一家とミス・エッセンのことなのですが、もう一人か二人のC・M・Sの宣教師もそうなるかも知れないのです。

今のところ我々は、交換レートの被害を補填するために我々の手持ち資金を使ってもいいことになっています。しかし、将来の問題とはいえ、どちらの宣教師団からも経済的支援のない宣教師達の場合、また年金支払不能の場合について、S・P・G当局と年次総会でのサウサンプトンの主教の発言の両方を考え、重い気持ちにさせられています。

ミス・エッセンとゲイル司祭を失うことは本当に残念です。五年間の滞在中、神戸のためにすばらしい働きをして下さったことを感謝しています。とにかくゲイル司祭は、一年半ほど前にこの書簡でお知らせしたように、バンクーバーで東洋

関係の任務につくことになるでしょう。今年の初めに、そのようにはっきり任命されたはずです。

今月の大半は、S・P・GとC・M・Sに対する昨年の統計と会計の報告書、全体についての一般的な報告書にかかりっきりでした。勿論数字が全てではありませんが、去年全体で受聖饗者の数が五%増加したことは嬉しいことです。最高の増加は、あらゆる点で素晴らしい働きのあった「御影」でした。彼らは、地代の高い近所で懸命に教会のための敷地を探しています。今は借家で大変窮屈な思いをしているのです。

皆さん、「ミカゲ」をどう発音されますか。一語の中に音節が三つあり、「ゲ」が難しく、しかも母音はフランス語にとてもよく似ているのです。

松山の教会の敷地は手に入り、一部借金もしましたがクリスマス前に支払いを済ましました。リチャード氏は来週日本を離れます。もう帰って来ません。そして悲しいかな後任が見つからないのです。どうぞこの大きな必要のために繰り返し祈って下さい。

高知聖パウロ教会は、聖パウロ改心日の前日で日曜日にあたった1月24日に献堂されました。八代司祭(注・欽之允)が、チャプレンと特別説教者として私に同行してくれました。我々は土曜日の夜の船に乗り、日曜日の早朝高知に着きました。

ゆっくり百人は入れる聖堂は満員で、外にいた大勢の人々

参照・P 98

【高知聖パウロ教会献堂式】聖職左から、中野忠治司祭、八代斌助司祭、バジル主教、中道政市司祭。和服は村井義孝氏。

も、式の初め聖堂を廻る行列に目をみはっていました。玄関の内外にいたこの人々は、聖饗式のために聖堂の扉が閉じられたとき、ようやく解散しました。午後はクリスチャンでない人々のために、簡単な礼拝と説教の会をしましたところ、聖堂はまた一杯になりました。守護聖人聖パウロのための聖饗式は翌日の朝、我々が神戸に帰る前に捧げることにしました。

正月前まで出なかった「葺合」の教会の建築許可がやっと下りました。既に沢山の資材は現場に用意されていたので、早速工事が始まりました。我々の簡素な教会は、本国のがんじょうな教会に比べるとずっと早く建つのです。4月29日は祝日なので、この日に聖ペテロ教会の献堂式ができれば、いつもの会衆だけでなく、他の教役者や友人も出席できるのにと思っています。

どうぞこれら二つの教会の教役者と会衆のために、神の特別な祝福を祈って下さい。そして建築費がかなり足りないことも覚えて下さい。この困難な時代に、皆さんが支援を続けて下さることは本当に素晴らしいことなのです。

一寸申し上げておきたいのですが、今年は今までのところ女子修道院のために何も入ってきていません。基金は実質上使い果されています。どうぞこのことも考えて下さい。

極東の平和のためにお祈り下さっていることと思います。上海での戦争(注・7年1月上海事変勃発)について書くつもりも、弁護するつもりもありませんが、二つの事は知っておいてもらいたいのです。

一つは我々日本の教会が、昨年秋の中国での洪水の被災者のために、多額の義捐金を集め中国の総裁主教宛送ったこと。カトリック教会もプロテスタント教会も同じようなことをしました。もう一つのことは、神戸在住の中国人はいつものように せっせと働いていて、表面的にはもめ事やいやがらせの心配はなさそうだということです。

困難と混乱の中にある世界にあってもぐらつかないで、平和と正義のために祈り、働きましょう。

よみがえりの主が、皆さんに、世が与えることも奪いとることもできないイースターの喜びと平安を下さいますように。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第25号

一九三二年(昭7)五月十一日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

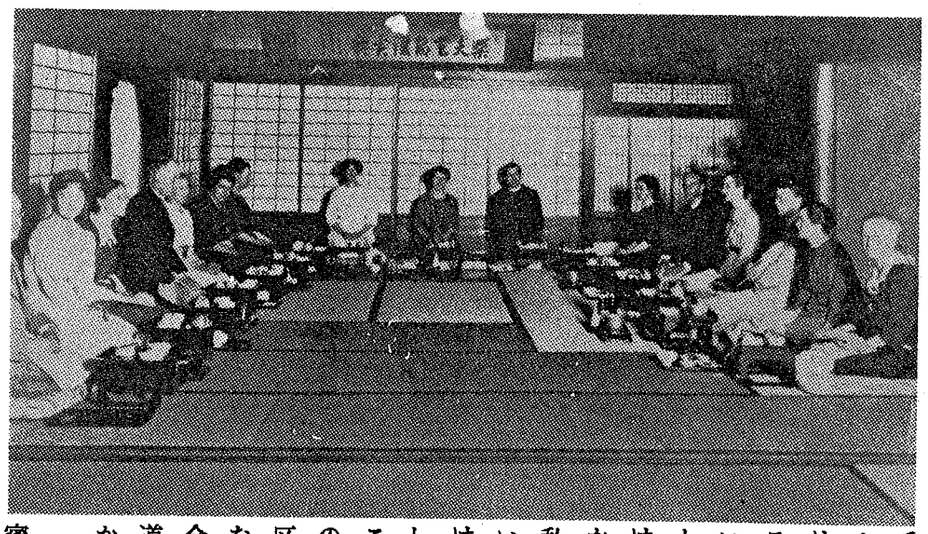
私の友人ご一同様

神戸で働かれた最初の司祭はフォス師でした。一八七六年(明9)来日、一八九九年(明32)大阪(注・伝道地方部)の二代目主教に聖別。一九二三年(大12)退職、今年洗足木曜日ウインチェスターで逝去されました。平安な安息をお祈りします。チャーチ・タイムスやミッション・フィールドに掲載された同師の功績についての記事に、何も付け加えるものはありませんが、ただ日本にいる我々すべてが、どれほど同師の据えられた土台のお蔭をこうむっているか、どれほど多くの場所に、同師の高い徳と学識の証しが残されているかということだけを申し添えたいと思います。

同主教が退職された年、正式に大阪教区が組織され、名出保太郎師が初代主教として聖別されました。そしてフォス主教のかっての伝道地方部の大部分が、神戸地方部と名称が変わったのです。

総会(注・第17。会場・堺市大和川青霞会館)については、チャーチ・タイムスに記事を送りましたから、ここで詳細については述べませんが、私としては北海道と韓国から主教を迎え、私宅に滞在していただいたことはとても素晴らしいことでした。この家から総会のあった大阪教区の市まではかなり遠く不便で、会場まで毎日片道二時間づつかかりました。

この総会に来賓として北中国



【S・P・Gスタッフのフォス監督送別会】

【第十七聖公会総会】昭7年、堺市で。

出席されたことは最も有意義なことでした。この方は今、中華聖公会の総裁主教です。この中華聖公会というのは、日本聖公会が「日本にある聖なるカトリック教会」という意味であるのと同じように、「中国にある聖なるカトリック教会」という意味なのです。中国、韓国、日本にある我々の教会で使われる書き文字は同じなのですが、言葉も発音も異なります。

中国の主教を我々の総会に迎えるのは初めてで、前韓国主教の最後の御訪問以来約十年のことです。

主教会の要請によりこの三国にある我々の教会が、聖公会委員会(Episcopal Committee)を組織することは、今後の問題解決の助けになり、共通の関係づくりにいい影響を及ぼすと思われます。

聖ペテロ教会の献堂式は総会の二週間後でした。アレン司祭も日本人信者も、建物や調度品のために大変な苦労をしました。十分な費用ではなかったので、簡素でひかえめな建築にならざるを得なかったのですが、その出来ばえは地方部一だと思います。この教会と高知の聖パウロ教会の支払いを済ますために、英国からの援助を待ち続けています。

国の祝日である天長節の4月29日が、献堂式の日に選ばれました。聖堂は百二十席ですが、この朝は十二名の聖職を含めて約百五十人が参列しました。この日の前日も翌日もどしゃ降りでしたが、式の当日だけは輝くような晴天で、聖堂の

外側を廻る行列も支障なくできました。聖ペテロ教会は、週日の礼拝のために小さな小聖堂を持っています。それは至極当然のことだろうと云われるかも知りませんが、私の地方部では初めての小聖堂なのです。彼らはそのことを大層自慢にしています。どうぞこの真新しい教会と会衆と司祭の上に神の祝福を祈って下さい。

次の日曜日にはまた聖ペテロ教会へ按手のために行きます。アレン司祭はこの秋初めての休暇です。そして年末を故郷で過ごせるようにと願っています。

前号に書きましたが、聖ペテロ教会の約四マイル東にある「御影」会衆(Church centre)はますます素晴らしい成長を続けています。今春私は五人に按手しました。「御影」の会衆は、借金はしましたが敷地も買いましたし、今は聖堂が建っている聖ペテロ教会が、二十年前そうしていたように、将来の正式の聖堂のためにいい場所を残して、敷地のうしろのほうに何とか力を合わせて仮の礼拝堂と付属の家を建てようとしています。

私は「御影」の人たちに、聖ペテロ教会と聖パウロ教会関連の借金がすんだら、主教自由資金(Bishop's fund)から援助するよう努力すると約束しています。この度のような教会建築への援助要請は、だれもが援助するのが難しいと思っているときに、皆が最優先を願ってくるので大変困らされます。

しかし、私は皆さんが最大の努力をして下さると思っています。母国の主教たちも、新しい地域にもっともっと大規模な教会建築計画をやろうと決心しておられます。

遠くない将来「松山」にも、新しい敷地の後のほうに「御影」のような建物ができるでしょう。もし「松山」に専従の司祭がいたらとうに出来あがっていたはずなのですが…。リチャード師は2月末に帰国します。一ヶ月先ですが、C・M・Sと連繋しているこの地方「松山」に、赴任し働くことになる叙任前の若い伝道師を派遣できると思います。司祭を見つけることは出来ないことが分かったので、当座私が月一回聖餐式のために「松山」へ行くつもりです。少なくとも週に一回聖餐に与っていた人々にとっては悲しいことでしょうが、助けないわけにはいきません。

どうぞこの若い教役者ヨハネ信岡(注・修吉)のために祈って下さい。教会の働きのためとは云え、彼をこんな孤立した場所にすべて責任を負わせて残していくことは確かに冒険です。この孤立というのは、私の大きな地方部の端の方にあるからということではなく、「松山」が人口八万か九万の市なので淋しいだろうということなのです。

先月の末「松山」を訪問した折、「大洲」に行きました。松山から南西へ三時間、山に囲まれた田舎の町で、昨年まで聖ミカエル教会で働いていた老司祭(注・竹内宗六司祭)が働

【竹内宗六司祭】写真中央。大洲・村上家葬儀、昭12年。

いているところです。日曜日の夜、按手式がありましたが、按手を受けた人の中に、大洲の南西の方(注・宇和島か)から四時間半もかけてやってきた一人の結婚している婦人がありました。この方は本当に孤立している信徒で、この四国の南西地方というのは、この地方部のなかで、私がまだ行ったことのない二、三の地方の一つなのです。

このことは、私達がしなければならない働きに対して、あまりにも私達の人手が足りないということの一つの例です。日本人教役者の平均年齢が高くなりつつあることは、以前にお話したことがあると思います。私が神戸に来てこのかた、現役の司祭で亡くなったり、病気で引退した者はありませんが、人のやりくりが、もう限界を越えている現在、もしそのようなことが起こったらどうしたらいいだろうかと心配しています。その心配していたことが、どちらも高齢な姫路と岡山の司祭が病気のときにイースターに起こりました。岡山の司祭(注・八代欽之允)のことはずっと後まで知らなかったのですが、ケテルウエル司祭が復活日の聖餐式のために姫路へ行き、代りに私が彼の会衆「葺合」に行くように頼まれました。しかし私は足の怪我のために全く動けなかったのです。その後、淡路の司祭(注・秋田哲三)の目が悪く、将来手術を受けなければならないことも分かりました。

このような事情で、新しい教役者を訓練することがますま

す必要なのですが、最初の教役者が役に立つまでまだ二年かかると思っています。今訓練を受けている者たちが、我々の主のための素晴らしい働き人になるようにと祈って下さい。

足の怪我で引き籠もっていたとき、世界一周旅行中のフィールド氏と彼の友人が訪ねてきてくれました。聖マリヤ・マグダレン教会が恋しくなるのではないかと心配したのですが、彼は我々のために素晴らしいことを沢山してくれましたし、神戸での働きを見て、本当に感動していると云ってくれました。もっと多くの皆さんにも見ていただけたらと思っています。でも皆さんは、祈りで我々の働きを応援して下さっているのです。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第26号

一九三二年(昭7)八月十六日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

六ヶ月前に高知聖パウロ教会の聖別式について、三ヶ月前には神戸市内の聖ペテロ教会の聖別式について書きました。この二教会への S・P・GとS・P・C・Kからの特別な補助金についての知らせを喜んでいます。これと他の贈り物とで、建物に関する全ての借金を完済できるでしょう。しかし、ほかにもう二つの建築があり、その必要性について申し上げなければなりません。

一つは「御影」で、この春に建物のための土地を購入し、すでに建築を始めています。ここはまだ正式な教会ではありませんが、ずっと後にはそうなるでしょう。敷地の一角に牧師館を建築中で、当分の間、その一階の大部分が教会として使われます。現在借りている家よりずっと大勢の会衆をいれることができるでしょうし、見た目にも美しいものになると思います。聖別された教会でなくても、聖母の守護のもと、聖マリヤ伝道所としてすぐにも活動を始めたいと切望しています。

一年の間に、地方部の中に二人の偉大な使徒の守護に加えて、聖母のそれをも加えることができたのは素晴らしいことです。

「御影」の新しい建物の献堂は秋の初めになります。というのは、彼らはできるだけ早く高い家賃を節約したいと願っているからです。私は信者たちが今年末までに自分たちで募金した金額に比例した額を援助すると約束しています。

もう一つの建物は、最新のものではなく、最も古く、中心的な教会である「神戸聖ミカエル教会」です。一年前に八代(注・斌助)司祭が赴任してすぐに、信者たちが、木造の部分に白蟻が巣くっているのを発見し、自分たちで募金し、四十ないし五十ポンドをそのために使いました。しかし今夏の初めに、屋根の新しい雨漏りから、その被害が思っていたよりもっと拡がっていることが発見されました。大きな崩壊を防ぐために直ぐにでも処置しなければなりませんでしたので、暑さにもかかわらずすでに取り組んでいます。

屋根はほとんど完全に新しくしなければなりません。当地にある私達の教会は壁の大部分が木造ですので、全ての教会をだんだんと修理しているところです。

この度は明らかに三百ポンドかそれ以上かかるでしょう。この場合も、私は信者たちが年末までに募金した額に比例して経費を援助しようと云ってあります。来る聖ミカエル祭のときに、聖ミカエル教会のこの問題を思い出してくださるなら大きな幸せです。このことを皆さんにお願いするつもりであることを、八代司祭に話してあります。

この三ヶ月の間の司祭たちの一連の病気には参りました。淡路島の司祭(注・秋田哲三)は白内障の手術を待っており、加えて頭の障害があり、聖霊降臨節以後何もできないでいます。八代司祭と私が、各々月に一度づつ出かけて行き聖餐式を捧げ、人々に聖餐を授けたり、その他必要なことをしています。

五月の終わりに、気分のすぐれなかったケテルウエル司祭が突然病院にかつぎ込まれ、直ちに盲腸の手術を受けました。盲腸は破裂していて腹膜炎を起こしており、その後の一週間は重態でした。その後、順調に回復し、夏期休暇をとる少し前から再び教会の勤務につくことができるようになりました。しかしこのために、私達は「御影」のために約六週間の代わりの人を見つけなければなりませんでした。

最後は、最年長の「姫路」の牧野(注・与三郎)司祭で、ちょうどイースターにも発作を起こしていたのですが、先月の中頃、再び心臓発作に見舞われ二ヶ月の静養を命じられました。同司祭が寝込んでしまったので、この地域の結核病院にいる信者の患者に聖餐を授けるために、アレン司祭が、私達

が、また夏期休暇を過ごしている神戸の近くの六甲山の山荘から出かけて行っています。

私達の司祭たちの健康のため、力づけられるため、仕事を続けることができるようお祈り下さい。これは奉仕職（ministry）のための良き後継者の養成がどんなに必要であり、重要であるかということの大きな警告です。彼らのうちの誰かが神学校を卒業するまでまだ二年間あります。私達はもっと多くの人の養成を必要としており、何人かの志願者がありますが、神学生をもっと、少なくとも一人は増やしたいものです。相応しい人を受け入れられるよう導いて下さるよう、そしてその人たちを支えることができるようお祈り下さい。

「松山」で働いているヨハネ信岡のことを喜んでいます。彼は熱心でまじめに、そしてこの国ではとても大切な身の上相談に良い働きをしています。松山は今も私が管理しており毎月出向いていますが、ストロング司祭が帰ってくれば、代って管理を引き受けてくれるよう頼むつもりです。ストロング司祭は直ぐに下関に帰らないで、春まで神戸で私と一緒にいることになります。彼は10月上旬に帰ってきますし、アレン司祭はその一ヶ月後に出発します。ストロング司祭は、聖ペテロ教会の執事が叙任されるまで、聖ペテロ教会を管理しながら松山へ、後に下関から松山の教会に奉仕します。このやりくりの一つの結果が、この地方部の西端に拡がっている

【信岡修吉伝道師】写真中央めがねの人。松江で昭６年。

いくつかの前哨地点のまとめとなることを願っています。しかしそれは将来のことです。

松山の若い婦人伝道師（注：吉田照子）は、来月、若い力を必要としている姫路に移ります。高知にいる年上の婦人伝道師（注：岡井ちえ）が松山へ、そして最近養成を終えたばかりの婦人伝道師（注：武内繁子）は、信頼できる司祭（注：中道政市）のいる高知へ行きます。

最年長の姫路の婦人伝道師（注：太田りう）が退職したことは前回お知らせしました。姫路の教役者養成所（training centre）は、まずミス・ボールズが、次いでミス・ホームズが休暇をとりますので一時閉鎖されます。姫路のために一層の助けが必要です。

ウォーカー氏夫妻と御子息は7月21日に出帆されました。ミス・ボールズも同じ船です。年次総会で、ウォーカー氏や休暇帰省中のご婦人たちのどなたかに、皆さんが、出来るだけお会い下さり、話を聞いて下さるように願っております。幾人かの方々は、五年前にミス・サンダースのお宅で、男子学校についてのウォーカー氏の話をお聞きになっていますね。私はツルロー（Truro）の主教に、年次総会の議長になって下さるようお願いしました。この方は私達の修女会の visitor（注：管理主教）です。修女たちが自分で話せないので、その働きについて何か話して下さると思います。

エレナ・フランセス修女は、六月の終わりに休暇に出発します。修女は五年近くも神戸の小さな分院の責任を担っており、修女会とその生活様式は、私達のそれとは表現できないほど違いがあります。修女がそのうちロンドン（多分聖救主病院）に行かれることと、聖マリヤ・マグダレン教会を見に行かれるよう願っています。

当地は異常に暑い夏を過ごしています。最近、中国の、今回はずっと北の方でまた悲惨な洪水がありました。ハルピン地方では、一年ごしの紛争やシベリヤ郵便が通る鉄道を破壊しようとする動きの調停が行われており、私達はまる二週間も英国からの手紙や新聞を手にしておりません。日本は今、もっと北方のシベリヤ線と連絡するための郵便船を編成中なので、この手紙が、後援会の新年度にあまり遅れないで届くようにと願っています。

この危機的な年の間も、後援会費を維持して下さっているのは本当に素晴らしいことだと思います。両方の伝道協会から、来年度の補助金削減の通知を受け取っています。そして今回も、自己基金の増加を多く望めません。日本の不況はますます深刻で、失業している信者たちのことをよく耳にします。日本には失業手当がないのです。今年そちらの後援会で集めて下さった金額に加えて、いくつかの贈り物を直接いただきました。英国から一つ二つ、当地を訪問された会員から

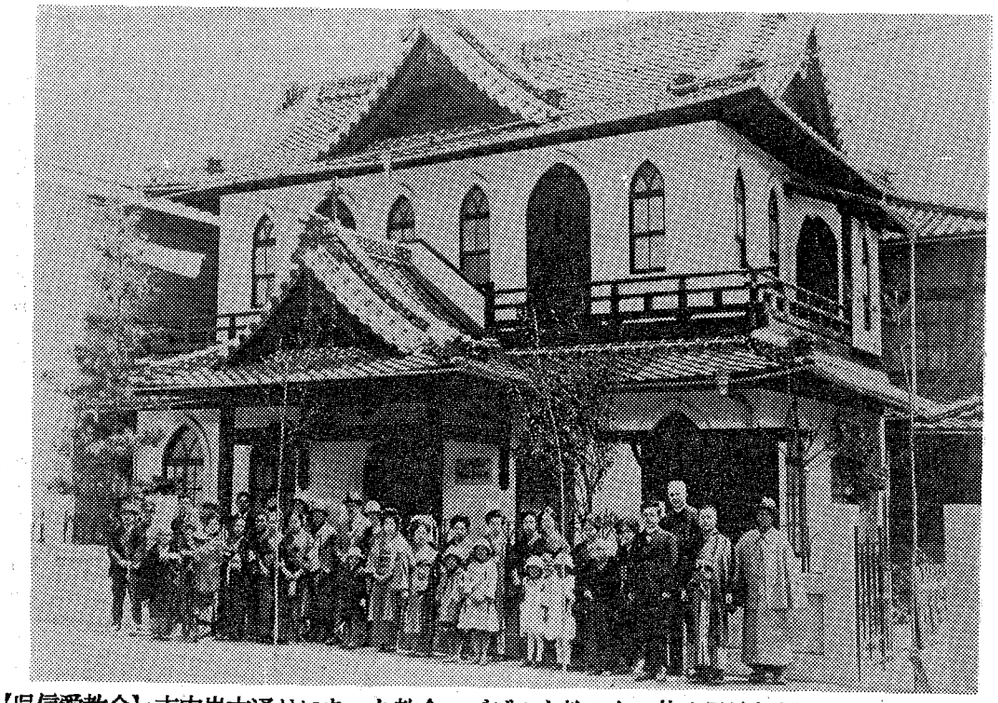
一つ、印度から一つ、カナダから二つ三つで総額約八十ポンドになりました。

満州の洪水は、もう一つのことをまき起こしました。日本の軍隊を追い詰め、数ヶ月にわたって攻め悩ましていた最も有名な中国の軍隊を壊滅させてしまったのです。これは、三十年前の南アフリカでのボーア人のフライング・バンド事件とよく似ています。今回、中国人のデ・ウエットが殺されたことは確かです。ボーア戦争は英国が戦った戦争の一つであり、日本人は、それと自分たちが満州でしていることを比較しています。そして現在、日本に対するヨーロッパの批判が、英国に対する当時のヨーロッパの批判と違っていないというわけではありません。しかし、満州について書くことは私には許されておりません。

限りなき福音の光がこの地にますます増し加わりますよう、日本のためにお祈り下さい。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル



【呉信愛教会】市内岩方通りにあった教会。バジル主教の左に片山民治郎師。1927年復活日。

書簡　第27号

一九三二年(昭7)十一月四日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

全ての聖職と伝道師のための教役者修養会をもって秋の仕事を開始しました。修養会は、9月の聖職按手節の週に、そう遠くない山の上で2日間にわたって開かれました。与えられた助けと激励に対して甚大な感謝の念を抱いております。教役者たちは、一般的な出来事や国内外のことに普通以上に緊張を感じており、彼らの多くはその仕事において孤独であり、彼らを取り巻いているノン・クリスチャンたちの圧迫を感じているので、特別な助けが必要なのです。

その後すぐに、二つの教会の建物の使用が始まりました。9月の最後の主日に「御影」の聖マリヤ伝道所を献堂しました。建物の教会として使う部分は、七十名収容できることになっていますが、当日はもっと大勢の人が入りました。日本人婦人伝道師が住むことになっている建物の居住部分も祝福しました。大衆運動やそれに類するものは日本のどの地域にもありませんが、しかしここには、いろいろな困難にもかかわらずしっかりした信者の成長が見られます。六年前には、「御影」に教会も働き人も全くありませんでした。今では、主日の朝には五十人に達する会衆があります。12月8日には静想日を、クリスマス前には今年二回目の堅信式をする予定です。

ミカエル節中の10月の最初の主日に、修復された聖ミカエル教会を再開し、新しいサイド・チャペルの祭壇を聖別しました。サイド・チャペルを持った最初の教会である聖ペテロ教会の聖別以来、聖ミカエル教会もまたそれを持ちたいと望んでおりました。彼らはベストリーの向いにある内陣の横の、一部を図書室に、一部を物置に使っていた部屋を、毎日の礼拝のためのチャペルに改造する機会を得たのです。聖ミカエル教会は、一年のこの時期美しい色に変わる蔦に覆われていましたが、全部むしり取ってしまわなければなりませんでした。淋しいことですが仕方がありません。

建物はいまや全く大丈夫であると思います。これら両方の建物はかなりの借金を後に残しました。私達はその返済を助けなければなりません。聖ミカエルの日の、聖ミカエル教会のための後援会のフェスチバルでの献金を含めて、その目的のために送って下さった贈り物に感謝しています。

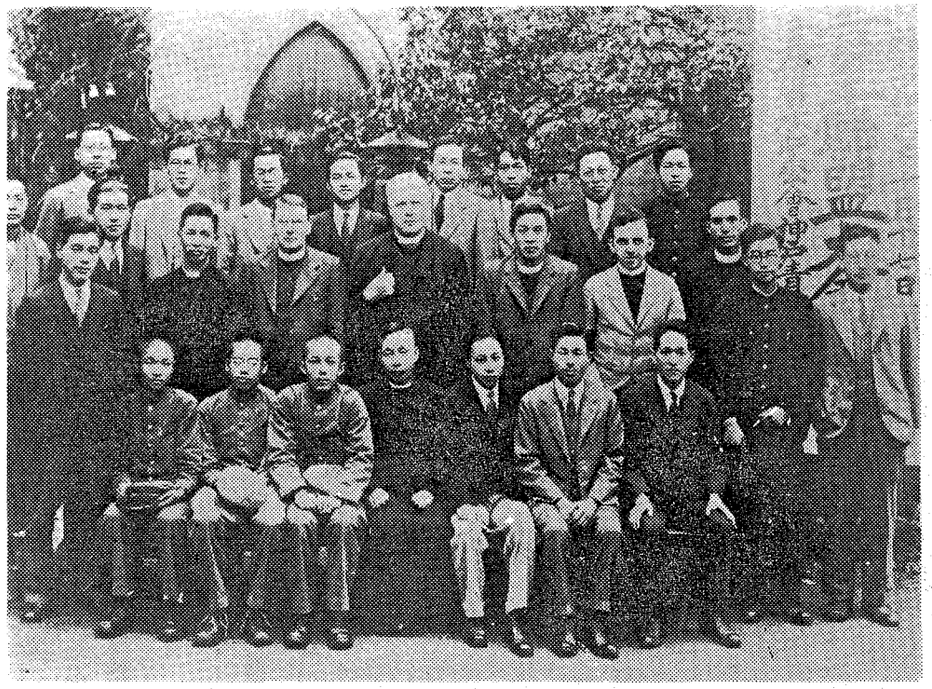
二、三日後、松蔭女子学院の寄宿舎のチャペルで聖餐式を献げる前に、学校のホールの拡張部分を祝福しました。階下

は何かと役に立つ玄関広間で、階上は普通の教室の一室を改造した音楽室で、来年生徒の数が増えるので必要となるものです。彼らは、この増築についての援助を要請しないで、彼ら自身でその経費を除々に返済していくことを希望しています。ケテルウエル司祭は、手術後見事に回復し、どちらかと云えば忙しすぎるほど仕事に励んでいることをお伝えできるのは嬉しいことです。「姫路」の高齢の牧野司祭もまた回復し、教役者修養会以来仕事に復帰しています。「淡路島」の秋田司祭は、9月の終わりに白内障の手術を受けましたが極めて順調です。先月彼が回復するまで、八代司祭と私は各々一度づつ島を訪れましたが、これが最後であるよう願っています。秋田司祭から嬉しい手紙を受け取ったところです。彼は家に帰り、約六ヶ月ぶりに自分の教会で聖餐式を献げたとのことです。

しかし残念ながら、今年の病気中の教役者の長いリストに、前回の手紙以降更に最悪の二つを付け加えなければなりません。

8月、休暇で「下関」を離れていたミス・ケニオンは、疑ってもみなかったことですが、すでに病状がかなり進んでいることが分かりました。幸い良い外科医のいる療養所におり、そこで手術も受けられ落ち着いておられます。徹底的なX線治療を受けるために急いで東京へ移り、目下治療中です。し

【ミス・ケニオン、パーカー、ストークス。】昇天教会婦人会で。



【国広文吾司祭】前列中央の人。右隣りが長男安(やすし)氏。

かし、彼女が今年中に仕事に戻れるかどうかは分かりませんし、「下関」に帰れるかどうかはもっと疑問です。というのは遠く離れているという理由だけでなく、下関は坂の多い町であるうえに、彼女の体力の回復が非常に遅れているからです。彼女の完全な治癒のため、今後の働きへの導きのためにどうかお祈り下さい。

聖ペテロ教会でアレン司祭と働いていた日本人執事国広文吾は、激痛を伴う病気のために10月9日に逝去しました。七年前に私が来て以来、この地方部で働く司祭と執事の中で初めての逝去者です。彼は大家族を抱えていて、九人の子供の内一番小さい子は今年の一月に生れたばかりです。最年長の男の子(注・安・やすし)は二十四才ですが不況のため失業中で、二番目の男の子だけが仕事についており、月たったの三ポンドを得ているだけです。国広執事はまだ五十八才で年金の年齢に達していませんでしたので、私達は家族を助けるための様々な道を見付けようと努力しています。

未亡人(注・えい夫人)は末っ子の出産後重い病気で伏せっておられ、新しい教会の建築中は牧師館で不自由な日々を余儀なくされていました。故人が夏前にひどい疲労を訴えたとき、私達は十分な理由があると思いました。彼が仕事を続けることを断念したのは、ほんの9月の始めで、医者にかかれないと聞いたので、国際病院に入れて英国人の医師に見せま

した。しかし、病気は非常に急激に進行しており、苦痛を和らげる以外何もできないことが直ぐ明らかになりました。極度の貧血症とリンパ腺の悪性腫瘍による不治のものでした。彼は大変善良で我慢強い人で、数回聖餐を受けることができ、その最後は彼が亡くなる日でした。

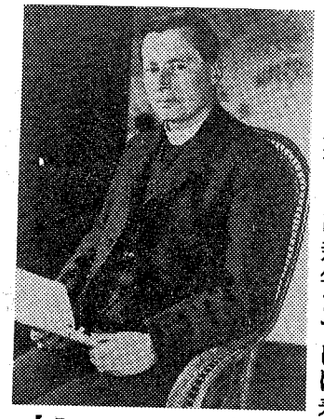
私は、アレン司祭の唱えるレクイエムを司式しました。教会は葬送式のために人でいっぱいになりました。だれも彼が好きでしたし、皆彼の家族を大変気の毒に思っています。彼はこの地方部で二十年間働いたのです。遺族のために、彼の魂に永遠の光が与えられますように、どうかお祈り下さい。

彼の死は、主の兵卒の間にしばらくは埋めることができそうもない深刻な空白を残すことになります。彼はクリスマス前に司祭に叙任され、アレン司祭が休暇から帰ってくるまで、聖ペテロ教会を管理するはずだったのです。

ストロング司祭は、活力と幸せに満ちて一ヶ月前に帰ってきました。英国滞在中のお交わりとご援助に対して皆様に大変感謝しております。彼はすでに私から「松山」の管理を引き継いでおり、すでに二回もかの地を訪問しました。彼はまた、来週休暇で帰国するアレン司祭に代わり、春のはじめまで、聖ペテロ教会を管理します。しかしその後彼は「下関」に帰るでしょう。なぜなら、ストランクス司祭が「山口」での公立学校教師の仕事を終えて、短い休暇で帰国するからです。彼が、S・P・Gの一員として、アレン司祭のように来秋日本に帰ってきて、司祭の不足をはっきり助けてくれるよう切望しております。

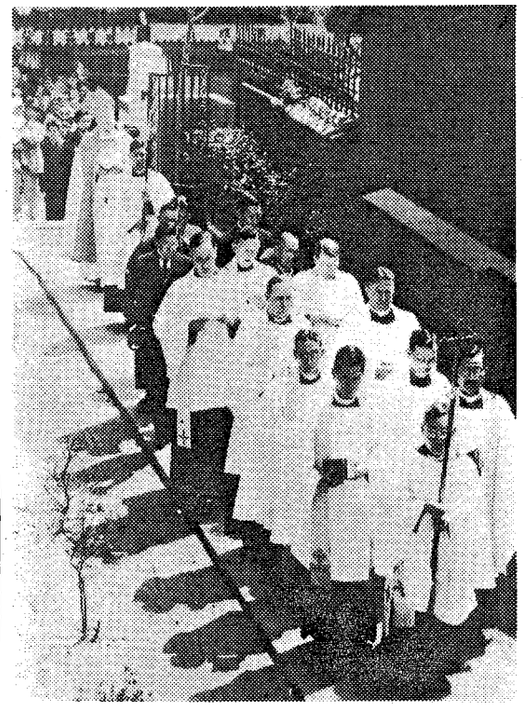
彼ら二人が留守の間は、私と一緒に住む人がいなくなりますので、聖ペテロ教会の世話が難しくなるだけではなく、神戸の毎日の聖餐式の遣り繰りもまた大変です。しかし私達が、神戸から「松山」を世話できないように、遠い「下関」のためにはストロング司祭が赴任しなければならないことになります。少なくなってしまった主の兵卒のためにどうかお祈り下さい。

ストロング司祭にして下さったように、初めて休暇をとるアレン司祭を歓迎し、親切にして下さると確信しています。彼はまっすぐに帰国しないで、途中エジプトとパレスチナに立ち寄り、クリスマスをベツレヘムで迎えたいと望んでおりますので、英国には新年までには着かないでしょう。



【J・スコット司祭】

二年前に病気休暇で帰国した当地方部のC・M・S宣教師ジョン・スコット司祭は、病気のためいく度か帰任を延期していましたが、ついに



【聖ペテロ教会の献堂式の行列】

断念することになりました。失意のうちにある彼を憶えて下さい。彼およびリチャーズ氏が一日も早く故国での仕事に慣れられるようにと願っています。

今回の便りはすこし早めに書いています。というのは、シベリア経由の郵便がハルピン付近の洪水による停滞以来、満州と朝鮮を通る最短のルートがまだ復旧しておらず、郵便物は、三週間かかってウラジオストック経由の船便で運ばれており、前より四、五日遅くなるからです。ですから、皆さんがこの手紙を受け取られるのは丁度クリスマス郵便の時期になっているでしょう。封筒には今まで通り「シベリア経由」とどうかお書き下さい。

今度お送りしたいと思っているクリスマス・カードについて申し上げておかなければなりません。というのは、それは写真で、聖別式の始めに、聖ペテロ教会の外側をまわる行列を撮ったもので、写っているのは誰かをお知らせする唯一の機会だからです。

先頭の十字架奉持者はつい先日亡くなった執事、次は昇天教会の司祭と聖ヨハネ教会の司祭、つづいて、淡路島の司祭と姫路の司祭たち、それから神戸オール・セインツ教会のフォード司祭、そして海員伝道協会のチャプレンのワッツ司祭と東京の英国人チャプレンのマーサー司祭、そしてケテルウエル司祭です。次いで教会の信徒役員を従えたアレン司祭で、

そのうしろは牧杖を奉持している八代司祭です。どれが誰かをお知りになりたかったら、参照するためこの手紙をクリスマスまで持っていて下さい。

手紙の中で、お名前をあげて感謝することを常としていませんが、ただ一度だけ神戸後援会の名誉幹事および会計として、来る月も来る月も、殆ど毎日、増え続ける事務のために忙しく働いて下さっているジョンソン夫人に対して、私自身のに加えて皆さん方にかわって大いなる感謝の意を表わしたいと思います。また、ベットフォード大学のミス・パターソンへの感謝をも申し添えたいと思います。彼女は七年間、私に新聞や雑誌を送って下さっている方々の名簿を取り扱って下さっています。同じベットフォード大学のミス・モンクハウスの名前も付け加えたいのです。彼女は、これからも増え続けていく後援会の会計管理の膨大な仕事を受け継いでおられます。「セール」その他のために忙しく働いて下さっている人たち、そして、その他の人たちにも言及したいのですが、そうもいきません。私達はこの方々にただただ感謝しています。そして、皆様すべてに対して、変わらざる御支援と、とりわけ御加祷を感謝申し上げます。

いつも皆さんに感謝している友である
在神主教　✠バジル

書簡　第28号

一九三三年(昭8)二月七日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

神戸では、ここ数年間で最も寒い冬を過ごしており、まだ終わっていません。ヨーロッパからの外電もまた猛烈な寒さとインフルエンザの広範な流行を伝えています。皆さんがそれからまぬがれますよう願っています。

昨年のように、今年も2月の手紙を、皆さんからのクリスマスの挨拶とプレゼントへの感謝をもって始めたいのです。いつでも、その方がお一人お一人に書くよりずっと早いのです。聖ペテロ教会聖別式の行列の写真のカードが、大変好評だったのを喜んでいます。

亡くなった執事の家族の安否について、非常にたくさんの方から問合せがありました。子供たちのうちでもう一人か二人が収入を得られるようになるまでの数年間、月三ポンドを支給できる基金を設け、これに執事の今年度の給与を全部入れてしまいましたので、その間は、たとえ人材を見つけたとしても、給与を払うことはできません。遺族は、当分の間牧師館にそのまま住むことを許されるでしょう。国広夫人は再び重病に陥っています。どうか、彼らのために続けてお祈り下さい。

ストロング司祭は、「下関」へ大斎始日に間に合うように帰ります。その後はほかに誰もいないので、私が聖ペテロ教会の仕事を引き継ぐことになるでしょう。

去年の末に、下関の地主が早急に土地を売りたがっているということを聞きました。下関の教会は、これまで何軒かの家を借りてきましたが、今のが一番快適で最良の場所にありますので、出来ればその土地を失うのを避けようということに決めました。しかしそのためのただ一つの方法は、その土地（建物ごと）を買い取ることです。千ポンドですが、ちょうど今は為替相場が良好なので多分少し安くなるでしょう。これは突然で予期していなかった必要です。後援会と私自身の両方の利用できるお金全部を使うつもりです。後で、後援会が援助している基金(修女会、奨学金等々)に返済したいと思っています。このような特別な訴えをお許しくださり、皆様方どなたでも、また後援会に入っていない皆さんの友人方が、下関のためにたとえ少しでも援助して下さるなら、それはとても素晴らしいことです。ある方が、本国で一度公に募金してはどうかと提案して下さいましたが、あらゆる宣教の分野が、このように困難な状況にあるとき、公の募金を付け加えるべきではないと思い、かわりに、この後援会便りでお願いするにとどめることにしました。皆様のいつもながらの寛容に加えて援助を賜りますならば、ストロング司祭ならびに私にとって大きな喜びであります。

「下関」は重要な港であり、最近の出来事でますますその重要性を増大していますが、一方では、戦略的な位置にあることが別の困難をつくりだしています。というのは、そこに日本人以外の者が財産を所有することは、日本の法律に反することになるからです。私達の教会と土地の多くは、一部は日本人、一部は宣教師で構成されている合法的な団体によって保有されています。勿論すべては、いつの日にか日本聖公会の財産になるでしょうが、まだその時期は来ていません。「下関」の教会の敷地もまた、全公会のために保管されるでしょうが、日本人によってそっくり保有されるべきです。手続きのため遅れるかも知れませんが、全ての折衝が今月末までに完了することを願っています。信者たちが、土地を買うために過去五年間少しづつ積立をしてきました。その総額は二百ポンド足らずですが、それでも大きな助けになるでしょうし、今回他の基金から借りたお金の返済のために今後も続けるでしょう。勿論、払い続けてきた借地料は節約できます。

残念なことですが、ミス・ケニオンは下関のような遠隔地での仕事に戻るべきではないと決定せざるを得ませんでした。

彼女は、ときどきX線治療を受けなければならないので大阪の帝国病院へ行っているからです。それで彼女は、神戸の聖ペテロ教会の地区の辺びなところに小さな家を見つけました。教会から二マイル、松蔭女学校のもっとむこうなのですが、バスの連絡が便利なところです。彼女の家の近所には、数軒の信者家族がありますが、教会の日曜学校は子供たちには遠すぎます。そこで、クリスマスから仕事を再開したミス・ケニオンは、自宅で別の日曜学校を始めています。

今までの手紙の中で、ミス・シメオンのことを申し上げなかったと思います。彼女は下関に住んでいる英国婦人で、英語を教えています。ミス・ケニオンの病気以来、勿論フルタイムではありませんが教会を大いに助けてくれています。ストランクス司祭は、汽車で三時間もかかるところに住んでいるにもかかわらず、土曜日の夕方から日曜日まで下関に滞在し、言葉もかなり上手になり、小さなグループの人たちのためにサクラメントの準備をしており、私は秋の終わりにその人たちの堅信式をしました。彼は、イースターに間に合うように故国に到着したいと3月の始めに出帆しますが、私が願っていたようにS・P・Gに受け入れられ、休暇ののちにはミッションの一員として帰ってきます。

私達はいつも、休暇で帰国途上の仲間たちの旅路の安全を祈ったり、戻ってくる他の仲間たちを迎えたりしているように思います。ケテルウエル夫人は、子供さんたちとイースターと夏の休みを過ごしまた帰ってくるために、先週故国に向けて出航されました。エレナ修女も一緒に行かれました。エレナ修女は、五年前に神戸エピファニー修女会が始められたときの二人の修女のうちの一人で、のちに東京へ移られた方です。

ミス・リーは、松蔭女学校の卒業式の少しまえに帰ってこられます。それは3月20日のはずです。その直後、ミス・ストークスとミス・ベイリスが英国に向け出帆します。ミス・ベイリスは、残念ながらもう帰ってきません。彼女は、家庭の都合で一期間だけの奉仕に来ていたのですが、私達が、彼女を得て幸せであったように、彼女もここで幸せであったことを願っています。彼女は、学校の仕事のほかに「須磨」の聖ヨハネ教会を熱心に助け、お蔭でかなり多くの松蔭女学校の生徒が信者になり、聖ヨハネ教会の受聖餐者になっています。

ウオーカー氏は、再び男子学校の校長の働きを続けるために、イースターに戻ってこられますが、学校が、男の校長なしで運営されたのは初めてのことだったと思うのですが、ミス・スミスのもと実に素晴らしくなっています。臨時でしたが、男子学校を助けるために来て下さったミス・サンダースに大変感謝しています。男子学校での二年間のあと、イース

ターから一年間松蔭女学校で教えることを約束して下さっています。このような小さなスタッフなので、私達はいつも休暇不在のためのやりくりをしているように見えますが、それでも、いろいろな観点から見て、定期的に休暇をとることは大切なことであると確信しています。

ミス・ベイリスは、クリスマス前に喉の敗血症にかかって気分がすぐれず、クリスマスの週に扁桃腺を切除しました。しばらく健康回復の時を過ごした後、かなり良くなったようです。

正月の初め、最悪の寒さが始まる前に、東京の修女会本院のチャペルで婦人宣教師のための静想を指導しました。その最中に、ミス・ホームズが悪寒を訴えられましたが、腎炎にかかっていることが分かりました。幸い早かったので、1月の半ばを病院で、その後十日を神戸の友人宅で過ごされたあと、先週「姫路」に帰ってこられましたが、いましばらく静養しなければなりません。これで、私達の病気のシリーズがおしまいになることを心から願っています。

私達は、ほぼ十八ヶ月ごとに地方部会を開いており、次回は5月2日と3日、全教役者のための教役者修養会に先立って(願わくは)開かれる予定です。場所はまだ決まっておりませんが、神戸からほぼ二百マイル西にある「広島」かその近くで開きたいという強い希望があります。「広島」は人口三十万の大都市ですが、そこでの私達の働きは強くはありませんので、地方部内のこの地域についてもっと良く知ることは、私達皆にとって有益なことでしょう。すぐ近くに、日本で有名な景色の一つである美しい「宮島」があります。

「広島」の地域は、当地方部内でC・M・Sが援助している三つの地域のうちの一つです。C・M・S本部は昨年の夏、年に五パーセントづつ削減して、二十年で中国と日本から撤退するとの意図を表明しました。私は、この決定は訂正されると信じています。というのは、教会がそのような割合で自給を進められないことは明白ですし、いくつかの拠点とともに、まだ教会も働き人も全くない地方部内の大都市をも共に放棄することを意味しているからです。「広島」の日本人司祭(注：山内豊吉)は、そこで十年以上も働いておられます。この春神学校を卒業して伝道師として働き始めるC・M・S神学生の一人(注：小池俊男)が、広島に配属されて、この司祭と共に、かの地と周辺地域で働くことになります。

ミス・ウォージントンもまた「広島」で働いています。彼女は勇敢な婦人のお一人で、定年退職の年齢に達しておられますが、年金を得て働きを続けるために帰ってこられました。皆さんのお祈りの内にこの方々、ヨハネ山内(注：豊吉)、小池俊男、ホノリア・ウォージントンをどうか憶えて下さい。

神学生といえば、獲得したいと願っていて、後援会がその

養成を援助している今春卒業予定の神学生のことですが、彼は、昨年の春に神経系の障害を起こし、数ヶ月入院しました。その後、かなり回復し、学業に戻り卒業することに励んでいます。間もなく届くと思いますが、彼の健康診断の報告を待っています。彼、ヨハネ末好（注：時信）のためにもまたお祈り下さい。他の三人の神学生の養成は順調にいっています。

主教会の秋の集まりで、オックスフォード運動百年記念のための日本聖公会による公式祝典の準備委員会を任命することを、議長が要請しました。主教たちはこれに同意し、中央集会を聖霊降臨の週に催すことが提案されています。財政上のことを含めていくつかの障害があります。というのは、このような中央集会は、旅費が高くつくからです。しかし、信者たちにとって、信仰の偉大な遺産や教会の慣行をより自覚する良い助けになることですから、この集会が開かれるようになることを願っています。聖霊降臨節では、本国や他の地域での主要な祝典より早い時期になりますが、7月のじめじめした暑さは、日本でのこの種の集会には大変不適当なのです。本国での百年記念式典が、わが主の来臨と、この世への神の国の到来の熱望への刷新に導いて下さいますように。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

【広島降臨教会の教役者・信徒】
左から、山内豊吉司祭、小池俊男伝道師、有田喜太郎氏、ミス・ウォージントン、渡辺達一氏。

書簡　第29号

一九三三年(昭8)五月十二日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

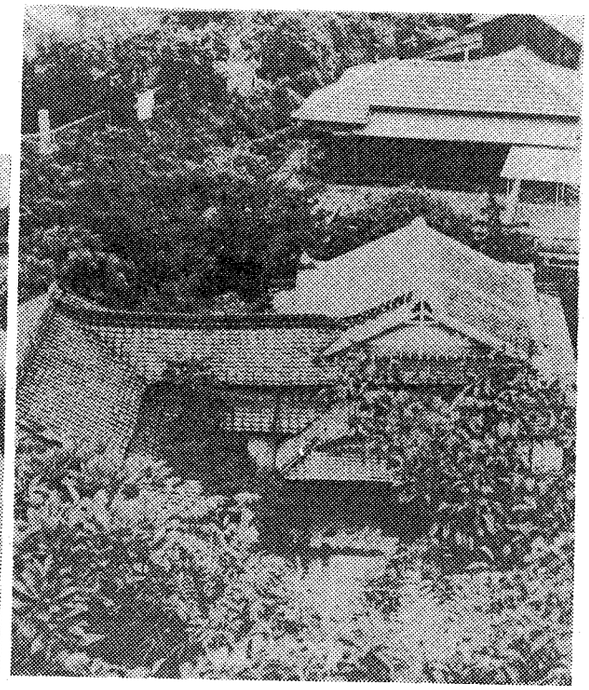
四、五日滞在の予定でストロング司祭が神戸にやって来ていましたが、昨日任地に帰って行きました。堅信式のために留守がちな私のかわりに、この前の日曜日は、聖ペテロ教会の礼拝司式をしてくれました。これは別のことですが、私は大斎節の初めから、独り住まいをしておりますが、アレン司祭が秋の終わり頃帰神するまで、もう少し続けなければならないでしょう。アレン司祭を歓迎する聖マリヤ・マグダレン学校での後援会の会合について、面白い描写ではなく、二、三関心のあることを、本人自身とミス・ボールスから聞きたいと思っております。

ストロング司祭は、地方部の西の端での働きに挑戦することになりました。「下関」の信者たちは、また定住司祭が来てくれることになったので喜んでいます。それだけではなく、ストロング司祭は、四国北部の「松山」の管理も続けてくれることになりました。彼は、月に一度下関から内海を横切って四国に渡り、毎回三、四日滞在し、大抵、四国の北岸をさらに東寄りにある発展中の大きな港「今治」も訪問します。ここには、三、四人の信者が住んでいます。

一方、本州側、下関のある山口県では、最近移ってきたのか、新しい場所あちらこちらで信者が発見されました。ストロング司祭は、彼の担当地区に行くのに、飛行機が欲しいと云っております。一番近くの聖公会の教会でも、急行列車で五時間近くかかるところにあるのです。彼のために特別にお祈り下さい。

「下関」の教会の土地は、一人の日本人司祭とある熱心な信徒の名義（注：加藤九十九司祭と、当時貴族院議員であったヨハネ奥田勇氏と思われる）で買いました。勿論、教会を建築するのはもっと先の話ですから、土地の上にある今の家は、一部を礼拝堂として、一部を牧師館として当分使わなければなりません。土地買収のために流用した他の基金への返済は、この難しい時期にも関わらず、予想以上だった後援会からの多額の援助金に助けられて始めました。すでに下関のために特別のご寄附を下さった方がおられます。有難いことです。さらに多くの方が関心を寄せられ、下関を助けて下さると嬉しいのですが。今の都合のいいポンド高・円安にも助けられております。いつも受け取っている後援会からの援助金のポンドより、多く円を入手できるのです。しかし、S・

【下関の教会と教役者】
左からストロング司祭、岡上千代伝道師、加藤九十九伝道師、ミス・ボールス。



P・GとC・M・Sからの定額援助金の場合は、この差益は、ロンドンの両伝道団体の赤字を埋めるために戻さなくてはなりませんので私達の収入プラスにはなりません。しかし一方では、今の都合のいいポンド高・円安が続くとなると、援助総額が減らされても、スタッフの人数を減らさずに来年も維持できそうだということもありますが、これらは全て、心配の種で、今の世界の混沌とした情勢の中で、将来への方針の立てようがありません。現在の国際関係は、日本の教会の働きを困難にしております。ちょうど第一次世界大戦の時の英国のように、極端な愛国宣伝が行われております。私達働き人が、主が弟子たちにおっしゃたように『蛇のごとくさとく、鳩のように素直』にふるまえるように、かつ神の御前に謙遜になれるように祈って下さい。そして何よりも、私達が自己保身を考えず、人々を我々にではなく、ただひたすら主に導くことができるようにお祈り下さい。日本におけるクリスチャンの小さき群れが、キリストの証しとなり、キリストの御復活の力に満たされますように。

イースターの直後、下関の病院で一日本人婦人（注：下関教会の教籍簿によれば、野村忠子）が逝去しました。私自身がごく最近堅信式をした婦人でした。彼女は、息子さん一家と同居しており、みんな信者で、下関から遠く離れた小さな田舎町に住んでおりました。間もなく、別の田舎町に引越し

することになっていましたので、一家は、お母さんのお葬式を自宅でするのを嫌い、下関ですることを決断しました。しかし、一家が下関で滞在する場所もないので、お葬式までの二日二晩を、一部は教会になっているストロング司祭宅に滞在しました。最後の晩など、遠いところからの親戚もお世話になりました。勿論、日本人ですからベッドは必要ありません。畳の上に蒲団を敷き毛布をかけて寝ますが、皆さん全員を泊めるのは大変だったようです。ストロング司祭は、二晩とも寝られなかっただろうと思っております。

ストロング司祭の広い縄張りのもう一つのエピソードを申し上げましょう。「松山」市内のある主要銀行に新しい支店長が着任してきました。この支店長の奥さん（注：松山聖アンデレ教会の教籍簿によると、モニカ中山愛子と推定される）は、前の任地のある教会で八年間もキリスト教の勉強をしておられました。しかし、洗礼を受けることについては、ご主人の了解はえられませんでした。最近、奥さんがご主人にとても喜ばれることをなさったことがあって、ご主人が「お前はほんとにいい妻だった。何かいいプレゼントをやりたいが、何がいいか」と云ったのです。とたんに奥さんは、「洗礼を受けてもいい？一番のプレゼントですけど！」と答えました。ご主人は、ほんとにびっくりしましたが、しばしの沈黙の後、「いいだろう」と奥さんの受洗に同意しました。奥さんはさっそく、彼女を導いてくれた婦人伝道師（注：岡井ちえ）を訪ねて喜びを共にしました。そして、準備をし、個人懺悔後、復活後第一主日に、イースターの聖餐式のために松山にきていたストロング司祭から洗礼を受けられました。

この実話は、奥さんの熱心な求道の姿勢と、この国においてしばしば見られる夫婦のありかたを示していると思います。

この前の手紙で、そうしたいと申しあげましたが、広島市で（注：小池主教談によれば、会場は広島教育会館）今月の初め、地方部会を開き、そのあと教役者修養会をやり、またそのあと地方部婦人会の大会をやりました。私は、日曜日から次の日曜日までの一週間、一連の集会のため広島で缶詰めになっておりました。金曜日の午後、一切の会議から開放されて、大勢で、広島から僅か一時間の「宮島」を見物に行きました。宮島は、内海で一番美しい島で、島にある大変有名な神社には巨大な門があります。この「門」は「鳥居」と呼ばれ、日本特有の風景に一役かっています。ここ宮島の特別大きい鳥居は、干潮のとき以外水上にニョキーと出ていて、恒例の大祭(注・管弦祭)には、華やかな小舟の行列がこの下をくぐります。この写真か幻灯写真をご覧になった方がおられるでしょう。いつか絵葉書をお送りしましょう。宮島は、日本で美しい風景を呈する場所の一つです。

地方部会では、いろいろと議案報告を承認しましたが、大

部分はくだらないものでした。しかし、日本人聖職と教役者のための年金制度の改訂に関する議案は重要な案件でした。どの審議ものろのろしていたのですが、特に、自給に関しては時間をかけて審議しました。

二日目の朝の聖餐式は、感謝の礼拝でした。今月は、大阪市が現地人主教を迎えて自給宣言をし、神戸地方部が分離独立を始めて十年目にあたるのです。

統計は、ときに危険なものですが、私の見た最新のもので、地方部内でS・P・Gによって支援されている地区の統計によれば、この十年間に、その地区の現在受聖餐者数（一年に一度以上陪餐した人）は、五二一人から六二八人に増加していました。これは、如何に教会の会員数が大人口の中で少数派であるかを示すとともに、他方で進歩をも示しております。

地方部の終わった後、教役者修養会の開会礼拝の晩祷で、広島で勤務している青年小池俊男の伝道師認可式をしました。この前の手紙で、彼のために祈って下さいとお願いしました。引き続き彼のために祈って下さい。

かって倒れたことのある神学生ヨハネ末好(注・時信)のためにもお祈り下さい。医者は、先ず試用期間なしに頭脳を使う勤務につかせてはいけないと云います。そこで、下関でストロング司祭の管理下で働かせるために派遣しました。ストロング司祭が松山に出張している日曜日は、彼が一人で下関の礼拝を守り、今のところ立派にやっています。

次の降臨節の聖職按手節に、一人の執事を司祭に叙任し、同時に、二人の伝道師を執事に叙任したいと思っております。執事はパウロ古本(注・正夫)で、伝道師はヨハネ信岡（注・修吉）と伊墻八束です。皆さんの祈りの中に、彼らを憶えて下さい。

彼らは、聖霊降臨日のあとの一週間ここに来て、聖職試験の前半を受け、そのあと、東京でのオックスフォード運動百年記念祭に参列します。

この手紙は、皆さんのお手許に届くのは遅いかも知れませんが、ひょっとして早く届いたら、お祈りの中にこの日々を憶えて下さい。

7月7日水曜日の晩から、9日金曜日の晩まで、この二日間にいろんな行事があって、全部で十九の説教や講話があります。第一日の朝、皆さんご存じの唱詠聖餐式の司式をし、『オックスフォード運動の訴えるもの』と題して講話をし、八代司祭は『罪の問題と救い』について講話することになっております。

堅信式のため、西四国と下関に行き、次の週は、東四国を巡回します。可哀想なのは聖ペテロ教会です。教勢が低下するでしょう。とにかく定住司祭なしで生き抜いて行かなければなりません。

日本聖公会の青年連盟の夏期学校(注・大会)が、7月20日の夕刻から22日の夕刻にかけて、六甲山上のテントで催され、23日の日曜日の朝は、神戸市内の各教会で彼らのための特別礼拝があります。両日の朝、六甲山上の小さなチャペルで聖餐式がありますが、全員が詰め込めるかどうか心配です。私自身としては、この会のために例年より早く山に上るべきなのでしょうが、毎日曜日には諸教会の礼拝のために下山してこなければならないので断念しました。どうかこれらの集会を憶えて下さい。参加者に素晴らしい霊的な助けがありますように。がんばり屋のミス・ケニオンが、大斎節が始まった頃二階から転落し、六週間もベッドで寝ていましたが、今は元気になりました。他にも病人がいましたが、皆よくなりました。英国からやって来たり、帰ったりの人事往来があります。ミス・アンテオネット・ファウルスが決心され、新任者としてS・P・Gの昇天神学校で訓練を終え、9月には日本にむけ出帆します。数ヶ月日本語のお勉強のあと松蔭女学校に着任したいそうです。ミス・ファウルスは、5年ぶりに与えられる新任者です。歓迎したいと思います。

どうか皆さんも、故国での百年祭を盛大にお祝い下さい。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

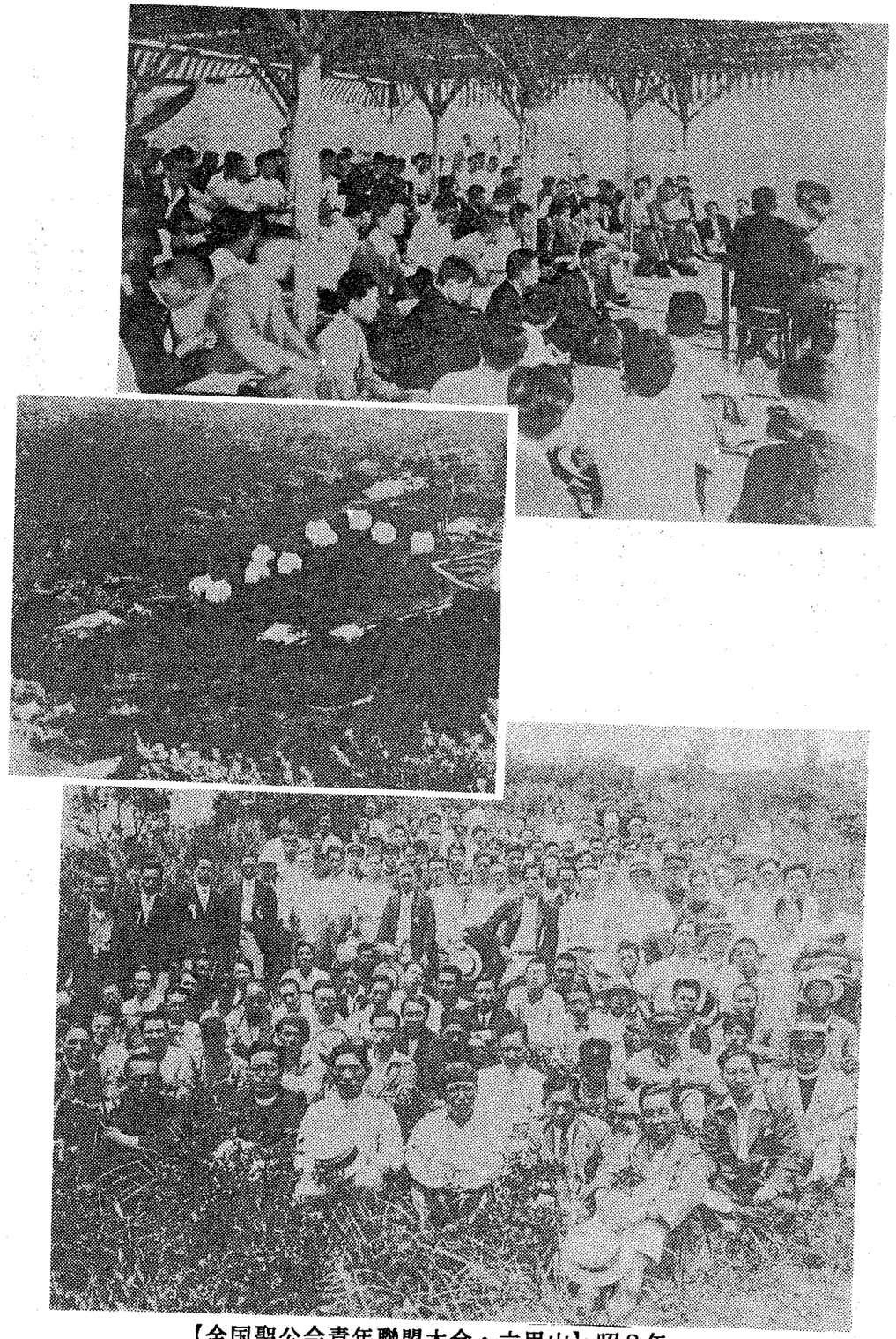
書簡　第30号

一九三三年(昭8)八月十四日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

私達は、故郷でのオックスフォード運動百年記念行事の報告の手紙を入手しているところです。せんだっての手紙が遅くなり過ぎましたので、日本での百年行事の日々を、お祈りのうちにご記憶いただけなくて残念に思っております。

聖霊降臨節に東京で持った二日間を非常に感謝しております。出席者の数は、あらゆる予想を上回りました。すべての礼拝と集会は、アメリカ・ミッションによって設立され、日本に於いて私達の教会の最大の教育機関であるセント・ポール大学(注・立教)で行われました。大学の礼拝堂は、優に二五〇名を収容できるでしょうが、毎回三〇〇名またはそれ以上の出席者がありました。学長である米国人補佐主教（注・C.S.ライフシュナイダー）が、大学の大食堂を全部私達に開放され、かつ学生たちに、その両日にわたり他の食事も手配するように指示されました。最初の日の朝、私が司式した聖霊の唱詠聖餐式(High Mass of the Holy Spirit)は、朝早



【全国聖公会青年聯盟大会・六甲山】昭８年。

かったのですが三〇〇名以上の陪餐者がありました。故郷での百年記念行事の膨大な出席者の数に比べれば少数ですが、私達孤独な地方の教役者にとっては、感慨深いものでありましたし、私達の多くがこのような礼拝をかって見たことがありませんでした。

東京地方部の野瀬司祭(注・秀敏)が補祭。この方は十年以上も前に、英国というよりケラム(修道院)に学ばれた方です。八代司祭が副補祭でした。中部地方部のカナダ・ミッションのウオーラー司祭は、かって南アクトンの諸聖徒教会の教役者だった方ですが式典長をつとめられました。いくつかの説教があり、書簡が読まれましたが、非常に良いものでしたし、全体の雰囲気はまことに敬虔なものでした。

六週間後に、六甲山上のキャンプで青年の夏期学校（注・全国聖公会青年連盟の大会）を催しました。また今回も参加者は期待したよりもはるかに多数でした。山頂の小さな礼拝堂を使えばいいだろうと云ったのですが、詰め込んでも五、六〇名しか収容できず、参加者は時間によっては二百名を越す人数で、二日目は、聖マリヤ・マグダレンの日でしたので、私が聖餐式を捧げる日になりましたが、約一五〇名の陪餐者がありました。

私達は一軒の日本家屋を使い、全室を開け放ち、家の両側に日除けを出して回りの敷地を利用し、臨時の礼拝堂を作りました。特に、ストロング司祭が「神の王国」について非常に貴重な論文を読まれました。土曜日の午後の全体の討論会では二〇人以上の人が発言しました。少々疲れ気味でしたが、青年達は確かに熱心でした。

翌日、日曜日には、神戸にある我々の全ての教会で、キャンプ参加者の中から特別な説教者が話しをし、夜は、主な三つの教会で特別伝道説教会をしました。暑いときにもかかわらず、多数の参会者を得て有益な催しとなりました。

これらの二つの集まりに加えて、８月の第一週にもう一つのサマー・キャンプを行うことに同意しました。午前中は、聖餐式と二つの説教を含めて静かに過ごし、正午に代祷を行いました。先の二つの集会は日本全体を対象とするもので、最後の集会は、東京教区によって準備された日曜学校の先生たちのための例年のもので、富士山のうしろの美しい湖のほとりで開催され、百名を越す陪餐者がありました。

二ヶ月の間にこのような三つの集会に加わり、全て熱心な人々の仲間入りをしたことは、心身をさわやかにし、また勇気づけてくれるものとなりました。最終の集会では、日本人でない参加者は私一人だけでした。

最近、地方を旅行中の二つの出来事が、特に心に残りました。

昇天節に、「大洲」で堅信式を行いました。ここは四国西

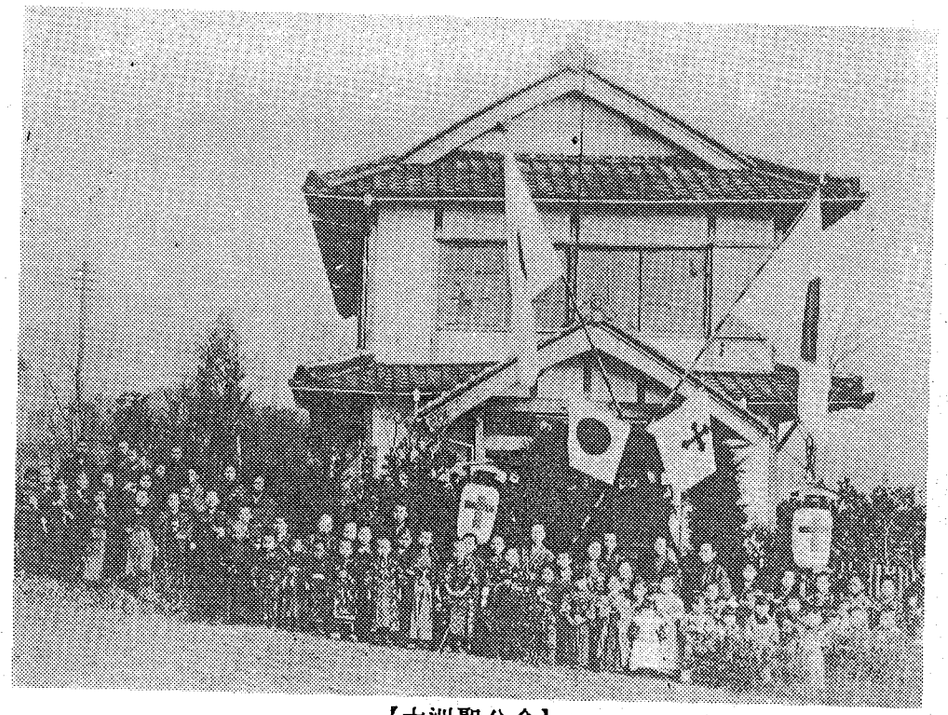
部の小さい高台の町で、私達の教会があります。おりしもこの地方は大麦の刈り入れどきで、日課でルツ記を読むことは非常に適切な話題でした。そこから、四国の西岸の町「宇和島」を初めて訪ねました。大洲では早朝聖餐式を献げ、新たに堅信式を受けた人々が初陪餐をしました。その後、大変な山々(四国の風景はとても美しいのですが)を越えて三時間も車を走らせ、最後は一、〇〇〇メートルほどジグザグ道をくだって港町に到着しました。私達の地方部には、教会もなく教役者もいない町村がたくさんあり、同様な市も一ダース以上ありますが、宇和島もそのような市の一つです。土地のある医者の家で聖餐式を献げましたが、時は正午で、六名の陪餐者がありました。司式者の私だけが断食をしていましたが、彼らは、断食して聖餐を受けるということなど聞いたこともないでしょうし、聖餐を受ける機会は年に三、四回しかありません。これら遠く離れている信者たちのためにもう一度、できれば再々お祈り下さい。これらの信者たちのことは、いつも私の心の奥底にあり、とても気にかかっているのですが、何をしてあげることができるでしょうか?

その宵、町の中心部にある旅館に宿泊し、街路の傍らの小さな台に立って説法している、日蓮宗の若い熱心な僧侶の話に耳を傾けました。日蓮宗は非常に愛国的な宗派で、彼は、現今の極端な愛国主義的感情を利用して、信徒を得ようとしていました。彼らは歪曲したキリスト教の教えをたくさん使います。日蓮宗の象徴の一つは蓮(はす)ですが、彼は蓮についての教えを、聖ヨハネの「ことば」の教理と比較していました。多くの点で、キリスト教徒からの攻撃が日本の仏教徒を刺激して、新たな活気を誘っております。

それから二週間後、四国の東部で、遠く離れた町での夕べの礼拝を終えて、泊まっていた執事の家のある市(注・徳島・古本正夫師宅)に夜遅く帰ってきたときのことです。夜も11時を過ぎた頃、庭の向う側の家のラジオの拡声器が鳴っているのが聞こえました。驚いたことに、それは日本語ではなくて、私が生れてこのかた一、二度聞いたことのある英国人の声でした。なんと、このように思いがけず英国国王の話しておられるのを聞くことは、極めて感動的なことでした。お言葉を聞き取ることはできませんでしたが、言葉の調子と、フランス語で話されるときの違いで、間違いなく国王とわかりました。それは世界経済会議の開会式でした。概して、日本のラジオでは海外からの声を聞くことはできません。なにか海外から中継されることがあっても、せいぜい年に一、二度です。大英帝国の全領土はあまりにも遠く離れていて、中継なしでまともには聴取できません。一般的に云って、日本のラジオ放送は明らかに「前向きにやろう」としており、ほとんどの家庭も店も拡声器をもっておりますが、スイッチを切ろうなどとはまず致しません。最悪なのは、私が大いに利用している沿岸航路の汽船です。これに乗っていると、常時鳴っているラジオの音から逃れることは事実上不可能です。

先月、聖ペテロ教会でちょっと興味深いことがありました。以前お話ししたように、ミス・ケニオンは自宅で信者の子弟のために別な日曜学校を開いています。その近くにある婦人の信者が住んでおられます。彼女のご主人は、キリスト教に大して興味を持ったことがありませんし、三人の女の子たちも洗礼を受けておりませんでした。しかし、彼女たちがその日曜学校に通うようになった結果として、洗礼を受けたいと父親の許しを求め始めたのです。子供たちの熱心さに打たれた父親は、ミス・ケニオンを訪ね、キリスト教について話しを始めるようになったのです。先月、彼は洗礼志願者とされ、三人の娘さんたちは、次の日曜日に聖餐式に先立って洗礼を授けられました。三人は、お互いに最も近い関係にある三人の聖人の名、マーガレット、(マグダラの)マリア、アンの洗礼名をもらいました。夏がすんだら、父親も洗礼のための指導を受けることになっております。この人々のために、皆さんが祈って下さると確信しております。

この前うっかりして書くのを忘れていましたが、ストランクス司祭が本を出されました。その本は、二年ほど前に書かれていたのですが、悪い時代のことで、出版が遅れていまし



【大洲聖公会】

た。しかしながら、今年の初めに S・P・C・Kによって出版されました。著者が「インドの聖徒」と名づけている聖フランシス・ザビエルの伝記です。記憶しておられると思いますが、ストランクス司祭は三年間、山口で公立学校に教員として教鞭をとっておられた方であり、聖フランシスは、日本でどこよりも長くこの山口に住み、キリスト教を教えたのです。皆さんは、きっとこの本を興味深く読まれるでしょうし、私は魅力的な本だと思いました。

その後、この地方部の公立の学校で教え、「松山」で教会の働きを始められたリチャーズ司祭も、本を出されました。しかし、皆さんがこの本に同じように興味を持たれるかどうかは疑問です。この本は、日本の会社によって出版され、「限定形容詞用法の実際的手引き」と表題がつけられております。英語の冠詞 a, an, the の正しい使い方を日本の学生に教える最良の方法について、長年苦労して研究された結果の労作です。私達は、この二人の著者を全く誇らしく思っております。

この前お知らせしたのですが、秋には新任の宣教師ミス・ファウルスを迎えることになっています。その後聞いているところでは、S・P・Gは、すでにミス・ベイリスの後任のもう一人の新任の人を任命しているそうです。彼女の名前は、バイオレット・ウッド。彼女がミス・ファウルスと一緒に来られたらいいと思っております。そうなれば、お互いにこの恐ろしく厄介な日本語を同時に習い始める友人を持つことになり、助け合えると思うからです。

そうこうしている間に、ミス・ボールスはこちらへの帰任のため先週英国を出帆されました。彼女が帰ってこられたら、ミス・ホームズが離日され、多分、皆さんがアレン、ストランクス両司祭の話を聞かれる年次総会には間に合うように故国に着かれるでしょう。

フォード司祭は10月に休暇がくるのですが、親切にも出発を次のイースターまで延期して、私の遣り繰りがしやすいようにしてくれました。フォード司祭は、聖ペテロ教会、聖ミカエル教会に続いてオール・セインツのベストリーを、受肉の聖堂 (the Chapel of the Incarnation)と呼ばれる小聖堂に作り替えてくれました。私は、聖母訪問の祝日の前夜、その聖堂の新しいオルターを聖別しました。

今年の暮れに何か素晴らしいことが起こらない限り、今年の後援会からの援助の総額ははっきり下回ることになると思っております。しかし、落胆してはおりません。困難な時代にもかかわらず、いろいろな財政的援助が実によく維持されているのは、素晴らしいことだと思っております。後援会を通じていただくものに加えて、昨年同様、今年も八〇ポンドに近い額を直接に頂いております。

この手紙を、これからの二つの行事をお知らせして終えますが、これらのために皆さんのお祈りをお願いいたします。

9月12日の夕べから、16日の朝まで、韓国で宣教師司祭達の静想を指導することになっております。また9月末には、S・P・Gの総主事キャノン・ワッディーが神戸に到着される予定です。同師はいま、S・P・Gの支援を受けている極東の諸教区をご訪問中ですが、南東京地方部へ行かれる前に、神戸で私達と十日かそれ以上過ごされることになっております。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第31号

一九三三年(昭8)十一月六日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

10月は、S・P・Gの事務局長キャノン・ステーシー・ワッディー氏の日本来訪で手一杯でした。同氏のご来訪の一つの目的は、主教たちと、S・P・Gの主な基金と、神戸後援会基金のようなもろもろの特別基金との関連に関する問題について討議するためです。神戸地方部に関するかぎり、このことは、ワッディー氏がお国に帰り着かれる来年早々までに最終的な解決をしないだろうと思います。ご訪問について、もう少し詳しいことを書いてみましょう。

同氏が、私達の働きと抱えている問題をもっと立ち入って理解しようと来日されたのですから、本国で、より効果的な援助をして下さると思います。同氏は、行く先々で「査察や批判をするために来たのではない、一人の友人として、本国の友人たちの代表として来た」と説明しなければなりませんでした。これは、米国の宣教団体が定期的に委員会を派遣して来るからで、現在のは、公式には「実情理解委員会 (The

Fact Finding Commission)」と呼ばれているのですが、非公式には、「欠陥発見委員会」(The Fault Finding Commission)として有名なのです。

ワッディー氏は、日本食がお好きでなく、あるところでは彼が餓死するのではと心配するほど少ししか食べませんでしたし、旅館や家やお寺にあがるときに、靴を脱ぐ習慣も嫌いでした。しかし、全般的には本当に日本が気にいり、全て私達がやろうとしていること、もし基金が回復すればやれる発展に大変熱心に興味を示されました。韓国へむけて下関から出帆される前に、最後に行かれた観光地は「宮島」で、それから、下関で教会の働きをご覧になりました。

ワッディー氏が東京に来られる直前、二日間の主教会の中で、二つの重要で興味深いことがありました。第一は、マキム主教が主教会議長(Presiding Bishop)を辞任されたことでした。中国と日本両国の聖公会には、大主教はありませんが、代わりに主教会議長という米国聖公会のやり方があります。いつも同じ教区・地方部の主教ではなく、三年ごとに選ばれます。しかし、初代の主教会議長であったビカステス主教逝去以来ずっと三十七年間、北東京地方部の米人主教マキム師が私達の主教会議長でした。同師は、四十年前に主教に聖別され、今八十一才なのですが、夏の終わり、病気のため主教会議長を辞任されたのです。

後任には、南東京地方部のサムエル・ヘーズレット主教が選ばれました。素晴らしい選びです。同師は、来日されて三分の一世紀、主教になられて二十年近くになられます。

いま一つの東京での出来事は、カナダの教会の代表団が来日されたことです。カナダが後援している中部日本の現主教(注・ハミルトン)が来夏退職された後、日本人主教を持とうとしていることを討議するための来日です。日本とカナダ双方の法規によれば、地方の教会が主教の給与を払えるようになるまでは不可能なことで、その点では、現在の中部日本はまだまだなのです。長い討論のあげく、個々の討議も未決着のまま課題は延期ということになりました。

以前、四国の北西にある「松山」についてお知らせしてしばらくになります。松山での教会の働きは、リチャード司祭によって始められたことはご記憶でしょう。同師が帰国された後、一年前ストロング司祭が私から引き継ぎ、下関から毎月行くようになるまで、松山には担当の司祭がありませんでした。リチャード司祭在任中、師の熱心さと活動力と、特に師の財政的援助によって将来の教会のための用地を買うことができました。今のところ、伝道師の住んでいる小さな借家で礼拝をしています。建物のための積立も、少しづつしています。この建物は、去年「御影」が建てたような牧師館と伝道所がいっしょになっているようなもので、恒久的なもので

はありません。将来、ちゃんとした教会が建てられたときは、会館その他の目的に使われるものです。土地の信者が、この基金によく献金して下さっています。「下関」のための緊急のお願いをしましたので、この「松山」についてのお願いはしませんでした。しかし、主教自由資金に頂いたお金のいくらかを、すでに夏がすんでから工事が始まり、どんどん進捗している松山の建物のために使っています。ほかの建物と同じように、本国の教会に比べるとずっと安価で簡素なものです。12月のなかばまでに全部終わるように願っています。そして、12月16日(土曜日)に、聖アンデレ伝道所の献堂式を予定しています。

松山での働きのため、特に伝道師ヨハネ信岡(注・修吉)の上に神の祝福をお祈り下さい。彼にとって、この秋は忙しくなります。新しい建物の建築が進んでいる一方、以前お話しした他の二人といっしょに、今週神戸で聖職按手のための残りの試験を受けるので、勉強の最後の仕上げをしているところです。聖職按手式は、12月21日聖トマス日に、神戸聖ミカエルで、前日の一日の静想とともにおこなわれます。16日の献堂式とクリスマスの聖餐式と堅信式の前後、私は松山に行きます。ストロング司祭は、下関勤務で松山に行かれないからです。

皆さんが関心を持っておられると思いますが、「下関」に実際の教会が建つのは、まだ大分先ですが、日本の使徒の名をつけた下関聖フランシス・ザビエル教会の牧師館の「家の教会」を奉献するつもりです。今月次の訪問は下関です。

三人が聖職に按手されます。東四国の都市「徳島」の郊外「佐古」の執事パウロ古本(注・正夫)が司祭に、そして、執事になるのはヨハネ信岡とマルコ伊壇(注・八束)です。伊壇は、今週末堅信式のために行くつもりにしている本州の西岸の町「境」の伝道師です。聖ルシア節(Ember-tide)に、どうぞ彼らを憶えて下さい。

キャノン・ワッディーが、神戸から南東京地方部に、そして私が主教の会議で東京に行く合間に、午後の便で「岡山」へ行き、司祭宅で一泊。早朝聖餐式の後一緒に出かけ、軽便鉄道で一時間、自動車で四十五分、そして狭い谷間の小道を歩いて一時間半、山の斜面にある大きな農家にたどり着きました。ここは、かって若いお百姓さん(注・佐藤林〔しげる〕氏)の両親と奥さんに按手し、赤ん坊に洗礼をしたところです。あの日は、この家族にとって大転換のクライマックスでした。

英国でもどこでも同じように、日本でも、農業というものはいつもがっかりすることばかりです。この若者もかっては農業に見切りをつけ、祖先からの農地をあとに東京へ出て、都会暮しを始めました。しかし彼は、そこで改宗し熱心な信

参照・P101

者になりました。彼は、自分の本当の仕事は故郷に帰り、家族を改宗させ、そこで働くことだと決心しました。彼は素晴らしく祝福されています。父親は、まだキリスト教が十分に理解できていないと思うのですが、酒をやめ、裏表のある行動をやめました。目的のための戦いとこの若者の熱心さが、山の農場の仕事のあらゆる面に新しい命をもたらしました。

一人の隣の農家の婦人が、私に会って話すために大決心をしてやって来ました。彼女はいままで外人を見たことはなかったのですが、ブラジルの人はどんな人か見たくてやって来たのです。数ヶ月前、彼女の親類が、ここで農業で四苦八苦することをあきらめて、一家で、世界中で日本人移民の定住を歓迎してくれる唯一の国ブラジルへ移住して行ったのです。この老婦人は、ブラジル人、アメリカ人と呼ばれても外国人は皆同じようなもので、気味の悪い大きい人種と思っています。

こんな辺地にも、「岡山」の老司祭、八代司祭の父上（注：欽之允）が定期的に指導に行っておられることは、大変な働きです。同師は、たいがいそこで一泊し、近所を訪ねてキリスト教の話をされます。

今秋、二ヶ月近く、英国艦隊の船がつぎつぎに神戸に来航しました。海員協会のチャプレンのワッツ司祭夫妻には大仕事でした。お二人は、素晴らしい仕事をやり遂げました。解体された古い客船から、ベッドと棚ベッドを、少しづつ確か百八十も協会へ運び込まれたのです。艦隊訪問のいちばん大変だった夜は、どのベッドも満員になったうえ、百二十人以上が毛布にくるまり本棚の本を枕に床に寝、協会のねこは、どこか隙間はないかと、からだからからだへと渡り歩くというありさまでした。お気の毒に、ワッツ夫人は過労のため寒けに負けて倒れてしまい、入院され一ヶ月近くになりますが、大分良くなられました。

艦隊の二人の士官の奥さんが、ここで大変悲惨な亡くなりかたをしました。二人の夫人は、私も何度か利用したことのある沿岸航路の汽船で、国内のある港から神戸に帰る途中、悪い台風に会い、それが衰えかけたときに突然発生した猛烈な龍巻が、船を神戸の西の郊外「須磨」の浅い海岸に難破させたのです。百二十五人の乗客の半分以上が溺れました。二人の英国婦人は、岸に向かって泳ぎ始め、助けようと手をさしのべる日本人漁師の近くまできたのですが、体力が尽きて溺れてしまったのです。葬送式は、先週オール・セインツ教会でありました。平安のうちに憩われますように。

この秋、数人の日本人教役者が病気です。一人は堀六郎司祭です。最寄りの司祭が、両方のために働くあいだ、三ヶ月の絶対安静です。これは南四国ですが、「須磨」の婦人伝道師ミス・竹田丈は二ヶ月の休みです。昇天教会の幼稚園の先

生なのですが、肋膜炎でたおれたのです。そして、一週間前、キャノン・ワッディーを下関で見送って帰宅すると、英国人医師から、ミス・リーを、最悪の事態から救うためにしばらくどこかへ移さなければならない、という手紙が来ていました。そこで、東京の修女会に数週間行っていただくように手配しました。一連のことは、残りの人々に余分の仕事を負わせることになります。日本は、いつもどちらかというと調和することに神経質な国なので、現在の国際間の緊張と恐慌への一般的な世論が、それを倍加しているのでしょう。平静さと確信のうちに、私達が力づけられますようにお祈り下さい。

ミス・ボールスが帰ってこられて二ヶ月、ミス・ホームズが行ってしまいました。二人の新任の方々は到着され、いまミス・バーバーと住んで、目下松蔭女学校で働き始める前の日本語の六ヶ月の特訓中です。アレン司祭は、帰任の途中、ケテルウエル司祭とウォーカー氏の夫人たちは、クリスマスの前にまたでかけられるはずです。この手紙が、クリスマスの手紙を書かれる頃届くよう願っています。いつも、クリスマスの郵便物を楽しみにしています。皆様が、お国で幸せなクリスマスをお祝いになりますように。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第32号

一九三四年(昭9)二月七日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

アレン司祭が、降臨節に間に合うように帰ってきましたので、降臨節第一主日は聖ペテロ教会で最後のお勤めをし、アレン司祭を、聖ペテロ教会の司祭として働いていただくようにと任命しました。12月以降は、神戸から遠い地方での堅信式で一杯でした。昨年度、堅信式の受領者の数は、神戸地方部が分かれて(注・大阪教区から)以来十年の平均でしたが、過去二年は平均以下でした。

あらゆる方面で、日本は難しい時代にさしかかっています。特に、霊的な面でそうです。突然、日本は今や輸出国だと云われても、全てがそれなりに良くなったというわけではありません。現代の日本で、キリスト教への大々的改宗が起こったことはありません。伝道は、いかなる時も地道に精を出さなくてはならない仕事で、しかも、しばしば私達の司祭や教役者たちを落胆させるのです。他方、韓国ではしばしば前進への高まりがあり、今やその一つの真っ最中なのです。それ

は我々の教会の間だけではなく、多くの教派の間でも起こっているのです。

米国の大不況が、彼らのプロテスタント教会の伝道を手痛く直撃しており、小さなものは全体的につぶれてしまっていますし、広範囲に経費の削減が行われています。このことは、米国ミッション系の日本聖公会の教区・地方部にもあてはまります。ご存じのように、私達に対しては、C・M・Sが日本における働きを年五パーセントづつ削減しようとしていますし、S・P・Gも今年別の大きな削減をしようとしています。しかし、日本にとって、これが現在の円安の中では必ずしも削減にならないかも知れないのです。というのは、現在の為替相場が続くかぎり、この有利な交換率で私達は助かります。この間に、この不安定な世界で、交換率が逆転したときのために、外貨交換安定のための基金を始めようと思っています。

財政についてお話したことは大目にみて下さい。ただ物事がどうなりつつあるかを知っていただきたかったのです。

若い日本人の働き人たちの、神学校での養成が間もなく終わります。私達の人材だけは確保できる希望があります。先ず、ステパノ袴田(注・観一)とヨハネ加藤(注・九十九)の二人は、イースターから伝道師として働き始めます。特に彼らのためにお祈り下さい。

ステパノ袴田は、アレン司祭のもと聖ペテロ教会で、ヨハネ加藤は、ストロング司祭のもと下関聖フランシス教会で働きます。二人のためにお祈り下さるとともに、どうぞ神様に感謝と賛美を捧げて下さい。二人は、養成中の神学生のためにお献げ下さった皆様の献金と祈りからの最初の果実なのです。彼らは、聖職に叙任されるまで少なくとも一年か二年、伝道師として働きます。

しかし、この二人によって私達の人数は増えないのです。彼らは、聖トマス日に目出たく執事に叙任された二人の後任ですし、二人の新執事の一人は、同じ日に司祭に任じられた執事の後任で、もう一人の聖ペテロ教会の執事(注・国弘)は、一年以上前に亡くなりました。新司祭は、堀六郎司祭病気退職による欠員を埋めたことになります。先の手紙で、堀司祭が病気だと申しましたが、その後だんだん悪くなり、とうとう昨年末退職したのです。私が神戸にきて、始めて失った日本人司祭です。彼が働いていた四国の南岸(注・高知・赤岡)に派遣できる者がおりません。彼の仕事は、ヨハネ中道(注・政市)司祭が引き継ぎます。しかし、これは中道司祭にすれば余分の仕事になります。先月、聖パウロの記念日と堅信式のために、中道司祭のところに滞在しましたが、彼は孤軍奮闘がんばっておりました。今のところ、私達は教役者の数をなんとか維持していることがお分かりいただけたと思います。

【高知聖パウロ教会の会衆と中道政市司祭】バジル主教の右隣り。
前列右端は末好時信伝道師。

私達はもっともっと必要なのです。ストロング司祭がどんなに素晴らしい働きをしておられるか、またこの地方部の西端での拡充についてお話ししてみましょう。

ご存じのように、彼は下関聖フランシス教会と松山聖アンデレ教会を託されている司祭です。この二つの場所は、一晩の船旅ほど隔たっているのですが、彼は毎月、松山へ行っているのです。12月16日に、「松山」の新しい建物をめでたく奉献し、21日には、神戸でヨハネ信岡(注・修吉)を執事に叙任しましたが、ストロング司祭は、そのために大急ぎで来神し、またその日のうちに帰っていきました。松山の献堂式の日の夜と、翌日曜日の夜、特別伝道説教会を真新しい小さな伝道所で開催し、数人の求道者がありました。

「松山」の東、汽車で一時間半のところに「今治」があります。「松山」で、私達の働きが始まって以来、「今治」でもだんだんと信者が見つかりましたので、ストロング司祭が訪問し、毎月聖餐式を献げています。これは、如何に私達の網の隙間から信者を失っているかということの一例です。少なくとも、全ての大きな市に教会と教役者が必要です。私達の地方部について云えば、本州側がそうです。他の教区・地方部では、定住教役者のいない市は一つか二つなのです。しかし、この地方部では、そのような市が一ダース以上あるのです。キャノン・ワッディーがここに来られたとき、この隙

間をなくすことが緊急の課題であると同意して下さったことを感謝しています。

本州の最西端の地方は山口県です。七年前に、ミス・ケニオンが「下関」に行って住まれるようになるまで、この地方に定住教役者は全くいなかったのです。「下関」は、本州の端、突端にあるのですが、それが今や、一つは下関から二十六マイル、他の二つは別の方角へ六十マイル以上離れている計三つの市と、四つ五つの散在している地方とに広がる働きの中心になっているのです。ストランクス司祭が住んでいて、公立学校で教えている「山口」がその一つなのですが、ストロング司祭が定期的に毎週行って、熱心な若い人たちを指導しています。

「宇部」は新興都市の一つで、いくつかの町が一緒に大きくなった市なのですが、人口はいまや七万人に達しています。聖公会の信者が、あちこちからこの「宇部」の二つの場所に移って来て、二つの熱心なグループを作っています。どちらも定期的に聖餐式をする必要があります。

その一つは四人の家族なのですが、過激な国粋主義の影響を受けた父親と息子の堕落のために、状況は悪くなっています。しかし、母親（注：下関聖フランシス・ザビエル教会の教籍簿によれば、山県セツ）と娘は大変熱心で、数人の人を回心に導きました。その一人は、主人が大反対というご婦人

参照・P103

（注・同教籍簿によれば、ユニケ三戸千代子）で、洗礼の前のサクラメントの勉強は、ご主人に内緒で続けたのです。このご婦人は、11月に堅信式を受けることになっていたのですが、その直前、猩紅熱にかかり亡くなってしまいました。彼女の臨終における信仰と希望は素晴らしいものでした。反対していたご主人は教師でしたが、キリスト教式の葬式をしてもらえまいかと頼んできました。そこには私達の教会堂はありません。そこで、ストロング司祭が長老派の教会（注：宇部・琴芝・キリスト教会）を借り、自宅から町を十字架を先頭に行列をした後、殆どノン・クリスチャンばかりの四百人の会葬者に、復活の信仰についての説教をしました。そして、ご主人は、まだ積極的ではありませんが、年長の子供二人に、お母さんの歩いた足跡を踏んでいくことはいいことだと話したそうです。

「下関」では、ストロング司祭は、帰任以来、去年健康を害していたヨハネ末好(注：時信)に手伝ってもらっています。うれしいことに末好は、このイースターから神学校に復学し、卒業できることになりました。二人の新伝道師の一人がイースターから「下関」へ行きます。

イースター後、ミス・バーバーが上海大聖堂付属校の校長ケイス・クイック司祭と結婚されることになりました。彼女を失うことは、私達にとって大きな痛手です。彼女は、素晴

らしい宣教師として信頼に応えて下さいました。心から彼女の新生活のお幸せを祈りつつも、お別れするのは本当に残念です。

一ヶ月早く休暇から帰ってこられるミス・ストークスが、幼稚園の仕事を受け持って下さるよう願っていますが、それまでに、誰かミス・バーバーの後任を見つけ、その間に、彼女に日本語の勉強をしてもらおうと思っています。欠員ができることはいつも深刻なことです。

この学期末で、ミス・デゥルイットの松蔭女学校での三年の任期が終わります。彼女は宣教師ではなく、休暇の欠員を助けるためにきて下さったのにもかかわらず、学校と伝道に熱心に関わって下さいました。お別れするのが残念です。

今まで、ミス・バーバーと住んでいた二人の若い新任の方々は、市の反対側、学校の住宅に引越しました。ミス・ヒルダ・サンダースが、もう一年学校に留まると約束して下さったのはうれしいことで、新任の方々の、日本語の勉強も続けながらの学校での働きの応援になります。

ミス・リーが休暇から帰ってこられました。お元気で仕事に戻られるでしょう。

もう一人差し迫って休暇に出発されるのは、神戸の英人会衆の教会オール・セインツのチャプレン、フォード司祭です。彼は、休暇には五年の勤務で十分なのに、六ヶ月も余分に働いています。彼の休暇は、普通に宣教師司祭の得る休暇より短くなるでしょう。母国に滞在中に、皆さんの何人かに会うことができるよう願っています。

ストランクス司祭は、フォード司祭の出発前に帰ってこられて、英人チャプレン館に住み、フォード司祭不在中の英人会衆のお世話をします。

日本の聖公会の全教会にとって大切なある計画ですが、まだはっきりしていなかったので、以前にお知らせしたことはなかったと思いますが、この度、北東京地方部の米人主教が、聖ヨハネ修士会(Cowley Fathers)の米人会員に、北東京地方部に同修士会の分院を創設するようにとの正式の要請を出されました。最初の日本人司祭が志願者としてこの修士会に入会されてから九年になります。そして昨年、二人の立派に修練された修士(注・桜井健、木村兵三)になって休暇で帰ってこられました。三人目の方(注・竹田鉄三)も、修練が終わり次第二人に合流され、二人の米人修士（注・ウォルター・モース、ケニス・バイエル）も来日され、日本での修士会が始まる予定です。どうぞ、日本での修士会の新しい出発のうえに豊かな祝福をお祈り下さい。

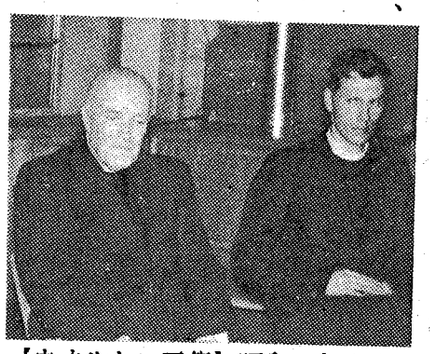
米国神父、スペンス・バートン修道院長(American Father Superior General)が、日本に二ヶ月ご滞在になり、中国へおいでになる途中神戸に一日ご滞在になりました。おいでに

なったのは、韓国のセシル主教のご指導で、私の家での司祭静想会が終わったばかりのときでした。セシル主教は、ご親切にこの静修会のためと、私が9月に韓国を訪問したお返しにおいで下さったのです。いつも、新年早々にここで司祭の静修会を、そして同じ時期に、東京のエピファニー修女会本院で婦人方のための静修会をしようと企画しています。静修会、黙想会をという風潮は、着実に日本に拡がりつつあります。事実、最近ある司祭が、流行しすぎる恐れがあると話していたほどです。どうぞ、神の栄光と魂の救いのために正しく導かれ、用いられますようお祈り下さい。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

【追伸】　この手紙は、長くなりすぎました。神戸地方部で働くために帰ってこられたばかりの、C・M・S司祭アーネスト・ハッチンソン師については、このつぎに書きます。



【ウオルトン司祭】昭和39年、かって司牧された呉信愛教会を訪問された。右はベインズ司祭。

書簡　第33号

一九三四年(昭9)六月一日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

前回の手紙は、ケープタウン局の消印がつくほど冒険旅行をしたようですね。面白いことに、こちらの英字地方紙に、私の手紙と全く同じ道をたどり、私のより二、三週間長くかかった手紙のことが載っていました。とにかく両方とも最後には届くには届いたのです。その手紙を最近受けとられたはずなので、今回のはいつもより少し遅れて書いております。

昨年の後援会の年次総会で、ウォルトン司祭が、英国に本部があり、日本の他の教区・地方部を援助している Japan Church Aid という組織の出している季刊誌を読めば、神戸以外の教区・地方部の働きや、こちらでの一般的な問題についてかなりの情報が得られると云われたそうですが、全くその通りです。最近そのイースター号を受け取りましたが、皆さんが私からお聞きになったことのない、日本での伝道について一般的な知識としてとても興味深いものでした。私の手紙は、大変個人的で、たいがい一つの地方部のことだけをお

伝えしております。

しかし、ときには遠くのことをお伝えすることもあります。今回は、教区・地方部の抱えている他の二つの問題に触れたいと思います。

日本の北の島、北海道の大きな港「函館」が、嵐と大火で大災害を蒙ったことを、本国の新聞でお読みになったことと思います。あの惨事の起こったとき、主教全員（二人は休暇帰国中でした）は、東京で会合しておりました。私達は各々北海道の主教(注・G・ウォルシュ)に、日本にある教会が少なくともこれだけは約束できますという緊急援助の総額を伝えました。しかし、その額どころか、その二倍も三倍もの募金やあちこちから広範囲の支援があり、救援に十分なものが集まりました。しかし、主教は、教会と牧師館の両方を再建しなければならないし、地元の信者は、全てを失ってしまったので自分達ではどうしようもありません。本国で Japan Church Aid が出した再建のためのアッピールに対して、かなりの反応があることを嬉しく思っております。北海道地方部の本国での主な後援者はC・M・Sですが、対応は全く不十分です。

もう一つのことは、主教方の出国についてです。今年の2月から7月にかけて、私以外の外人主教は全員すでに出国されたか、出国されることになっております。しばらくの間、こちらにいるのは私と二人の日本人主教だけになります。昨年秋、主教会議長を辞任されたJ・マキム主教は、あれ以来かなりご病気が重く、ホノルルに滞在しておられます。来月、中部日本のカナダ人主教H・ハミルトン師が帰国されますが、辞任帰国なのでもう日本には帰ってこられません。カナダから初めて来日されて四十二年、主教に就任されてから二十二年になられます。カナダで、またアメリカ合衆国で、新主教を選ぶ責任を負っておられる方々のうえに、聖霊の恵みと導きがありますようにお祈り下さい。

この主教方の大がかりな出国も、私が休暇帰国しない理由の一つです。ケテルウェル司祭は、この10月に休暇をとりますが、後援会の年次総会に間に合わないのが残念です。私は、彼が帰ってくるまで出発しないと思います。

三年半前にスコット司祭一家が英国に帰られて以来、この地方部にC・M・Sの英国人司祭は一人もいませんでしたが、在日C・M・Sの総主事J・マン司祭（注・のち主教）が毎月大阪から、C・M・Sミッションの一教会を訪問して下さっていました。しかし、今年の1月にアーネスト・ハッチンソン司祭とご夫人が長い療養休暇から帰って来られ、地方部の北岸で勤務につかれることになり、「米子」に住みながら、もう二つの町のためにも働かれることになりました。これでマン司祭は、大阪からの訪問から開放されたわけです。数年に

わたってのマン司祭の助力に大変感謝しております。

前回の手紙で、辞任したとお知らせした日本人司祭堀六郎は、イースターの後、間もなく肺結核のため亡くなりました。安らかに憩われんことを。幸いにも、あちらに行き、葬儀を司式することが出来てよかったと思っております。この国では、葬儀が大変手早く準備されるので、これはなかなか難しいことなのです。

ちょうどその頃、S・P・Gの主事から、試案ではあるが、もし私達がもう一つ新しい教会を開設できるといえば、S・P・Gが、後援会の援助と合せて、来年からそれだけ援助金を増額できるかもしれないという話を聞きました。いずれにしても、これは来年からのことなのですが、今のところ唯一の望みです。最近、たまたま他所の地方部(注・東北)から若い日本人司祭(注・村田俊雄)を受け入れないかという話があり、受け入れましたが、彼には、もしこの試案が実現しなかったら一年分の給料しかないと予告しておきました。

【J・マン司祭と家族】

バーナード村田司祭は、今月からここで働き始め、神戸のすぐ西の「明石」市での仕事を受け持つことになります。明石は日本のグリニッチです。日本で使われる経度の基線が明石を通っているからです。今のところ、八代司祭（注・

【明石・野村氏宅での日曜学校】
野村氏と岡上伝道師(右端)。

斌助）が聖ミカエル教会から明石に定期的に行っていますが、定住司祭を持つことができるようになるまで、聖ミカエル教会から独立することはできません。どうかこの冒険的な試みの上に、特別な恵みがあるようにお祈り下さい。

前の文章の中の、後援会の援助と合せて、という言葉から考えて、この進展が後援会とS・P・Gとのより密接な働きを実現する一つの方策になればいいと思っております。このことについては、本国で討議が続けられております。

もう一つ忘れてはならない財政に関することは、後援会の会計年度末が変わることです。八月末というのは休日などがあり厄介な時期なので、会計を十月末まで続けることに決めました。これで、多くの皆さんが年次総会で、会計しめきりまえの時点で、いろんなことがどう進行しているかをお聞きになることができるようになります。そんなことで今年は、十四ヶ月分の領収書が含まれることになります。

最近、毎月のように新しい孤立した信者が、特に、四国の北岸に沿った地方で見つかっております。前回の手紙で、四国の北西部の「松山」からどのように働きが拡がって行っているかということを書きました。一方、四国の北東部は、私達が教会も教役者も全く持っていない地方の一つなのです。県庁所在地の「高松」港には、本州の岡山から、年配の日本人司祭(注・八代欽之允)が聖餐式のために定期的に訪問しております。彼には自分の教会がありますし、岡山の周辺にも、訪問しなければならない遠く離れている信者があり、彼は高松から働きを拡張していくことができないのです。

今年のはじめ、若い信者のカップルが聖ミカエル教会で結婚して、高松から汽車で一時間半ほどのところに住むようになりました。私はイースター後、お二人を訪問し、一泊して翌朝、お二人のためにイースターの聖餐式をいたしました。この訪問の前に、遠く松山から、小さな町に住んでいる信者の歯医者と奥さん（注・松山聖アンデレ教会の教籍簿によれば、林勇幸・喜代子夫妻）のことを聞きました。その町には鉄道は通じていないのですが、若いカップルの住んでいる町から、バスで四十五分以内のところにあります。手紙で知らせたので、歯医者はやってきて、私達とともに聖餐に与りました。私が彼に接手したのは八年以上も前、四国の西の港町（注・愛媛県長浜）でのことでしたが、何と今回が彼の初陪餐であったと聞いて大変はずかしい思いをしました。この日来られなかった奥さんは、彼と一緒に堅信式を受けられたのですが、まだ陪餐されたことがないのです。お二人は、堅信式を受けられたすぐ後、引越されて消息が分からなくなっていたのです。最近、お二人の堅信式のとき洗礼を受けた一番上の子供さん(注・林幸雄)が亡くなり、このことを松山へ連絡されたことから、再び一家の消息を知ることができたので

す。もう一人、まだ洗礼を受けていない四才の子供（注：林静香）があるとのことなので、来週一晩訪問して、この子に洗礼を授け、お二人に陪餐していただくことにしております。

その頃、もう一人の信者の消息が分かりました。公立高校の女の先生（注：当時丸亀高女の教師であった日下初子姉。現聖ミカエル信徒）で、ご主人は信者ではありません。歯医者さんを訪問した翌日、この婦人のところに聖餐式のために行くつもりです。泊まることはできませんので、高松で教師をしている英国人（注：当時高松高商の教授であり、一九五〇年司祭として再来日、高松聖ヤコブ教会に赴任したR・C・クリストファー氏か、ハワード氏）宅に前夜一泊し、ご婦人のいる町へは朝一番の汽車で行くつもりです。こまごまと書いて申し訳ありませんが、このようなこと全て、どれほどあの地域で働いてくれる人が必要であるかといういい例になると思ったからです。これらの信者たちは、大草原や森の奥にいて孤立しているのではありません。ノン・クリスチャンの大衆の中で孤立しているのです。この地域の人口は、優に百万を越えているのです。せめてもう一人英国人司祭がいて、西の方でストロング司祭がやっているような働きをして下さればどんなに素晴らしいかと思っております。このような開拓的な任務には、日本人聖職より英国人司祭のほうがいいのです。

参照・P103

何時もそうですが、日本での働きは、ちゃんとした教会のあるところでも、ささやかでゆっくりしたものですが、ゆっくりでも成長はしております。私達の地方部会では、二〇人の現在受聖餐者のある教会は、信徒代議員を一人出すことができますし、六〇人以上ある場合は二人出すことができます。私が初めて神戸に来たころ、地方部内で六〇人以上の教会は、聖ミカエル教会と昇天教会だけでした。五年後もこの二教会だけでしたが、その翌年聖ペテロ教会が六〇人になり、さらに一年後に聖マリヤ教会(注・御影)、その後須磨聖ヨハネ教会、そして、昨年は、岡山聖オーガスチン教会が六〇人に達しました。この中で最も注目すべきは御影の聖マリヤ教会で、北側の山の上の小さな二つのグループを除いて、ケテルウエル司祭が、たった七年半前に始めたもので、今では地方部で四番目の教会になっております。

9月17～19日まで地方部会、続いて19～21日まで聖職と教役者のための教役者修養会を開くことを決めました。今回はどちらも、三年前と同様に神戸の北にある「有馬」で開くことになります。どうぞこれらの集まりのため、またその準備のためにお祈り下さい。

これらの会が、夏の終りを告げることになりますが、夏の初めには、聖ミカエル教会でフォス主教記念のための銅板の奉献をいたします。6月25日なので、皆さんがこの手紙を受

け取られるころにはもう終わっているはずです。聖ミカエル教会は、フォス主教が日本で建てられた最初の教会で、中心的な教会ですから、銅板はこの教会の中に置かれます。他の全教会では、礼拝用大聖書か希望によっては祈祷書に適当な文字を入れたものをもって記念のしるしにすることにしました。同主教の晩年の大きなお働きが、聖書の翻訳でしたから、記念事業委員会はこれが大変相応しいと思ったのです。

ミス・バーバーがおられなくなり、ミセス・クイックは上海に住んでおられます。フォード司祭もミス・デゥルイットもいなくなりました。ストランクス司祭がオール・セインツの牧師館に住んでおります。そして、ミス・ストークスがミス・バーバーが住んでいた家におります。ミス・ストークスと一緒に住んでいるのはレディー・マベル・エガートンですが、日本語を知らないのにもかかわらず、数ヶ月でも何か手伝えることはないかと、勇敢にも3月に来て下さったのです。彼女は、いろんなことで助けになっています。目の具合が悪く、週に一度専門医のところへ通わなければならず、読み書きができなくなったミス・ボールスの「眼」になるという、思いがけない仕事もして下さっております。彼女の目が早くよくなりますように。夏の終りにミス・ホームズが帰ってこられるまで、レディー・マベル・エガートンのような古い友人が一緒にいて下さるということは願ってもないことです。

もう一人の病人は、昇天日に盲腸の手術を受けられたミス・スミスですが、順調に回復しておられ、大好きな学校の仕事に一日も早く復帰したいと云っておられます。昨日、チャペルでの至聖体日の唱詠聖餐式に出席されました。

二人の新しい若い伝道師、ペテロ加藤(注・九十九)とステパノ袴田(注・観一)は、それぞれ、加藤はストロング司祭、袴田はアレン司祭のもとでいいスタートをきりました。前の手紙で加藤さんのクリスチャン・ネームを間違えていて申し訳ありませんでした。

それから、クリスマスにいただいた手紙、カードやプレゼント、特に何人かの方々が集めて送って下さった素晴らしい本のプレゼントのお礼を申し上げるのも忘れていました。お詫びします。この手紙の中で、このような個人的なことを取り上げて済みませんが、ほとんどの場合、どなたが寄附して下さったか分からないので、こうするしか方法がないのです。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第34号

一九三四年(昭9)九月九日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

この手紙が今年の聖ミカエル祭までに届かないのではないかと心配しています。我々の会計年度は10月までなのに、まだ年度会計報告も出されておりませんが、聖ミカエル日の朝、そして年次総会の日に遥かに母国の皆さんを憶えてお祈りします。私はいつもここでの聖餐式のたびに、年次総会が終った翌朝のような気がするのです。そして母国の神戸後援会の皆さんとの交わりを感謝するのです。

今年の夏は少し異常でした。梅雨にはまあまあ雨も降ったのですが、聖マリヤ・マグダレンの週に最悪の台風がやってきました。直撃されたのは神戸ではなく韓国だったのですが、我々と母国を繋いでいるシベリア鉄道が被害を受け、郵便物が送れるようになるまで十日以上かかりました。この三日間に、三週間分の国からの新聞や手紙を受け取ったのですが、こちらからの郵便も同じように遅れたと思います。とにかく、待っている返信が幾通かまだ着いていないのです。

韓国ミッションの伝道地域が今度の被害地の北にあたりますが、このような郵便の遅れのトラブルがないことを願っています。

その後、先週まで殆ど雨らしい雨がありませんでした。それで西日本が大旱魃になり、各地で稲作が壊滅的打撃を受け、農家は重い借金に苦しんでいます。神戸ではすでに食料は配給制になり、飲料水も一日六時間の時間給水になっています。西に行くほど状況は悪く、下関では一日たった四時間だそうです。今も次にやってきた台風の真っ最中で、堅く戸締まりをした家の中でこの手紙を書いています。

酷いことは世界中あちこちで起こっており、決して日本が最悪だというわけではありません。嵐は自然界の嵐ばかりではなく、人間の起こす嵐もあると云えるでしょう。ときに政治的、国際的不穏は日本での教会の働きにとって深刻な障害になります。しかし、各地でその原因をもっと究明しようという兆しもあります。

我々の教会はこの夏、二人の得難い人を失いました。その一人ルドルフ・トイスラー氏は米国宣教師医師として今世紀初めに来日した方でしたが、六十才前の若さで心臓病のため急逝されたのです。彼は今も日本で最も堂々とした医療センターといわれている今日の聖ルカ病院を築き上げた人です。

聖ルカ病院は、十一年前の大震災で完全に破壊されました。

この時、世界大戦(注・第一次)で米軍の参謀だったパーシング将軍が野戦病院の一隊を派遣し、廃虚の中で診療を開始し、救急医療のために大きな貢献をしました。一方トイスラー博士は戦争景気の絶頂にある米国で大規模な募金を始めました。米国の教会は、この伝道地方部の被災した教会や学校の再建のために援助をしたほか、トイスラー博士に、聖ルカ病院再建のためにと一万ポンドというような援助を差出したのです。広大な新しい敷地に再建された病院が完成し、後は細部を残すだけというときに彼は亡くなったのです。

他の分野でも進歩しつつあるように、日本は現代的な病院、世界的に有名な専門医を含む医師達を持っています。しかし、いろいろな宣教の分野があるように、医療伝道の働きも一律に考えることはできません。これも病院の仕事の一つですが、大変遅れている面があります。それは看護婦の問題です。多くの大病院は、訓練が不十分であまりいいとは云えない看護婦を使っています。そこで看護婦養成所があればきっと役に立つと考えたトイスラー博士は、聖ルカに看護婦養成所も創設したのです。病院には礼拝堂があり、定住の司祭がいます。現在は日本人司祭ですが、以前数年間、六年前に東北地方部の主教になったノーマン・ビンステッド師もチャプレンでした。ここには米国人、日本人の優秀な医師が大勢いますが、管理職になろうという人はいません。それで老マキム主教がビンステッド主教を東京によんで当分の間の聖ルカの責任を託したのです。そのためビンステッド主教は、他の米国人主教達と一緒に総会出席のため帰国できなかったのです。

我々の教会にとってのもう一つの大きな損失とは、ジェームズ・ハインド司祭のことです。彼は日本最大の夏の高原保養地(注・軽井沢)で危険な手術を受けたあと亡くなりました。七十三才でした。彼は弁護士(solicitor)として数年働いたあと叙任され、Langham Place の諸聖徒教会で二年間働いた後、C・M・Sの宣教師として派遣され、九州地方部で四十五年も働いた人です。九年前に彼は定年に達したのですが、九州の北東部で英語の先生をしながら、その収入と年金を捧げて、人々の回心と教会の創設のために働き続けていました。この地域の少なくとも六つの教会は、神の名のもとハインド司祭の働きによるものです。

ハインド司祭の働いた地域は、下関から海峡を隔てたところにあり、神戸地方部が初めてできたころは主教はなく、彼は「下関」周辺のクリスチャンに責任を持つということになっていました。この任務は、九年ほど前に私が彼から引き継ぎました。下関のストロング司祭にとって彼が一番近くにいる宣教師でしたから、いつでも彼から経験豊かな忠告や友情を得ることができました。ストロング司祭は淋しがっているでしょう。彼の地方部でも彼はかけがえのない人だったと思

います。しかも間の悪いことに、(彼が亡くなったとき)主教は休暇で不在だったのです。彼らを憶えて祈って下さい。ほんとに献身的であった同師が平安のうちに眠られますように、そして素晴らしいビジョンが実現する日がきますように。

6月25日、聖ミカエル教会でフォス主教の記念礼拝を捧げました。東京で働いている故主教の長女も礼拝に参列され、大阪の日本人主教も臨席され祝福して下さいました。現在大

【大洲でのフォス主教】
後列の聖職は、堀六郎司祭。

阪教区の約六つの教会は、分割以前フォス主教の地方部にありました。また同主教は、台湾の日本人教会の聖公会の責任者ですが、これもかってはフォス主教の管轄だったのです。

大阪から数人の聖職と信徒も参列しておりました。記念の銅板が、至聖所の壁、主教がいつも坐っておられた場所に掲げられました。まんなかに主教の紋章、出生、来日、主教聖別、退職、逝去の日付と、最後の説教の聖句「なんじら、キリスト・イエスの心を心とせよ」(注・ピリピ2・5)が日英両文で記された簡素なものです。

翌日、ミス・フォスは男子校と松蔭女学校を訪問されました。どちらの学校にも、創立者であるフォス主教の写真が掲げられていました。

この夏は、今日の基礎を築いて下さった方々の思い出に満ちていました。来月開かれる後援会の年次総会の講演者の一人はキャノン・ワッディーですが、彼は皆さんに、建築を今始めたほうがいいということについて話されるでしょう。これは、彼が一年前来日されたおり、私と話し合ったあとで得られた考えです。彼のために激励のパーティーを開いて下さい。彼の訪問の後、彼がS・P・Gと神戸後援会との働きのより緊密な交わりの道を探していたことは皆さんにお話しました。S・P・Gの昨年の総収入の増加は、今すぐ着手することを可能にするでしょう。しかし、この状態が続くかどうか

分かりません。キャノン・ワッディーは、増減する収入に影響されずにできる何か別の働きについての計画を持っています。S・P・Gは、この働きを五年間続けるのに十分な資金の三分の二を、できるだけ早く取り分けて置くことになります。一方、キャノン・ワッディーは神戸後援会にも同じように三分の一を取り分けて置くように云っています。我々の現場での課題を知っておられる皆さんがご存じのように、すでに着手している町よりも、未着手の町に拠点を作ることを優先すべきだということでは彼と私は同じ意見です。もしこの新らしい働きを援助しようとおっしゃる方がおられたら、「明石」の新しい拠点のためにこの資金が積み立てられるように援助して下さい。年次総会の後、10月末の時点の会計状況を聞いたうえで、村田(注・俊雄)司祭に「明石」で続いて働いてもらえるかどうか話せると思います。五年後、明石だけでなくあらゆる場所での新しい働きが日本人による自給によって十分支えられるようになることを期待しています。一年たてば私は帰国します。その時、その他の新たな前進についてご一緒に考えはじめたいと思っております。

例えば「明石」のような拠点は、その町の中に住んでいる人々のためだけではありません。その周辺に住んでいる信者達のためでもあるのです。「明石」は、神戸の背後の高い連山の西の端、小さな河の河口にあります。ここから数マイル上流に「三木」という村があり、二十年前私が他の地方部で働いていたときハウスキーパーだった一老婦人が住んでいます。彼女は今はもう働いていません、そしてクリスチャンでない親類のところに身を寄せていて、たまに礼拝のために神戸に出るのに大変苦労しています。もし明石で礼拝に与ることができるなら彼女のために大きなお恵みになるでしょう。

数ヶ月前、突然この河が洪水になり(短くて、流れの早い日本の河では屢々のことですが)三木の人が何人か溺れたのです。そこで明石の信者が数人、この老婦人の安否を尋ね、救援の必要はないかと三木まで出かけたのです。この事は、彼女の親戚の人々に、信者の交わりは本当のことだと認識させることになりました。

二年前に聖ペテロで亡くなった執事の家族が、今も牧師館に住んでいるということを覚えておられますか。しかもその未亡人と長女が数ヶ月来病気なのです。それで、新しい伝道師のステパノ袴田(注・観一)はそこに住めなくて、三ヶ月私の日本人秘書の家の隣、この松の舎(Firs)の裏の日本間に住んでいました。しかし6月、執事一家は須磨の近くに、安い適当な家を見つけました。病人たちもこの家に移ってからよほど良くなったようです。牧師館は徹底的に消毒され、あちこち修理され、袴田さんが入居し、かってヨハネ修士会の日本人修士の一人と住んでいたことのある一老婦人がハウスキ

ーパーをしています。神学生が実習のために上神してきたときいつも利用していましたから、夏、松の舎に空き部屋があることは大変都合がいいのです。

他のことで改修された聖ペテロの牧師館を使っています。7月の初め四晩にわたって、神学夜学校というのを開きました。唱詠晩祷と主教の挨拶で始まり、ケテルウエル司祭、八代司祭その他二人の日本人司祭によって、毎晩三つの講義がありました。そして最後の日の朝、聖餐式を捧げました。五十人以上の男女が申し込みをし、休まず出席しました。出席者から秋にも開催してくれるよう熱心に頼まれましたが、私は一寸早過ぎると思っています。

日本に派遣される米国とカナダの主教の選出のため、そして選ばれる主教のために神の祝福とお導きを祈り続けて下さい。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

【至急報】S・P・Gは、ミス・オードレー・ウイリアムスをミセス・クイックの後任に指名しました。ミス・ホームズと一緒に、10月6日に到着の予定ですから、すでに出発しているはずです。

書簡　第35号

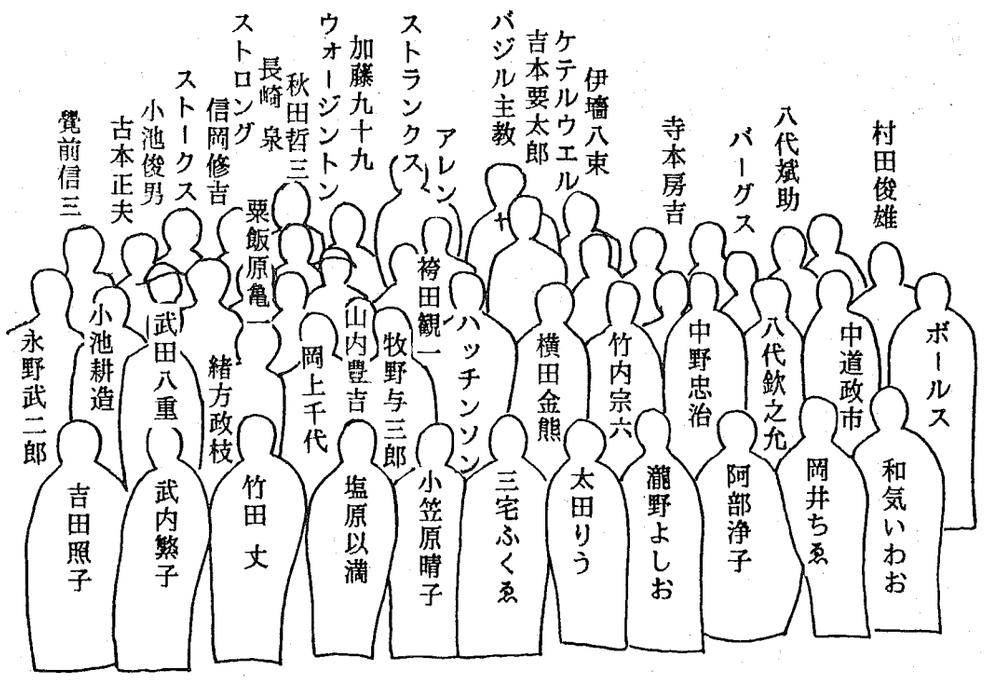
一九三四年(昭9)十一月九日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

最後にお手紙してからまだ二ヶ月しかたっておりませんが、多くの方々が、台風(注・第一室戸台風)のことを心配してお手紙を下さいました。そのことをお伝えするために、最近の三通の手紙の一ヶ月の遅れを取り戻さなくてはなりません。大阪教区と京都地方部、特に大阪教区が大きな被害を受けました。英国の新聞社に送られた記事が、そのことをよく伝えているのを見てほっとしています。

6月の手紙で、地方部会とその後、教役者修養会を開くことをお知らせしていました。修養会は、聖マタイ日のお昼に終ったのですが、この日の朝、台風がやってきたのです。私達は皆、六甲山の裏(北)の有馬にある、私達が礼拝堂として整え、ときどき礼拝をする小さなホールにいました。この会館は、私達の旅館から急で細い道を10分程登ったところにあります。早朝の聖餐式のためそこに行ったときすでに激しい雨が降っていたのですが、礼拝中に嵐はだんだんひどくなり、

【教役者修養会・有馬】昭９年。



激しい雨と風の音で、前列にいた人でさえ、その朝の司式者であったストロング司祭が何を云っているのか全く聞こえず、ただ彼のすることを見ているだけでした。

旅館に戻ると、岩に掘られた深さ30フィートの水路はミルクコーヒー色で、ナイアガラの滝のような轟音をたてる水でいっぱいでした。朝食のとき、私達が全く孤立してしまったと知らされました。全ての電報と電話の線は切れ、神戸行きの電車はとまり、近くの駅へ行く道の途中にある橋が落ち、バスの通る遠回りの道は倒れた木でふさがれてしまいました。

修養会のプログラムを終わらせ、昼食をとった後、私は三人の若い英国人司祭とともに、各々の荷物を持って最寄りの鉄道本線までの七マイルの道を歩き始めました。ご存じのように私は歩くのは得意ではありませんし、他の三人は私のより重いカバンを持っていました。それでもどうやら駅にたどりつくことができ、その区間を初めて通過する汽車に乗ることができました。道路上の大きな倒木はすでに切り取られ、壊れた橋は立派に応急の修理がされ、私達が駅に着いたとき、バスの第一便が私達の来た道を帰って行きました。日本の青年団は、こんな田舎でもこのように迅速ですばらしい働きをします。帰り着いた神戸は、ロウソクの光だけの真っ暗闇でした。

日曜日に下関である按手式のため、土曜日の汽車で行きたかったのですが、本線が不通だと聞いたので、船便を見つけ日曜日の朝6時に下関にたどり着きました。帰途は、途中一ケ所半マイル程歩けば連絡する汽車があるという連絡を受けたので、その夜行列車で、月曜日の昼に神戸に帰ってきました。

この日の午後、私は初めて新聞を見て、台風による大阪の被害の全貌を知りました。その後、我々の地方部の被害を受けた地域から報告が入りはじめたのです。交通は各地で寸断されており、多くの教役者はそれぞれの任地に日曜日までに帰り着けず、その内の何人かは、週の半ばまで帰り着けなかったのです。電報すら二、三日通じなかったので、彼らの夫人や信者たちは大変心配していました。

神戸市自体はあまり被害を受けませんでした。背後の山が風の力を上方に逃したからです。しかし、海岸沿いの家々は、津波のような大波にやられました。津波ではなかったのですが、津波より珍しい現象でした。時速一三〇マイルを越えたといわれているこの記録的な台風は、丁度満潮時に上陸し、時間が経つにつれて風速が速くなり、海水をこの狭い湾へ押し込み、海水は陸につくまでには水の壁のようになっていました。大阪では、五千屯の汽船が陸に押しあげられてしまい、神戸の近くでは、多くの人がこの浸水の中を泳ぐことを余儀なくされたのです。

今夏六甲で、お隣はチェコスロバキア人のご夫婦でした。お二人は早めに神戸に帰ってきていて、8月の末に赤ちゃんが生れました。その三週間後急に、父親が頭上に赤ちゃんをかかげながら、安全な場所へと泳がなければならないことになったのです。また海岸のあるお宅の英国人の娘さんは、一週間後に結婚するはずでしたが、彼女の嫁入り道具は全部海水に浸かってしまったのです。しかし、彼女はへこたれず予定通りに結婚式をあげました。ご主人はオランダの人で、最近洗礼と按手をうけ、結婚式の朝、初聖体をうけたのです。

外人で亡くなったのは一人だけでした。この人は、その時一人で小さなヨットで瀬戸内海に出ていました。彼は今年の春、その「希望」という名の船を、ミッション・ツー・シーメンのチャプレンから買ったのです。そのチャプレンは以前その船で、港の内外の船員を訪問しておりました。船の残骸と遺体は、数日後発見されました。

しかし多くの日本人が亡くなりました。大阪では約二千五百人。学校が倒壊（注：大阪で一四八校。プール女学院も倒壊、生徒十七名犠牲に）したため、死者の中で児童の占める比率が高いのです。神戸地方部内では約五百人が亡くなりましたが、私の知るかぎりでは信徒はいませんでした。たいがいのところで、私達の教会の被害はごく軽いものでした。瓦や漆喰の目地が吹き飛ばされたり、窓ガラスが壊れたくらいでした。窓の破損各一ケ所というのが、松蔭学院と男子校の最大の被害でした。修理費は全部で五〇ポンド以下でしょうし、各教会が自力で修理できます。このことに関して、私は英国に援助を求めませんでしたし、そうするつもりもなかったのですが、お願いしなかったにもかかわらず、母国から直接約七〇ポンドを受け取り、インドから小切手を一枚、そして何人かの地元の方々が、民間の救援基金に出すかわりにと私に寄附金を下さいました。お蔭でこれらのお金全部で、困っている何人かの人々を助けることができました。

三つの地域で信者の何人かが酷い目に会いました。淡路島のある信者一家（注：上本さん）が、家と全てのものを失いました。この一家は、大きな養鶏場を持っていましたが、多くの鶏が死に、生き残ったのも卵を産まなくなってしまいました。生活のすべを失ったのです。四国の東にある徳島伝道区では、県庁所在地にある教会の玄関が崩れ落ち、日本人聖職の息子さんが働いていた事務所も崩れ、彼は腕を骨折し、全身に打撲傷を負いました。別の町では塩田がだめになり、そこで働いていた多くの信者たちは今何も仕事がないのです。

しかし、神戸地方部で最も被害の大きかったのは岡山で、川の堤防が切れ、人口十五万人の都市の中心部に溢れました。僅かに一、二の地区が被害をまぬがれたのですが、その一つに教会と牧師館がたっているのです。すぐそばの二本の大通

参照・P104

りは腰の深さの川になりましたが、教会の辺りでは数インチの深さにしかならず、教会や牧師館は全く浸水しませんでした。一方、ほとんどの地区では、住宅の一階部分は手のつけようもない被害を受け、畳、障子、衣服、食料など全てがだめになってしまいました。軍隊がいたるところで救援活動をしていました。健康を害したために、教役者修養会に参加できなかった私達の日本人婦人伝道師(注・広瀬なおみ)は、彼女の家の二階の窓からボートで救出されました。

全ての活動が止まってしまいました。洪水の間だけでなく、水がひいた後も、商売、生産そして学校までも行き詰ってしまいました。行き渡っているものといえば、ゴミと汚物の腐敗臭ばかりでした。

山間部に住んでいる若い農夫で、自分の意志で信者になり、東京から故郷に帰り、父親の農場を再び軌道に乗せ、家族みんなを信者にした人のことをご記憶のことと思います。彼の農場は平野部になかったので被害をまぬがれました。平野部にある他の農場は全滅し、鶏や豚は全部溺死し、米作は台なしになりました。この若いお百姓さんは、岡山市の惨状を聞き、牧師の手伝いをするために歩いて岡山に向いましたが、道路も鉄道も不通だったので、二昼夜かかりました。

御加護を感謝するとともに、どうかごいっしょに大きな被害を蒙った大阪教区のためにお祈り下さい。英国の新聞に、

参照・P102

大阪のプール学院とC・M・Sのミッション・スクールの建物の一部が壊れたと報じていました。日本の教会が、この修復のための基金を募金しはじめました。米国ミッションは本国に打電し、京都地方部内での復旧工事のため約二千ポンドを要請したそうです。しかし、米国教会は、C・M・Sが本国でそうであるように、大きな赤字をかかえていることから、多額の援助は得られそうもありません。

この手紙が、台風のニュースばかりになってしまったことをお詫びします。しかし、これはまれな事態で、もう二度と起こらないと信じています。

米国聖公会総会は三週間まえ、北東京地方部の老マキム主教の後任者を選出するかわりに、同主教に、辞意を撤回し職務を続けるよう打電してきました。私は個人的に、むごい指令と思わずにいられないのですが、米国人宣教師たちは皆大変喜んでいるようですし、同主教も決してへこたれない人ですから、そのようにすると同意しました。いずれにしろ、主教は冬の間をホノルルで過ごすために、今週出帆されました。主教は八十一才を越えておられるのです。

カナダ聖公会は、中部日本の新しい主教の選出を、日本の教会に任せました。ですから、現在、日本におられない主教方が全員帰ってこられる春まで、選挙は行われないと思います。どうか、相応しい方が選ばれますよう続けてお祈り下さ

い。

私は、10月の最後の三日間この地方部を離れて、東京のエピファニー修女会で例年の静修会の指導を少ししました。神戸の修女たちも参加しました。その前後に、南東京地方部を回り、主教のご不在の教会で按手をいたしました。

ほとんどの方がご存じのように、二十五年前、私が初めて来日したとき働いたのがこの地方です。旧い友人に会い、今日に至る成長と進展を見ることは本当に素晴らしいことでした。

10月の上旬、元気に帰ってこられたミス・ホームズと、初めて来日されるミス・ウイリヤムズを喜んでお迎えしました。彼女はいま、ミス・ストークスといっしょに住んでいて、一生懸命日本語を習っています。その数日後、ケテルウエル一家とマデル・イガートン嬢がカナダ経由で帰国の途につかれましたが、マデル・イガートン嬢は、途中カナダにしばらくご滞在の予定なので、ケテルウエル一家だけは既に英国に帰り着いておられるはずです。

私が東京に行く二日前に、フォード司祭が帰ってこられ、オール・セインツ教会の任務にすぐ取りかかられました。この秋、帰国したり来日したりの最後の方はミス・ケニオンで、今朝未明に出帆されました。スエズ運河経由なので、クリスマスまでには英国に着かれるでしょう。残念なことに、彼女はもう日本には帰ってきません。このことは、彼女の年と、彼女が受けてきた手術のことを考えれば意外なことではないのですが、私達は彼女を失うことを大変残念に思っています。十分な休養をとられた後、後援会のことを何か思い出して下さったらと願っています。

さあ、いつものようにクリスマスの手紙に取りかからなければなりません。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第36号

一九三五年(昭10)二月十一日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

何人かの方々は、去年の9月チャーチ・タイムズに掲載された日本にいるある宣教師の書いたものを読まれたかもしれません。この前の手紙で、この記事についての私の意見を書こうと思っていたのですが、大型台風の記事に締め出されてしまい、今ではそれをふりかえるには時期を逸したように思うのです。

ただ申し上げたいことは、筆者は米国ミッションの一員として数年日本で働いていた英国人で、日本の教会の状況に私が知らされていた以上に失望していたようだということです。しかし、この記事は大変よく書かれており、日本にいる宣教師、とりわけ主教にとって、一連のよい反省点が述べられています。このつぎ私が帰国しましたときに、どなたとでも喜んでこの筆者の意見に関するご質問についてお話ししたいと思っています。

一つ一つについて云うと、彼の日本人伝道師の訓練についての主な提案には賛成できませんし、統計にも間違いがあります。勿論、統計が全てではありませんが、ものごとの進展についておおまかながら便利な予想を得ることができます。

各教会からの統計表は、毎年1月末までには主教のもとに届いているはずなのですが、いつも遅れてくるのがあって、現在この手紙を書いている時点では、昨年の統計はまだできあがっておりません。しかし、最も重要な点をとりあげてみますと、大阪教区から別れて神戸地方部として独立して以来、常に陪餐している人の数が一五%増えています。昨年は三%に近い増加でした。このことは、以前申し上げたことのある「当地での成長は、常に小きざみながらゆっくり発展している」ことの一つの実例です。

また今年も三年ごとの総会があります。今回は、東北地方部の中心である仙台で開かれます。仙台は神戸から六〇〇マイル離れており、汽車で一昼夜かかります。主教は最年少で米国人のノーマン・ビンステッド師です。総会の日程は5月7日から10日までです。総会とその全ての準備の上に、神の祝福とお導きがありますようお祈り下さい。

今年は、討議し決定しなくてはならない重要な問題がいくつかあります。中部日本の新主教の選出は重要なことですが、これは又、将来日本の主教すべての選出の仕方が変りうるというさらに大きな問題につながります。今までは、母教会が

伝道主教(missionary bishops)を指名してきましたが、このたびカナダ聖公会が、日本の教会（教区・地方部にではなく、主教団）にその選出を一任したので、英国、米国の母教会も将来同じようにするかどうかという問題が起こってくるのです。これは、一回では解決しないでしょうから、ひきつづきお祈りが必要です。

総会には、三年前の前総会からの継続審議の問題がいくつかあります。

新日課表(new lectionary)のことは審議されましたが、申し分なしというところまで行かず、だからと云って、大層煩雑な従来のものに戻るというだけでは残念です。

それから、教区・地方部によって大変バラバラで格差のある年金にかわって、全国の聖職や教役者のための統一年金計画をたてるつもりです。これはごく当り前のことのように思われますが、一、二の裕福で強い教区・地方部の強い反対に会うと思っております。

祈祷書、死者のための祈り、皇室のための祈りなどに関する問題も出てきております。次のこの手紙は、総会が終わってからになります。どうか、その間私達すべてのため、特に主教会議長(presiding bishop)サムエル・ヘーズレット師のために祈って下さい。

驚くべきことに大阪市は、大型台風による被害を素早く復旧してしまいました。これはその実例の一つなのですが、二週間前、南四国の高知聖パウロ教会での教会記念日と按手式の帰途、私は、大阪港で艦橋と煙突とマストだけを水面上にのぞかせて沈んでしまっていたはずの汽船に乗ったのです。この船は引き上げられ、修理され、外観を一新し、三ヶ月で再就航していたのです。

前回の手紙で、プール学院と大阪のC・M・Sミッションの高校の修復のための基金募集が、「日本教会救援会」(Japan Church Aid) によって始められたとお知らせしましたが、「aid」(救援) という語が落ちていましたので、意味がよく分からなかったと思います。会の季刊誌の一月号で、もっともっと必要ではあるが、大変な反響があったという記事を読んで喜んでおります。

一ヶ月前、この地方部の北岸、伝道所と幼稚園のある「境」という町で大火災があったと、新聞が報じていました。町の三分の一が焼失したとのことでしたから教会もと思っておりましたが、ニュースによると、あわやと思われるほど火が迫ったとき、突然風向きが変わり、教会も幼稚園も助かったということです。三、四軒の信者は焼けだされましたが、他の信者は、日本人の執事と、当時「米子」から毎日きていた宣教師のハッチンソン師に率いられて、町当局を助けて救援活動をしました。かれらが受け持ち区域で、雪の中を大八車を

引きながら出発しようとしている興味深い写真を持っています。いくつかの教会は彼らを大変助けてくれました。

私の地方部は、前回の手紙以来大打撃を受けました。ケテルウエル夫妻が英国に帰省した後、夫人を診察したS・P・G

【境大火の救援】中央は伊墻八束司祭。右端は、権田文雄氏。

の医師たちが、日本に帰ることを禁じたのです。血圧が悪く、当然日本の暑さがよくないのです。結果として、ケテルウエル司祭は辞めなければならなくなりました。お二人は大変悲しまれたと思いますが、我々、特に私にとってはつらいことです。

ケテルウエル司祭は、私が神戸に来て以来、私の案内役であり、哲学者であり、友人だったのです。先日ウォーカー氏が云っていたように、彼ともう会うことができないなどとはまだ信じられません。彼は私達の中のだれよりも、この難しい日本語について知っていましたし、あらゆる点でかけがえのない人です。お二人は日本に三〇年もいましたし、夫人は結婚前、その頃はもっと小さかった松蔭女学校の校長でした。

ケテルウエル司祭は、最初は聖ミカエル教会の担当で、当時は聖ミカエルが神戸市で唯一の日本人の教会でした。彼は聖ミカエル教会を日本人司祭にまかせて、東神戸での働きに取りかかり、聖ペテロ教会と会衆ができました。そして、これが軌道にのると、それもまた人にまかせて、ちょうど私が神戸に来た頃、東神戸のさらに東の高級な郊外に拠点を作り、それがこの九年間で「聖マリヤ伝道所」(注・御影)と地区に育ったのです。御影から訪問していた北に散在していた信者を含めて、聖マリヤに属する受聖餐者の数は、地方部内で三番目に多いのです。

今のところは、とにかくストランクス司祭が聖マリヤ伝道所で働きますし、アレン司祭はすでにS・P・Gの会計係の仕事についています。他の点でも、私達は最善の努力をしなければなりません。来年の秋まで、私達の小さな宣教師のスタッフの内、この国に来て二年にもならない者が五人ということになります。このようにつぎつぎと働き手を失う中で、私達は皆様のお祈りが特に必要なのです。

ケテルウエル司祭が辞任するというニュースを聞いたとき、今年の休暇をあきらめようかと真剣に考えました。しかし、延期したところで事態が好転するわけでもなし、他の人の休暇の予定の入ってこない内に休暇をとってしまったほうがいいと考え直しました。私の計画は、ここを夏の終わり頃たって、9月の末に帰省するというものです。ミス・サンダースは、復活節に本国に向けて出発することになっています。このことについては、次の手紙でもお知らせします。

ミス・サンダースがやむなく下関を去りましたが、あとの婦人の仕事はミス・シメオンがやっています。彼女は、実際はミッションの一員ではないので自由契約ということになっており、英語を教えるなど、とうてい思いつかないような方法で、給料ももらわず生計をたてています。しかし、六年間休みなしでしたので、一年の休みをとりました。

彼女の代りに、ミス・ホームズにミス・岡上(注・千代)と下関に行ってくれるように頼みました。お二人は、ミス・シメオンとシスター・フローレンスが1月初めにいっしょに出帆した後、すぐに下関に発ちました。(注・千代修女談　1月10日に出発。)

シスター・フローレンスが神戸におられないのは淋しいことです。彼女がおいでになったとき、日本語を習うには少し遅い年でしたので、神戸では英人教会オール・セインツを助け、特に子供達のために大きな働きをされ、教会の中に子供たちのあつまりを始めました。シスター・フローレンスの後任には、東京からシスター・マーガレットが派遣されてきました。

私が初めて神戸にきたとき、大英国聖書会社(British and Foreign Bible Society)の日本の会長はフレデリック・パロット氏でした。彼は四年ほど前に定年で退職して帰国され、昨年の大晦日に英国で亡くなりました。彼は熱心な信者でしたから、聖ミカエル教会で記念礼拝をいたしました。未亡人はパロット氏同様私達にとってよい友人ですが、ほとんど目が見えません。どうか彼女の淋しさを思い、パロット氏の魂の光明と平安のためにお祈り下さい。

今年の春、東京神学院を三人以上の神学生が卒業します。その一人、米村(注・勇雄)はC・M・Sの地域で働くことになっていますが、まだどことはっきり決まっていません。あと

の二人の内の一人末好(注・時信)は、高知聖パウロで日本人司祭(注・中道政市)といっしょに働くことになっています。

南四国の一人の司祭が亡くなって以来、中道(注・政市)司

【松江の信徒と米村勇雄伝道師】前列右端。左隣りは永野武二郎司祭。

祭は二人分の仕事を強いられており、できるときはお手伝いすると約束しています。もう一人の神学生植村(注・義久)は、御影の聖マリヤのストランクス司祭のところで働きます。植村は、聖ペテロの袴田(注・観一)と大の親友で、お互い近くで働けるようになることを大変喜んでおります。

毎年秋S・P・Gの全宣教師は、本部に提出する年度報告の用紙を受け取ります。この資料によってS・P・G本部の年次報告がまとめられるのです。今回は私達全員、去年の報告記事の続編があれば記載するよう特に要請されました。しかし実際は、本国同様、宣教の地では期待されて始まったことは往々にしてうれしい続編が書けないことが多いのです。しかし、一方ではうれしい後日談も沢山あるのです。

前回、山で農業をしている若く信仰深いお百姓で、大水のとき岡山の司祭の手助けをするために歩いて山を下った人のことはお知らせしましたね。

これはまた別の話です。書簡三十三号で、四国の北東地域に住んでいる孤立している信者で、月のうちに四才の子供に洗礼するために訪問しようと思っている歯医者さんのことをお知らせしました。しかし私が旅行中に、父親が病気なので訪問を延期してほしいという電報を受け取りました。その後、昨年一年間なにも進展がありませんでした。

ところが、クリスマスに下関に行かなければならないスト

ロング司祭のかわりに、私が松山に行っていたとき、その歯医者さん(注・林勇幸氏)がやってきて聖餐を受けました。彼はこのために片道四時間の道程を往復したのです。私達はそれから予定していなかったのですが、子供とちょうど生まれたばかりの赤ちゃんの洗礼のために彼の家に行き、三週間後、マリヤとヨハネに洗礼を授けました。その人口一万の町に行くのに、片道三本の汽車、汽船そして車に乗らなくてはなりませんでした。その家族は、この町で私達の教派、他の教派を通じて唯一のクリスチャンです。このように遠く離れている信者のために多くの祈りが必要ですし、またそれだけの値打ちがあるのです。(注・松山聖アンデレ教会の教籍簿によれば、当時林氏一家は愛媛県仁尾町に居住。この日1月15日自宅で洗礼を受けたのは、長女静香と長男由紀男。)

四ヶ月したらまた手紙を書くつもりですが、しばらくの間、手紙を書くより皆さんにお話しできる日のことを楽しみにしています。たったいま届いた後援会の方々からの素晴らしい本の小包を喜んでおります。重さのために普通の手紙より時間がかかったようです。本やカレンダーやクリスマス・カードや手紙を大歓迎しました。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

【御影聖マリヤ教会の会衆と植村義久伝道師】
バジル主教の右隣りは、ストランクス司祭。

書簡 第37号

一九三五年(昭10)六月三日
日本・神戸・四の宮 松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

この前お便りをして以来、日本の教会にとって大きな出来事といえば、それは総会でした。でもこれについては、あまり紙面をさきたくありません。前回の手紙で、場所と議題については触れましたし、母国の教会関係の刊行物でお読みになると思うからです。

総会は素晴らしいものでした。仙台の教会、地方部センターその他の建物は、神戸地方部のどれよりも大きく、私達の地方部であれ程のものが与えられるにはかなりの年月がかかるものと思います。私が気にしておりました聖職と教役者のための年金に関する議題は、「現状では無理」ということで否決されました。私ごとを申し上げれば、これは私だけの意見ではありませんでしたし、この種の問題は、一刻の猶予も許されませんし、ますます実現が困難になると思っております。話はかわりますが、地方部組織を切り離したり、変更する件は、あまりにも小さすぎて皆の話題にもなりませんでした。でもこのことは、教区・地方部間で教役者の相互交流をはかろうとするときに大きな障害になっているのです。

総会三日目の朝、聖餐式が終わって人々が退堂したあと、主教たちはそのままチャンセルに残りました。そして、無記名投票がおこなわれ、中部日本の新主教にパウロ佐々木鎮次師が、満場一致で選ばれました。

二十五年前、私が初めて来日した当時、佐々木師は信徒奉仕者で、東京聖アンデレ教会の牧師を助けておられました。この教会は、当時私が住んでいた聖アンデレ会館のすぐそばにあります。あの時から数えて三年目に、彼は聖職按手をうけ、今ちょうど五十才です。しっかりした信仰の持ち主で、聖公会神学院創立以来のスタッフですから、神学院にとって大きな痛手になることでしょう。聖公会神学院では各スタッフが、学生を教区・地方部ごとにまとめて、それぞれに世話をしており、私が神戸着任以来同師が、私達の地方部の学生の世話をして下さっておりました。彼の後任に、良い司祭が任命されるように、あわせて、佐々木師のためにもお祈り下さい。同師の按手式は、7月25日聖ヤコブ日です。この日から、主教会の日本人主教は二人から三人（注：名出保太郎・大阪、松井米太郎・東京、佐々木鎮次・中部）になります。

一方、他の地方部では意気消沈しております。九州地方部の伝道主教アーサー・リー師が、家庭の事情で辞職されたか

【聖公会神学院教職員と佐々木鎮次師】前列左から三人目。

らです。主教は、松蔭女学校の宣教師主任教諭であるミス・リーのお父上です。ミス・リーは、リー主教が日本に帰ってこられないことを非常に悲しんでおられます。日本語は大変難しい言語ですが、リー主教の日本語は、かって日本聖公会で奉仕したどの外人主教のそれより素晴らしいものでした。同主教の辞任は、九州地方部のみならず私達の地方部にとっても大きな損失です。後任に素晴らしい司祭が任命されるようにとお祈り下さい。任命権はカンタベリーの大主教にあります。皆さんがこの手紙をお読みになるまえに、任命は済んでいると思います。皆さんが、その方をご存じでしたら名前を挙げてお祈り下さい。

【若き日のミス・リー】

総会(注・第18回)の始まる前日は、5月6日 Jubilee Day でした。(注・英国国王ジョージ五世陛下の銀のご祝典。治世二十五年のこと。中国新聞マイクロ・フィルムより。)オール・セインツ教会で早朝ミサを、9時半には感謝礼拝を献げましたが、礼拝堂はいっぱいでした。私が早朝ミサを捧げることができたのはラッキーでした。東京行きの昼間の急行列車に乗り、東京から仙台は夜行列車で、総会の開会礼拝に間に合ったからです。Jubilee weekの英国国王の演説の一つが、日本に中継され夕方放送されましたが、私は総会の小委員会に出席しておりましたので聞くことができませんでした。

総会から帰ってきて僅か十日後に、5月22日から24日にかけて地方部の聖職と教役者のための修養会を開催しました。今回も、昨年9月にものすごい台風に襲われたあの有馬でした。しかし、今年は天候に恵まれ、一同素晴らしい時を過ごすことができました。出席者の多くは、こんなに素晴らしい修養会は初めてだと云っておりました。

こういった行事の前後、合間と、びっしりと旅行のスケジュールが組まれています。私の休暇前の按手のためです。この前、帰国したときには、主教方はランベス会議に出席されて誰一人日本にはおられませんでしたが、このたびは、ある主教はおられませんが、ある主教は帰任しておられます。私の留守中の神戸地方部の管理はヘーズレット主教にお願いしてあります。私は、カナダ経由で帰国します。今年はちょうど日曜日にあたりますが、聖ミカエル及び諸天使日にマンスター・スクエアの聖マリヤ・マグダレン教会で開催される神戸後援会の集いに(私の主教聖別十周年の記念日でもありますが)ちょうど間に合うように英国に帰りつくように計画を立てております。

【ヘーズレット師】前列中央。

数年前、キリスト教の大敵は物質主義であり、他の古い宗教は全ての力と生命を失いつつあるというのが、ごく常識的な云い方でした。しかし、このことは今日の日本では全然あてはまりません。当地でもどこでも、近年の国家主義の台頭とともに、仏教と神道の双方の復興が大きく輪をひろげているからです。特に、新神道各派は大きくなっております。例えば、何百万という神道の信者の数は、ここ数年の間に倍以上になりました。四年前にはなかった新しい宗教が、今では百万以上の信者を擁するほどになっております。こういったことを耳にする人達は、ごく当り前のように、キリスト教はどうなっているかと尋ねます。キリスト教が、この宗教復興のうねりの中にないということは、疑いの余地がありません。キリスト教は、非常にスロー・スペースですが、一人一人と改宗者を受け入れております。私は確かな希望を持っています。今年本当に励みとなるようなことを見ておりますが、どこでもそうであるとは云えないようです。

これら「盛んな宗教」の広め方、教え方について、私の知っている点から申し上げるならば、キリスト教が同じでないことは喜ばしいことですが、これらの宗教のもつ普遍的なものの一つは、感情に動かされやすい癒しの信仰であるということです。人々はこういった崇拝に、彼らが手にできるもの、特に肉体に関するもので結びついております。このことは人々が、この激動する現代世界の中で、心の安らぎを求めているということでもあります。ある宗教が大成功したある県では、医師たちが県当局にその取締りを願い出たほどでした。また政府は、国会が全ての宗教を監督するために必要な措置(注・宗教団体法案のこと、昭15年実施)を講ずるようにと、再度申し入れを行うはずです。そして、そのはざまで、孤立してしまったキリスト教徒たち、失意のうちに孤立している聖職すらいるということは不思議なことではありません。こういったことから、最近開催した教役者修養会のような集まりは、お互いの交わりを深め、励ましあうために最も大事なものなのです。

私が離日するのと同時に、当地方部で働いている二人の方が休暇で離日します。ミッション・ツー・シーメンのワッツ夫妻です。ワッツ氏の見事な働きで、彼らが施設として使っている建物のある借地を今年買取ました。購入資金の大部分は銀行からの借入れなので、お二人はその返済のために一生

懸命働いておられます。この施設でのお二人の働きは云うことなしです。一事なれば万事成るといったところです。ワッツ氏は、鉄のように頑丈な体を持っておられるにちがいありませんが、氏には、夫人の見事なバック・アップもあります。お二人は、ここ数週間というもの、へとへとに疲れておられます。米国と英国の連合艦隊が神戸港に停泊していたからです。今大急ぎで、休暇の支度をしておられます。お二人ともオーストラリアから神戸に来られた方々ですから、オーストラリアに寄ってそれから帰国されるでしょう。お二人の留守中は、神戸に住んでおられ、何ごとにも物おじしないハインズ夫人が、施設の管理をし、フライング・エンジェルの旗のあげおろしをして下さることになっています。ワッツ夫妻と同様にハインズ夫人のためにもお祈り下さい。お二人は、私より先に出発されます。

両ミス・サンダースは離日されました。お二人は四年前に来神され、ミス・ヒルダ・サンダースは一年間男子校の教師として私達を助けて下さいました。ミス・エディス・サンダースが最初に来日されたときは七十に近いお年でした。そして、年々ひどくなるリューマチと、それが原因の足の不自由に大いに悩まされておられたにもかかわらず、年々手を拡げて、最初は男子校そして最後の二年間は松蔭女学校の教師として私達を助けて下さいました。私達がどんなにお二人に感謝しているか、あらゆる点においてお二人とお別れするのが非常に残念なことであるということは、よく分かって下さっております。

ミス・メアリー・デゥルイットが再度来日されたことは嬉しいことです。この方は以前、松蔭女学校で私達を助けて教えて下さったことがあります。一年間故国で過ごされた後、今はS・P・G特志宣教師(honorary missionary)の肩書きを持って松蔭女学校で教えておられます。私は、この十年間というもの、特志宣教師の助けがなければどうしていいか途方にくれるところでした。その意味では、神戸は非常に恵まれていると云えます。松蔭女学校は非常にうまくいっております。生徒数も以前よりは増えており、寄宿舎もまた定員いっぱいになっております。生徒たちは、寄宿舎の一角に大きくて行きやすいチャペルをと望んでいます。帰国したときに、このことに関しての私の計画案を説明いたします。

朗報について申し上げますと、ミス・ケニオンの後任者が秋には来日されます。アセンション・カレッジで勉強中のミス・ナンシー・エドワーズがその人で、おいでになるのは私が離日して間もなくなのです。残念に思いますが、仕方がありません。申し上げるまでもないことですが、彼女は先ず日本語の勉強を始めることになっております。

昨夏、重い病いに倒れ、カナダの故郷で冬を過ごされたエ

ピファニー修女会の霊母（注：Sister Edeth Constance，第二次大戦後逸早く再来日され、東京でシスター・スペリヤと呼ばれた方）が、この春英国に帰られる前に来日され、およそ二ヶ月滞在されました。その間、東京の支部について霊母と多くのことを協議しましたし、しばらく神戸におられたことも嬉しいことでした。神戸、東京におられる修女方のため、また初めての日本人志願者たちのためにお祈り下さい。

【聖テモテ教会信徒と古本正夫司祭】後列左から四人目。右前の婦人宣教師はミス・リチャード。

C・M・Sでは、母教会から霊的なものをしっかり自分の手でつかみとらせるために、継続的に日本人聖職を、三年ごとに二人位、英国に留学させるための特別な基金を準備しております。十数年ぶりに神戸地方部に順番がまわってきました。それで、地方部で最年少の司祭パウロ古本(注：正夫)が、一年の英国留学の途につきました。C・M・Sの日本総主事マン氏が総会終了後休暇のために離日されましたが、パウロ古本もいっしょに出立しました。米国ミッションでも、これと同じ方法で沢山の日本人青年を米国に送り出しております。神戸後援会が、英国留学のお手伝いをしたのは、八代師ただ一人です。同師はいまや帰国して六年目になります。ともあれ、誰かを留学させるのに妨げになっているのは、資金や人材の不足だけではありません。留学の対象になる人は、十分な審査をされなければなりません。いまは明らかにこれこそ留学に相応しいと思われる人は、一人もいないと思っております。

古本さんの出発は、一、二の移動を生ぜしめました。でも今は三人の若い伝道師を含めてみな新任地に落ち着きました。彼らのために特にお祈り下さい。

この前の手紙で、他の名を知らなかったので、日本人の名前を米村さんとだけ書きましたが、アブラハムという名があ

【吉本要太郎師】前列左から二人目。婦人宣教師はミス・ケニオン。
その右が吉本師夫人。冨岡・新町の永生教会の裏で。

ることがわかりました。年輩の日本人聖職のある人たちは、洗礼名に旧約聖書からのものを使うのが非常にお好きなようです。復活後第一主日に、四国東部の三ヶ所で接手をしましたが、午後接手式をした小さな田舎町(注・冨岡)では、ここの司祭は七十才をこえた方(注・吉本要太郎)ですが、ある一家の中の五人、つまり祖父母、両親と子供たちの中の一番年上の子供に接手をしました。この人達の洗礼名は、アブラハム、サラ、イサク、リベカ、レアというものでした。ですから私は、他の子供さんたちは、もしかしたらヤコブとラケルではないかと尋ねますと、母親は「その通りです。どうしてわかりますか」といっておりました。(注・冨岡永生教会の教籍簿によれば、田中順次・キチノ夫妻、義一・マサエ夫妻と長女。ヤコブは長男光夫、ラケルは次女清子のこと。この他、ルツ和子という三女があった。)

この場をお借りして、季刊誌や月刊誌あるいは週間誌を送って下さる方々に、七月の終りまでに英国から発送して下さるようにお願いしてペンをおきます。それ以後になると受け取ることができません。

いつも皆さんに感謝している友である
在神主教　✠バジル

書簡　第38号

一九三五年(昭10)十一月二十一日
英国での住所
ロンドン・オスナバ通り・58

私の友人ご一同様

この前、手紙を書いて以来、四ヶ月以上の月日が経過しました。休暇中は定期的な手紙を出しておりませんが、楽しかった年次総会の折、またその他のところで多くの方々に、最近の出来事やいろんな計画についてお話することができましたとはいうものの、集会に出席されたのは、皆さんの五分の一足らずの方々で、地方の方々はほとんど出席されませんでしたので、年次財政報告書といっしょに回覧していただきたいと、最近のニュースやいろんな計画をお知らせすべくこの短い手紙を書いております。集会に出席された方には繰り返しになりますが、お許し下さい。

私の乗った船は、8月22日に神戸を出航し、9月27日にグリーノックに入港しました。大西洋が穏やかでなかったために、9月28日にやっとリバプールに入港でき、その日の午後のロンドンでの特別礼拝には間に合いました。また聖ミカエル及び諸天使日の朝の後援会合同の聖餐式の思い出は、私にとっていつまでも忘れることができないものになるでしょう。

宣教師達が皆夏休みでいなくなった7月の中頃、ミス・ストークスが小児麻痺で倒れました。私は、離日するまで病院に彼女を見舞いました。その後、快方に向かっているとの知らせを受け取っております。彼女は十一週間も入院し、その後、松蔭の宣教師館で療養生活をしておられ、11月8日に離日されたはずですから、クリスマスまでには故国に着き、療養生活にはいられるはずです。小児麻痺の回復には一年あるいはそれ以上時間がかかるものと思っております。ですから、今の段階では後遺症については何も申し上げられません。どうぞ彼女のためにお祈り下さい。

私の離日十日ほど前に、北部中国からニュースが飛び込んできました。夏の間という予定でミス・ホームズと一緒に中国に出かけていたミス・ボールスが、赤痢で倒れたというものでした。何ヶ月もの間よくありませんでしたが、峠は越えたようです。この二つ目のショッキングなニュースを知らされたときは、休暇をとりやめることを真剣に考えました。しかし、残ったとしてもどうすることもできませんし、故国での数々の計画もだめになります。そういったことから、予定通り離日しました。ミス・ボールスは9月中旬日本に帰ってきました。なおっていましたが、とても弱っていましたので、一ヶ月の療養を命じられました。彼女の健康が一日もはやく

回復しますようにお祈り下さい。

一番新しい新任のミス・ナンシー・エドワーズが、9月神戸に来られました。お互いの船は、太平洋上ですれ違ったはずですが、それは知る余地もないことでした。彼女は、日本語の勉強を始める間、昇天教会の近くで、ミス・ウイルアムスといっしょに生活しておられます。

私はながい間、ケッテウエル師の後任司祭についてのいいニュースを待っております。そうなるようにお祈り下さるとともに、日本語がよくでき、日本人をよく知っていた先輩宣教師の後を継いだ新任者のことも覚えておいて頂きたいのです。新任者は、先ずこの二つのことを最初から始めなければならないのです。

松蔭女学校での働きは、近頃は楽しいのですが忙しくもなっております。定員未満であった寄宿舎は今満員です。これまで、チャペルとして使ってきた寄宿舎の部屋は手狭になり、他の方法でも不十分です。ミス・リー、ミス・デゥルイットその他の人達も、もっと大勢の生徒が収容でき、より一層の証しとなるように独立したチャペルを建てる資金を、私が故国に滞在中に皆さんにお願いすることはできないものかと云っております。建築には二〇〇ポンド必要だと思っております。他のこととかち合うかもしれないので、公にはお願いできませんでしたが、年次総会ではチャペルが欲しいという話をしました。このことを皆さんに憶えていただいて、出来ますならば援助をお願いしたいのです。

皆さん方は、すでに何ヶ所かで実施されましたが、C・M・Sが、今から二十年かそれ以内に、日本から引き揚げるためにあるゆる所で、援助金の五パーセント削減を進めていることはご存じのことと思います。日本の教会では、年々の援助金削減の穴埋めの財源を見出すことは不可能なことです。C・M・Sにより今日まで支えられてきた所での働きが、今後とも続けられるにはどうすればいいか、そのための知恵と導きが主教と諮問委員の方々に与えられるようお祈り下さい。

7月25日に、東京教区主教と私は、パウロ佐々木鎮次主教の管轄している名古屋での同主教聖別式で、同師を日本聖公会主教会議長に推薦しました。また10月18日、ロチェスター教区主教と私は、聖パウロ大聖堂でカンタベリー大主教に、ジョン・チャールス・マン師を九州の主教にと推薦しました。私達は、日本聖公会のこの二人の新主教とその司牧する地方部の上に、神のかわらざる祝福を心から祈りたいものです。

私は、代理としての働きに私の時間の多くを失いましたので、この秋頂いたお手紙への返事が遅れたり全然書かなかったりで、皆さんが心配しておられるのではないかと思っております。クリスマスまでに、七十回以上説教したり、集会で話しをすることになっております。このたびの故国で迎える

クリスマスやイースターを楽しみにしております。

年次総会での財政に関するお願いに、心よいお返事を下さったことに心から感謝しております。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

【追伸】長い間待ちましたが、米国聖公会主教会がジョン・マキム老主教(注・北東京)の新旧交代の願いを受理したという通知を受け取ったところです。同主教会は、マキム主教の補佐主教であったチャールズ・ライフシュナイダー師を、北東京地方部の主教に選出しました。両主教のためにお祈り下さい。

書簡　第39号

一九三六年(昭11)四月二日
英国での住所
ロンドン・オスナバ通り・58

私の友人ご一同様

皆さん方にこの前手紙を書いて以来、またもや四ヶ月以上の月日が経過してしまいましたが、後半の三ヶ月も前半の三ヶ月と同様に毎日を忙しく過ごしており、今日は、帰国以来一五〇回目の説教をすることになっております。残りの月はもう少しゆっくりできたらと思っております。7月25日出航の船を予約しました。神戸で私の働きを助けてくれる司祭が、私と同行して日本に行くことになっていることを皆さんにお伝えできるのは嬉しいことです。この方は、キッドミンスターの聖ヨハネ教会で二年近く働いていたエドウィン・バッジャー神父です。とても若い方ですが、このほうが語学の勉強には進歩が早くていいと思っております。彼の準備と日本に向けての旅行、彼の新生活の出発のためにお祈り下されば幸いです。

私が離英する前に、もう一度聖マリヤ・マグダレン教会で説教するのかと、かなり多くの方々からたずねられましたが、

牧師の要請があったので、7月5日の日曜日の午前11時と、7月21日聖マリヤ・マグダレンの日の午後8時の晩祷で説教をしますとお伝えしておきます。そして、この晩祷のあと、牧師がご親切に私達が自由に使えるようにと用意して下さる学校で、お別れに来て下さった後援会の方々とお会いしたいと思っております。この会は、スピーチのある長い会ではなく、神戸のためにお世話になっている方々にもう一度お会いできるという程度の会です。この晩祷には、バッジャー神父も出席されるはずです。神父は、7月22日の聖マリヤ・マグダレンの日の朝の聖餐式にも、私と一緒に出席されると思います。

ミス・ストークスが、ちょうどクリスマス前に英国に帰ってこられ、数週間オーソパディック病院に入院しておられましたが、今は親類の家で療養中です。小児麻痺からの回復は、時間がかかっておりますが、順調のようです。完全にもとに戻ったという最終決定がでるのは、多分今年の終わりころになるでしょう。

昨年11月に、ミス・ボールズが神戸に赴任し、ミス・ストークスのしていた仕事を受け継いで始めておられましたが、それが体力に負担になり過ぎたようで、一ヶ月ほど再入院する破目になり、それ以来、うんとペースダウンして仕事をしなければならなくなっておられます。どうぞ、このお二人のためにお祈り下さい。

パウロ古本(注・正夫)は、いま英国のある教会で働いております。彼は7月の初めに帰国の途につきますが、途中オックスフォードからの英国人学生数人と、パレスチナに一ヶ月かもう少し滞在する予定で、日本に着くのは私より六週間ぐらいあとになるでしょう。

大斎始日に東京で、悲しむべき政治的な陸軍の叛乱が起こったことは皆さんご存じでしょう。(注・二・二六事件) この事件が、日本の将来に及ぼす影響について論じるのは時期尚早ですし、実際には不可能なことです。暗殺は全く突然に出現したとはいうものの、これは数年来急激に台頭してきた極端な国家主義の成長に関わりをもっております。日本は私達すべての祈りを必要としております。

今年の初め、韓国で、長年働いていた二人の米人教育宣教師が、良心を口実に、生徒を日本人の神社に参拝させることを拒否したために教員免許を没収されました。この神社参拝問題は、以前からある難しい問題の一つです。このことについて、宣教師大会に於て、また内密に何度となく話し合われたと聞いております。日本政府はおりある毎に、神社は宗教ではないし、どの宗教とも関わりはないと云っております。

信仰深いクリスチャンのある人たちは、神社参拝を、英国人がロンドンのホワイトホールにある第一次世界大戦戦没者

記念碑の前を通るときに、軽く帽子をあげて会釈することや、国旗に敬礼することになぞらえておりますし、一方では、同じように信仰深いクリスチャンのある人たちは、参拝は、これを拒否したために無数の初代教会のクリスチャンが殉教したあのローマ皇帝の像に香を献げる行為と同じことであるとかたく信じております。この両極端な考え方のあいだには、もっともっといろんな考え方をする人たちがおります。わが日本聖公会も、他の日本のキリスト教のどの教派も、この問題についての公式見解は全く出しておりません。将来大変なことになるかもしれない他の諸問題と同様に、この問題のために神の知恵と導きをお祈り下さい。

C・M・Sが援助している神戸地方部の北部にある小さな教会の一つ(注・上道キリスト教会)が、昨年11月末、隣の材木置場からの出火で全焼してしまいました。教会といっしょに、幼稚園舎と日本人執事マルコ伊壇(注・八束)の家も焼けました。彼と夫人、幼い子供たちが夜半に目覚めたときには、家はすでに火に包まれており、寝巻のまま脱出し、持って出たものは数枚の子供の衣料だけで、書物や家具等は全部焼けてしまいました。建物は古く、いつ倒れるかわからない木造のもので、それなりの保険も掛けられていましたが、ごく簡素な教会と牧師館を再建するとしても、その費用の三分の一にも足りません。二、三のC・M・S関係の方が再建のための援助を申し出て下さいました。もし他に同じような方がおられたら感謝です。

これから先、つぎつぎと必要が生じてくるでしょうが、松蔭女学校のチャペル建築のためにお願いした、二〇〇ポンドの大半が与えられたことを心からお礼申し上げます。その大半は、後援会の方々からではなく、故国をあちこち旅行していたときに、お願いした方々や団体からいただいたものです。すでに後援会を通さず日本に送金したお金を併せれば、あと一〇ポンド足らずで、目標に達します。いくつかの子供たちのグループが、大斎中に節約したお金を献げて下さることになっているので、イースターまでには目標達成はできるものと期待しております。

次に必要なものは、「明石」に土地を買うためのお金です。ミス・シメオンは、今年初めに日本に帰任され、明石に居を構えておられます。このことで状況が変わったようです。新しい求道者が集まり、教会として使っている村田司祭(注・俊雄)の家の一室は、日曜日は一杯になっております。皆は、土地を捜しており、私はすぐに十分な援助ができるようにしたいと思っております。これはすぐにも教会を建てるということではありません。機会が来れば先ず土地を求めなければならないということです。以前、神戸の修女会の家の家賃について、特別なご配慮をお願いしたことがあります。修女会

【ミス・シメオン】後列左端。右端は村田俊雄司祭。明石・牧師館庭で。

がこれ以外にもいろいろ支払をしておられること、また神戸での生活ぶりや働きについても私達は大変喜んでおります。しかし、主教としてはこの家賃については責任があるのですが、その資金がまたもや底をついてしまいました。そういったことから、修女方とその働きのために特別な関心をお寄せ下さることは私達にとって大変有難いことなのですし、この件の大きな助けになるならばとても嬉しいのですが。

神戸市内の諸教会の日々の活動と発展について素晴らしいニュースがあります。聖ミカエル教会の昨年のクリスマス礼拝の陪餐者数は新記録でしたし、聖マリヤ教会も同様でした。聖マリヤ教会のそれは、七年前の二・五倍以上でした。最近コープと香炉を入手した聖ペテロ教会では、初めて唱詠晩祷をしました。他に嬉しく思ったことは、聖ミカエル教会が一年前から始めた小献金を二倍にしたということです。この教会は、自分たちの牧師の給与を全額出しているばかりでなく、そのうえ地方部の中で新設の力の弱いいくつかの教会の、一つの教会の牧師給を助けるために、地方部にこの小献金を献げようというのです。このようなことをしているのは、地方部では聖ミカエル教会が初めてです。彼らは、地方部と中央の諸資金に対する分担金も同じように殆ど納入しております。日本の現状の中で、教会が成長し改宗者が出ているということは驚くべきことだと思っております。しかも驚きはつぎつ

ぎと生じているのです。

私が日本を留守にしているあいだ、日本聖公会の総裁主教サムエル・ヘーズレット師が、神戸地方部の管理をして下さっています。同師は、これまで数回地方部を訪問して下さいましたが、5月には按手のために地方部内を巡回して下さることになっております。同師の働き、特に5月3日聖ペテロ教会で、神戸市内の教会が執り行おうとしている合同按手式をお祈りのうちに憶えて下さい。この一週間前に、聖職と教役者たちが特別リトリートを行うことになっています。来年の2月は、日本にあった聖公会の宣教団体が、逐語訳すれば、日本の聖なる公同の教会という意味の日本聖公会という組織のもとに合同して、ちょうど五〇年目になります。来年は、その大感謝礼拝が執り行われるはずです。そして今年、日本聖公会は、聖職と信徒の霊的生活を深めることと、ノン・クリスチャンに対する特別伝道の努力という二つの方法でそれに備えようとしています。

私がこういったものに参画できないことを残念に思っております。私はいつも、他の英国人主教方が帰国され、再び任地に戻られた後で休暇をとることにしているからです。全員が同時に不在ということにならないためで、この度もそうしております。

今年は、北半球はどこでもそうでしたが、日本も非常に厳しい冬を過ごしたようです。この寒さは長く続き、日本からの手紙によれば南海岸ですら3月の初めに氷点下12度だったそうです。神戸地方部は、地震に関しては地理的に悪いところではありませんが、2月21日過去九年間で最悪の地震に見舞われました。ミッション関係の建物に大きな被害があったとの報告は受けておりませんが、いくつかの教会の壁にひび割れが入ったと聞いております。

後援会から、クリスマス・プレゼントとして素晴らしい本をいただき嬉しく思っております。これが始められてこのたびで三年目だと思います。またお手紙を差し上げることができないでいる方々からクリスマス・カードなどをいただき感謝をしております。故国を旅しておりますときには、できるだけ多く遠く離れておられる後援会のメンバーにお会いするように努めてきましたし、これからもそうするつもりでおりますが、それでも、お会いできない方々がおられることは申し上げるまでもありません。

この場をお借りして、もう一度皆さん方のお祈りにお礼申し上げます。

皆さんお一人お一人に、よいイースターを。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

書簡　第40号

一九三六年(昭11)九月六日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

この前、日本から後援会便りを出したのは一年以上も前のことでした。そこで、以前から後援会のメンバーであったかたには思いおこしていただきたいし、私が休暇で故国にいる時後援会に入会して下さった方には説明しておきたいことがあります。それは、もし皆さんが、郵便物に「シベリヤ経由」とお書きになれば、二週間乃至三週間と早く日本に送られてくるということです。ところが、この文字のないときには、英国の郵便局はカナダ経由扱いにします。この場合にはおおむね四週間かかります。このように「シベリヤ経由」という文字があるとないとでは大変な違いがでてくるということです。

7月21日の聖マリヤ・マグダレンの日の素晴らしかった最初の晩祷と、その後で大勢の方々にお別れできたこと、そして皆さんに、エドウィン・バッジャー神父を紹介することができたことなど、私はいつまでも忘れません。バッジャー神父は、あとで、故国であのように多くの方が、祈りでもって働きを支えて下さっているということを、肌で感じて非常に感激したと話しておられました。

日本帰任の旅路、太平洋、大西洋で、特にカナダ大陸横断列車で旅の友ができたことは、気分転換という意味で嬉しいことでした。オンタリオ湖を渡るのに一日、もう一日はナイヤガラの滝の見物に費やしました。太平洋の航海は非常に穏やかなものでした。

最後の最後まで、非常に忙しい毎日でしたし、そのうえあの英国の気候にもかかわらず、故国での毎日は楽しく、その思い出を胸に帰任いたしました。沢山の難問を抱えてはおりますが、英国は他の国と比較して大変豊かな国ですが、いかに豊かであるかということを英国自身が少しも分かっていないと思います。お陰さまで、楽しく過ごせたことを皆さんお一人お一人に感謝したい思いでいっぱいです。

この前の後援会便りを書いたその直後、ジョン・マキム主教がホノルルでなくなられました。マキム主教は引退され、日本を引き揚げられてからホノルルにおられましたが、それも半年足らずのことでした。師父の魂、主のもとに安らかにいこわれますように。

私達が、神戸で下船する二日前、横浜港まで帰ってきたとき、私の不在中神戸地方部を管理して下さっていた、横浜地

方部の主教であり、主教会議長でもあられるヘーズレット主教と船上でお会いし、長時間にわたり話しをしました。私達は、神戸地方部や日本聖公会の抱えている問題点を話し合っただけでした。もっと再々このような機会を持つべきでしたが、同師は、三日後に急に帰国されました。病いに倒れ、数年間、英国で闘病生活を送っておられた主教夫人の病気が悪化し、帰国するようにとの電報を受け取っておられたのです。どうぞ、同主教のためにお祈り下さい。

【ミス・ダブルデー(左)とミス・バッグス】

私が神戸を留守にし、ヘーズレット主教が管理をして下さっていたこの六ヶ月のあいだに、いろいろと変化がありました。海軍の大きな港である「呉」で、もう一人のC・M・S宣教師のミス・バーグスと働いておられたミス・ステラ・ダブルディが、二つの任務のため大阪に出向されました。一つは、女子高校(注・プール学院)での臨時の仕事、もう一つは、日本人婦人伝道師養成所でのものです。

春先に、パウロ永野司祭(注・武二郎)が、伝道者として満州で働くようにとの要請を受け入れました。永野司祭は、地方部の北岸松江で、信徒、執事、司祭として四〇年にわたり働いてきた人です。妻子がある同師にとって、奉天を拠点として、広い範囲に散在している日本人クリスチャンを牧会するという仕事は大変なことです。私が英国を離れる四日前、ハイ・レイで開かれたS・P・Gの宣教師の総会で、オーバース夫妻にお会いしました。このご夫妻は、長年の奉天での宣教師としての働きを終え、英国におかえりになったところで、丁度奉天を去られる前に開催された永野司祭の歓迎会の様子を詳しく話して下さいました。

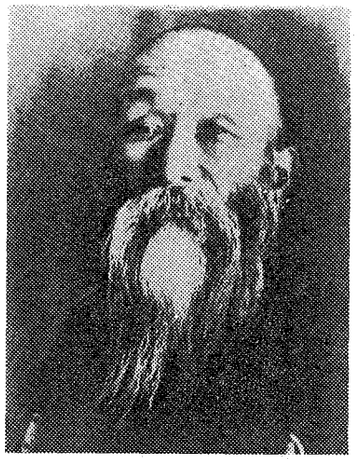
何ケ月か「松江」では無牧が続きましたが、ヘーズレット主教が、ご自分の地方部の若い司祭大原辰三師を派遣して下さいました。大原師の後任には、私達の地方部の二人の執事の一人マルコ伊壘(八束)が指名されました。彼は昨年秋、火災で教会と牧師館(注・境)を失った人です。元の場所に、簡単な木造の建物を建てたところで、転任して行ったのです。彼同様失った人の代わりを見つけなければなりません。

次のことは、私が帰任の途にあった8月の初め、最長老の

参照・P106

【大原辰三司祭】（右）と藤本寿作司祭。松江で、昭11年。

伝道師（注：益田喜代吉）が亡くなったことです。同師は一年前、私の離日直後、軽い脳溢血で倒れましたが、その後不思議によくなられたのですが、八〇才の高齢でしたので、この最後は予測されていなかったわけではありませんでした。彼は、永野師のように四〇年以上も、同じところ四国の東岸にある「撫養（むや）」で働かれました。彼は、普通の伝道師とは全く違っていました。その地方の全部の信者は彼の働きの結果によるものです。また家族全体をつかむのがどの人より上手でした。しかし、ついていくにはとても難しい人でした。彼は聖職按手を絶対に受けませんでした。信者は、二〇マイル離れた市（注：徳島）からやって来る司祭から聖餐を受けておりました。彼らは教会のために貯えたお金を持っておりましたが、彼が生きているあいだは使われることはありませんでした。彼は、彼が永年働いた教会の質素な一室で、最後のときまで頑張るとつねづね云っておりました。教会内の諸事のみならず、地域社会のことにも大変なワンマンで、しばしば、喧嘩その他さまざまな問題を、土地の実力者よりも上手に解決しました。白くて長いひげを蓄えた非常に体格のいい人で、どちらかといえば絵にでてくるモーゼのようでした。彼は、礼拝のときに絶対献金を集めませんでしたし、地方部や教務院の教会基金に奉献するということもしませんでした。彼の会衆は、聖餐式執行のために訪れる司祭の説教と、年一回堅信式のために巡回してくる主教の説教を聞く以外、彼の説教以外の説教を聞くことはありませんでした。私は、ここで一家族三世代を同時に按手したことが一度ならずあります。彼のクリスチャン・ネームは、純然たる日本人の名前で、「喜代吉」といいましたが、彼はいろんなことを、よくその



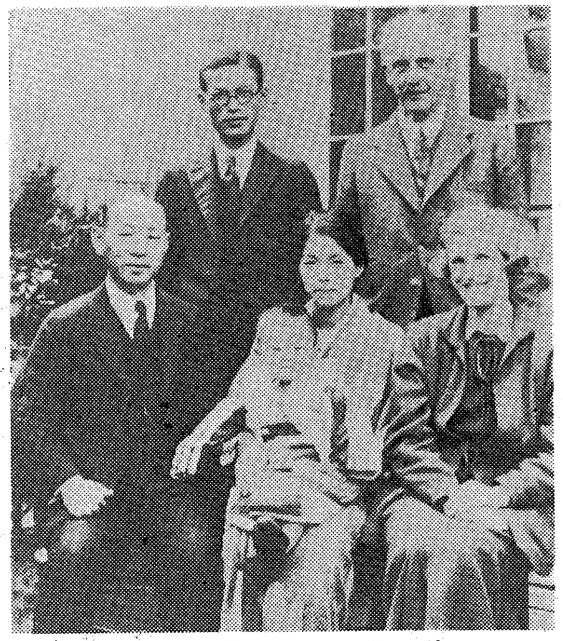
【益田喜代吉師】

名前のせいにしていました。これは、かって管理司祭であったある宣教師が話してくれたことです。

教役者の集りでのことです。特別説教者を本州から招いて、伝道区内の各教会を巡回してもらうべきだという提案に、彼以外全員が賛成しました。彼が、そういった人を迎えることに反対の理由を聞かれたとき、彼は次のように答えました。「それはこういったようなものです。もしその人が、喜代吉よりいい説教をすれば、会衆は喜代吉に失望するでしょうし、逆に、同じ位の説教であれば、その人を迎えた意義はどこにあるのですか」。彼はとても謙遜な人でしたが、その考え方がいかに自己中心的であったかということがお分かりでしょう。そして、彼について行きながら、彼の教会の人々を傷つけることなく、もっと大きな気持ちになってもらうように導くことがどんなに難しいことであったかもお分かりいただけるでしょう。益田喜代吉の魂のために、彼の後任者選びのために神様の知恵と導きをお祈り下さい。

私の英国滞在中に送られてきながら、英国を離れるまでに、手許に届かなかった手紙がありました。それは、もう一人私達の伝道師を失うということ、C・M・S関係の若い日本人伝道師の引抜きについて、私に電報でもって同意を求めるというものでした。大阪教区の何年ぶりかの新しく熱心なパリッシュが、今月から無牧になり、いま神戸地方部第二の都市「広島」で日本人司祭と働いている若い人を欲しがっているのです。私の帰神後、大阪の主教が私の同意を求めて来られました。この若い人、小池俊男に会いましたところ、彼は、この新しいパリッシュに行くことに大きな期待をもっていることを知りました。ですが、大阪の主教と、つぎつぎに去って行く若い人達に、この地方部が痛みを受けるんだということを云う以外に何ができるでしょう。彼には、本当に望んでいるのであれば、要請を受けてもいいと伝えました。彼はそうするでしょう。彼は、益田師が亡くなった今、地方部で最

参照・P106



【小池師父子】昭11年11月、訪日されたバークレー師と西宮で。

年長になられた伝道師(注・小池耕造)の息子です。父耕造師は、非常に優れた福音伝道者ですが、息子はそれ以上に、豊かな将来性をもっております。

皆さんに思い出していただきたいのですが、神戸地方部のあちこちの三つの伝道区は、本国からC・M・Sの援助を受けているということです。そして、このたび書きました状況の変化と人員の損失は、全てこれらの伝道区のどれかで生じたという事実です。伝道区はC・M・Sに属するものではなく、地方部に属します。そして、主教が問題を処理しなければなりません。少なくとも、教役者を失うというような問題は、主教がかかわらなくてはなりません。C・M・Sが徐々に日本への援助金を削減しているということ、皆さん方のある方々には昨年の年次総会で申し上げましたが、つぎつぎに生ずる難しい問題を助けるために、一つの伝道区の財政を肩代わりしてもいいということを、私がC・M・Sに提案しているということを思い出していただきたいのです。C・M・Sは、少数の教役者での現状維持を望んでいるようですし、これらの損失はその方針を助けることにもなりましょう。この欠員の穴埋めには、今年の春、神学校を卒業した神学生がおり、加えて、英国から帰国したパウロ古本(注・正夫)がおります。彼は、オックスフォードの卒業生とパレスチナの夏期コースに参加したのち帰国するということになっておりました。しかし、パレスチナ地方の悲しむべき状況のため断念せざるをえなくなり、スエズ運河経由でどこに寄らずに帰国の途につき、8月のある日の夕方神戸に上陸しました。バッジャー神父と私は、彼とは逆に地球を回り、二週間ほど短縮した旅をし、次の朝十二時間遅れで神戸に上陸しました。

夏の終りの猛暑の中を戻って来ました。この頃は暑いだろうということは知っておりましたが、今年の9月は、過去三十年間では最高の暑さです。バッジャー神父と私とは、神戸の近郊の山の小さな借家のバンガローにいるストロング、アレン両司祭に合流しました。三、〇〇〇フィート近い高さなのですが、神戸市内とは大変な違いです。しかし、私達のだれかは、仕事のために毎日山を下りておりますし、私は、人員の損失や問題などについて聞いたり、どうしてこの穴埋めをするかなどを話し合っております。この暑さにもかかわらず、秋働きを始める前に元気で帰任できてよかったと思っております。

ここ何週間雨が降らず、神戸は酷い水不足で、今月初めから毎日強制的な時間給水が始まっております。この暑さでは大変なことです。加えて、今のところ雨が降る兆しはありません。二週間前に台風が発生したのですが、北東に進むかわりに北に進路をかえ、韓国南部で洪水と死者と災害がありました。私達は、何ごともなかったのですが、相変らず、カラ

カラ天気が続いています。他方、2月の地震では、松の舎の被害は、予想していたより軽くてすみました。アレン司祭が、壊れた個所のほとんどを修理して下さいましたので、今では被害個所はほとんど分からないほどです。

地方部の、神戸とは反対の端でのストロング司祭の働きは、着実に実を結んでおります。例えば、最近神戸の聖ペテロ教会の非常に熱心な信者と彼の奥さん(注・蜂谷ふみ子。千代修女談)が、下関から七十五マイル離れた「下松(くだまつ)」というところに引越してこられましたが、ストロング司祭が、聖餐式のために定期的に訪問しなければならない場所が増えただけでなく、連絡のとれている人々以外に、近在に散在していて我々と接触のなくなっている人々を、熱心に連れてこられるということです。このような遠く離れている人達のため、広い地域にわたって働く司祭の為にお祈り下さい。

アレン司祭は、私の留守中、ミッションの会計や彼自身のパリッシュの仕事以外に、大事な細々とした日常の仕事や、松の舎を守るために働いて下さいました。大変感謝しております。松蔭女学校と明石についての私達の計画をお話しするのは、次の手紙まで我慢しましょう。婦人宣教師たちが、今週ようやく休暇から帰ってきますが、まだ出会っておりません。

年次総会が素晴らしいものでありますように。総会に出席

参照・P102

された方は、ミス・ストークスがどんなによくなっておられるかごらんになると思います。ミス・ボールスもまた、随分よくなっておられると聞いております。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

【昇天教会婦人会でミス・バーバー】昭和10年頃。

書簡 第41号

一九三六年(昭11)十一月十四日
日本・神戸・四の宮 松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

先週皆さんの何人かの方から、先月の年次総会がどんなに心暖まる、幸せなものだったかという手紙を受け取りました。二十六年前私が最初に来日したとき、私が会いに行った主教が今年の総会の議長でしたし、私が東京の外で働いたときの責任者であった最初の司祭がウォルトン司祭でした。ですから、今回お二人が皆さんと話をしたということは特別にうれしいことで、お二人とミス・ストークスに感謝しています。ミス・ストークスはゆっくりですが回復に向かっています。皆さんが彼女のために祈っていて下さると信じています。ミス・ボールズが大変良くなっていることを喜んでお知らせします。 ミス・ストークスが皆さんに幼稚園の働きについてお話したと思います。ミス・ストークスの留守中、代りの人がいないのでこの仕事をしてくれているミス・ボールズは、神戸市内の二つの幼稚園の先生たちが、大変熱心で有能だと大変にほめています。我々は、他の町に教会と関係のある幼稚園をすでに六園持っていますが、ほかにもいくつかの教会が、建物や必要な経費がえられるなら幼稚園を始めたいと云っております。もし創設できたら教会の働きに大きな助けになることでしょう。特に「御影」の聖マリヤ教会がぜひつくりたいと熱心ですが、この計画は、二年前にケテルウェル司祭が去られる以前からあったのですが、まだ実現していませんでした。でも我々は希望を持っています。どうかこれらの望みが叶えられますように、我々の全ての教会の子供たちへの働きのために祈って下さい。

日本では、生活への圧迫が一層厳しくなってきているようです。これは子供たちにも影響します。小学校の先生は、子供たちに一生懸命働いてお国のために役立てと云っています。ある信徒の父親が、近頃彼の九才になる子供が、学校で週二十七時間勉強し、時々先生の自宅で勉強し、その後まだ宿題があるのだと云っていました。両親が、ときにはのんびりするよう説得しようとすると、「えー、そんなことしたら先生がすごく怒るよ」と云うというのです。

地方新聞の今週の社説にこんなのがありました。「近年、大阪は、学校の試験制度のせいで落ちこぼれる男女生徒の数の多いことで評判が悪い。試験の数と範囲を縮小すべきだという提案があったが、問題は学校の数が足りないためで、試験競争以外にこれを解決する公正な方法はない。どの中学校

の欠員に対しても三人から四人の志願者がおり、競争は大変厳しく、かわいそうな子供たちは一晩中起きて勉強し、また早朝登校しなければならない」。

大阪は特に評判が悪いのかもしれませんが、全国的に同じような状況なのです。「倫理道徳」と云われているものは「国家主義」になり易く、こういった状況では宗教に近いものになるということを忘れてはなりません。家庭での教会的教育に熱心な皆さんは、魂の鍛練なしの知識の積み重ねがどんなに無駄なことであるかよくご存じでしょう。ここでの生活のペースは速くなる一方で、昨年の神戸市における肺結核による死者は、かるく二千人を越え、この市だけで、昨年一年に三百件近い自殺があったのです。

我々の松蔭女学校では、今は少ないのですが年々増えつつある卒業後の一年コースに残る生徒を含めて、現在八百人以上の生徒がいますが、毎年定員よりかなり多い入学志願者があります。我々の留守の間に学校の理事たちは、学校の近所の土地にどんどん家が建つので、機会のあるうちに学校の敷地を拡張するために、隣接の土地を購入すべきだと決心したようです。敷地の右側にそって、校名が「松のこかげ」という意味の松蔭女学校にはまことに相応しい松林があります。理事達は学校の資産を全部担保にして借りた八〇〇〇ポンドで、この松林を全部買い取ったのです。彼らはこの元利を十五年で銀行に返済する約束をし、それを授業料でまかないたいと望んでいます。しかしこのことは、新しい校舎を建てる資金は当分ないということです。今すぐできることといえば、校長宅と、新校庭に新たにテニスコートを設計しようと計画しているのですから、現在のテニスコートを主校庭から取り払うことです。次の希望は、出来ることなら来年の夏までに水泳プールを造ることで、これは父兄や卒業生に寄附を頼むつもりのようです。

これらは全てミッションの財産ではなく、ミッションからもかなりの代表者を送っている学校の理事会によって運営されております。私は借金が返済できないのではないかという心配はしていません。日本人は、子供に出来るかぎりいい教育を受けさせるのに熱心ですし、そのことをよく理解しています。しかし彼らの殆どはクリスチャンではないので、物事の宗教的な面に関心はうすく、むしろ学校の雰囲気とよい影響を喜んでいるようです。

我々の婦人伝道師の家と女生徒の寄宿舎は、校舎の立っている校地の隣に立っているのですが、ミッション所有の土地に立っているミッションの財産です。我々はこの土地に礼拝堂を建てる準備をしております。私が帰国しましたときに、このことについて皆さんに特別な援助をお願いするつもりです。

学校の婦人たちは礼拝堂の案と同時に、現在礼拝堂として使われている寄宿舎の一部の活用について知恵をしぼった結果、このさい寄宿舎の拡張と模様替えをすべきだと力説しています。私もこの案に賛成で、その方法手段を検討しているところです。礼拝堂の建築はいくらか遅れるかもしれませんが、両方の工事を同時にできれば結果的には支出の節約になると思います。

前回、地方部の端でのストロング司祭の働きが着実に発展していると申しました。このことは、彼が彼の旅行について私にくれた手紙を紹介すればよく分かっていただけると思います。公表されるべき手紙ではないのですが、彼も許してくれるでしょう。

『金曜日の夜、四国の北西へ行くために瀬戸内海を航行しているとき、我々は台風の進路をよこぎる破目になりました。特別な航路をとったのですが、それでもかなり台風の影響をうけ、高浜着午前八時半の予定が、十一時半になりました。』その後、松山の聖アンデレ教会での平常の教会の仕事のことが書かれていて、そして月曜日『今治での聖餐式と説教のあと、信岡執事は、按手志願者近藤さん（注：松山聖アンデレ教会教籍簿によれば近藤松廣）の住んでいる西条へ行きました。その間に、私は昼十二時四十五分発尾道行きの船に乗り、午後九時半に下松に着きました。この船は変更になっていたので、下りの急行に十分ほどの差で乗り遅れてしまいました。十一時就寝、翌朝五時半の聖餐式に間に会うように起床しました。早祷のあと、朝食をとっている蜂谷(ハチヤ)と元田と雑談をし、その後、告悔を聞き、柳井行き八時十二分の汽車にタクシーのお陰で間に会いました。そこでは小川さんのお宅で聖餐式を捧げ、十時半徳山行きの下りの汽車にとび乗りました。徳山で乗りかえ十一時半着、十一時五十分発。朝食を食べたくなり喫茶店へ駆け込み「ライスカレー」を注文し、それをのみこみ、街を駆け抜け、汽車にとび乗りました。

「下松」での人々の輪は広がりつつあります。根岸さんの息子は、最近東京から花嫁さんと帰ってきました。元田さんの息子(注・元田作之進主教の二男か三男か?)は彼女が絶対受聖餐者だというのですが、まだ分かりません。元田さんによると、ある会社の技師長の奥さんが受聖餐者であり、彼の家族の昔からの知り合いであるということが分かったそうです。

或る熱心な求道者が、蜂谷夫人のところで女中として働くことになるでしょう。この婦人は、昨年の特別伝道集会にこられた方で、三田尻に引越さなくてはならなくなるまで定期的に礼拝に出ていた方です。

信岡執事が、近藤さんが11月29日の夜松山へ来ることができるだろうと云ってきています。次に彼が訪ねた新居浜の藤

参照・P102
参照・P103

井さんは、二十年間教会から遠ざかっていた人です。彼はまた、主人は按手を受けていないが、夫人は或る司祭の娘だというご夫婦がおられることを知りました。西条にいる他の夫人のことも聞いたそうですが、受聖餐者かどうかまだ分からないとのことです。これらの訪問のため、彼が疲れ果てて帰ってきたのは午後十一時でした。』

ストロング司祭と彼の同労者たちがどんなにたゆまず働いているか、どれほど広い地域で失われた信徒といわれる人々を探し求めているかということがお分かりになったと思います。

我々の日本にある教会日本聖公会が、来年創立五十周年を祝うための準備が二つの方法で進められていることは、私の在英中に書いた手紙で申しました。その一つは、堕落し失われた信徒を教会生活とサクラメントに連れ帰るための特別な努力をすることです。先に述べた実例、ストロング司祭の地方でのこのような働きは、ここでも他所でも、福音広布のための十分な働き人がえられるならもっと拡張できると思います。もっとも、この「超過勤務」を「福音広布」と云えるのであればのことですが。

この地方部の十の地区の中に、まだ教会も定住教役者も全くない一地区(四国の北西地区)があることを覚えておいて下さい。神戸でもどこででも、教役者たちは迷っている人々を連れ戻すために特別な努力を続けています。

五十周年記念のためのもう一つの準備は、信者のための集中的な働きかけです。この目的のためこの秋、数個所で信者のための特別な日を設けました。四国の東部、南部そして岡山でやりました。下関でもしたかったのですが、これはここ当分やむなく延期ということになりました。春には神戸であり、この十日以内の祝祭日に、五つの町の教会と姫路と淡路でもすることになっています。

午前中に、どの教会にも入れないほど大勢の参列者があると思われますので、松蔭女学校の大講堂で唱詠聖餐式を捧げるつもりです。この日は、早朝聖餐式、大礼拝と晩祷の他講演二つ。午後は「我々の日常生活と信仰」「なぜ信徒が道からそれるのか、どうしたら彼らを連れ戻せるか」「聖職と信者は、お互いに助け合わなければならない」などのテーマでグループ討議をします。どうかこの特別行事の成果の上に神様の祝福があるように、また我々が失われ散らばっている信徒を見つけ、連れ戻すことができますように祈っていて下さい。

私の帰国中に、特別にお願いしましたもう一つの働きは「明石」のことでした。ご存じない方もおられるかもしれませんが、ここは我々の最も新しい拠点で、S・P・Gから五年期限の援助を受けていますが、間もなく三年が経ちます。残

りの二年で、土地を購入するだけでなく、少なくとも当座礼拝のできる司祭館だけでも建て、現在の借家の家賃を払い続けなくともいいようにしなければなりません。明石市は神戸の西十八マイル、急速に成長しており、今では四万人の人口があります。近い将来住宅地になる地域に良い土地が買えそうです。このために皆さんが私の帰国中に下さったお金と、こちらの信者が集めたお金を合わせると、購入価格にあと三十ポンドというところまできています。しかし、えてして最後の最後に障害が現われたりしますから、まだ確実とはいえません。

ヘーズレット主教は、夫人が亡くなられる三週間前に英国に帰国することができ、このことを大変感謝しておられます。そして、亡くなられた夫人のための我々の祈りを求めておられます。四十年前、結婚される前のヘーズレット夫人の最初の伝道時代は、今我々の地方部に属している「福山」でした。

前の手紙に書きましたC・M・S関係の人事(deaneries)は、退職や移動の結果落ち着きつつあります。彼らの教役者不足は深刻なのですが、増員は難しいでしょう。

皆さん楽しいクリスマスを迎えられますように。もし「シベリヤ経由」と書き加えるのをお忘れにならなければ、皆さんから日本宛のクリスマスの手紙はまだ間に会うと思います。

いつも皆さんに感謝している友である
在神主教　✠バジル

書簡　第42号

一九三七年(昭12)二月十七日
日本・神戸・四の宮　松の舎にて
シベリヤ経由

私の友人ご一同様

とうとう、初めて一人の日本人青年が聖職に叙任される日がやってきます。私はこの青年を、彼が聖職を志願したときから知っています。日本聖公会の神学院は、十教区・地方部全部に対してただ一校が東京にあるだけで、各地の聖職養成所の生徒達が、そこで一緒に教育を受けているということを覚えておられると思います。初めの頃は、各ミッション、米国ミッション、C・M・S、S・P・Gが別々の神学校を持っていました。一九〇八年のランベス会議と関連のある全聖公会会議(Pan Anglican Congress)(こう呼ばれていたのですが)の時に、英国内で募金されたが、英国内向きだけに制限されない、主要経費に対する補助金の素晴らしい献金がありました。この資金から、日本の教会に大きな贈り物があり、その一部が、北東京に土地を買い、中央神学院の校舎を建てるのに使われ、残りは不十分ながら、学校の教職員のための基金への寄附になりました。これで別々だった神学校が一つに合

併されたのです。

昨年私が英国に帰国中に、神学院は二十五周年を迎えました。ですから神学院は、この四月末五十周年を祝う教会の組織が成立してからちょうどその歴史の半分の間、教会のこれからの聖職者を訓練してきたのです。

私は神戸に来て、聖職者の養成がいかに緊急を要することであるかに気付きました。しかし、最初に神学院に送った二人の青年は病気で倒れてしまいました。神学院の課程は、なんとご丁寧に全部で六年間もあります。また若い人が教会勤務を始めてもすぐ聖職にはなれません。このようなわけで、いま最初の青年が当面の準備をしているのです。

英国のある教会、というよりその教会の信者のグループが神戸後援会を通じて、この青年が神学院で教育を受けるのに必要なお金の大部分を下さっていて、その上、もう一人の男性の養成も援助して下さっています。ご援助を大変感謝しています。

どうかステパノ袴田(注・観一)のために祈って下さい。彼は今度のイースターで、神戸の聖ペテロ教会でアレン司祭の許で三年間信徒奉持者(lay curate)として働いてきたことになり、三位一体主日に執事に叙任されることになっています。

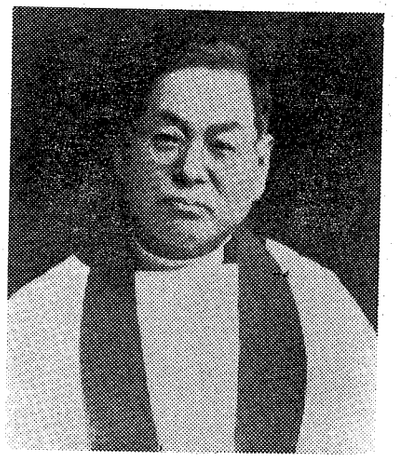
ヨハネ信岡(注・修吉)のためにも祈って下さい。彼は松山でストロング司祭の許で働いていますが、同日、司祭に叙任されるよう願っています。前にお話ししたことがあると思いますが、日本での(聖職)養成は英国での養成よりも数年長くかかります。この二人は今春三十一才になります。

日本では今日、どんな学校、大学でも政府の許可なしではやっていけません。我々の神学院は、東京ですぐ近くにある大学(American Mission University)付属の特別課程という

【袴田観一執事】前列中央。
聖ペテロ教会で、昭12年。

ことになっています。学生は、特別な手続きなしで他の大学へも行けるのですが、普通はそうしません。この付属方法は不便なので、最近主教たちと教職員の間で討議されておりますが、まだ結論はでていません。

六ヶ月前、日本に帰って最初の手紙で、私の不在の間に地方部の教役者数人がいろいろな事情で辞めたことをお知らせしました。その手当の人事異動がやっと終ったところです。私はクリスマスは松山におりました。ストロング司祭が下関に行っておりますので、クリスマスに松山の信者が聖餐式に与るためです。クリスマス前夜に、二〇〇マイルを夜の船で行き、クリスマスの夜、夜の船で帰ってきました。聖ステパノ日には、自宅でなんとか必要な仕事をすませることができました。それからまた夜行列車に二五〇マイル乗って北海岸(注・松江)へ行きました。聖ヨハネ日の主日聖餐式の前に、昨年の秋、皆さんが彼と彼の新しい働きのために祈って下さった大原辰三を、満



【横田金熊司祭】

州へ行った司祭の後任牧師に任命しました。

八月になくなった八〇才の教役者のあとに、モーゼ横田(注・金熊)が四国の東岸(注・鳴門)に転任しましたので、1月の最後の主日に任命式をしました。彼は十六年間福山で働いていました。彼の後任には、バルナバ新(注・邦好)という一番新しい教役者を派遣しました。彼は昨春神学院を卒業し、任地決定のために私の帰国を待っていたのです。彼はその間、聖ミカエル教会で八代司祭の手伝いをしていましたが、このことは彼のために大変よかったと思います。この地域の担当司祭が彼の司祭です。この司祭は、汽車で三時間かかるところに住んでいるので、この青年は月に一度しか陪餐できません。働き人をこんな孤立したところに配置するのは好きではありませんが、ときに仕方がないこともあるのです。ストロング司祭が不在中、月に一度しか陪餐できない執事のために私が松山でやっているように、時々聖餐式のために福山に行こうと思っています。この執事は、彼自身のため人々のため行き届いた霊的交わりを続けています。

前回の手紙で、ミセス・ヘーズレットの日本での最初の勤務は「福山」だったこと、ヘーズレット主教が、彼女を記念する基金を集めておられ、その利息は、主教とこの地方部の常置委員会が自由に使えることになり、それが福山での働きを助けるために使われるようになったことをお知らせしまし

た。福山でのこれからの働きのためにお祈り下さい。

二ヶ月程前、ストロング司祭の教会、下関と松山で突然財政上の問題が起こりました。どちらも、今の土地は現在の目的のためには十分であるけれども、教会の将来のことを考えると十分とは云えないということだったのです。どちらの土地も道路や小路の曲がり角にある角地に隣接していたので、いつかこの小さな角地を買取って、我々の土地に加えたいと願っておりました。ところが同じ月に、この両方の土地がよその人に売られそうで、松山の場合は、すでにそこに小さい店が建てられる計画があるということを聞きました。多くの困難と交渉、そして店主になるはずの人が、別の手筈を整えるのを手伝ったりしたあげく、ようやくその土地を買取り、下関では買収のための手付金を払いました。どちらとも、地元の小さな会衆が、出費の内の彼らの負担分を支払うためによくやっています。しかし、これらの土地を教会のために確保できたのは、昨年神戸後援会が特に気前よく、私がお願いした二つの特別な方法で我々を助けて下さったことと、同時に私の自由資金の一般基金(general fund)を減額しないで下さったお蔭なのです。感謝と同時に、今後同じような援助が継続されるだろうという希望で励まされています。どうかそのようにお願いします。

私が援助をお願いした二つの特別な事業は、松蔭と明石の礼拝堂のことです。前に、いくつかのことがこのことの妨げになっているとお知らせしました。工事はやっと始まりましたが、物価の急速な高騰のために経費の相当な増加に直面しています。もちろん、今日の物価の高騰は全世界的なものですが、日本では、税金と関税の深刻な上昇に直面しており、建築資材の価格は、今年にはいってから二〇％以上あがりました。お陰で礼拝堂の見積は不十分ということになってしまいました。まだはっきりとした金額は分からないのですが、どなたかこの思いがけない困難な問題に特別な援助をしてくださる方があるかもしれないと思い、お願いする次第です。経費の増加分は五〇ポンドくらいになりそうです。地方部の近くにいる、建築についてかなり経験がある米国人司祭が、彼の友人であるクリスチャンの大工を紹介してくれました。彼の下で四人のクリスチャンが働いていますが、彼らは日曜日には仕事をしません。日本では珍しいことです。彼らは現場にある小屋に住んでいて、日曜日の朝は聖ペテロ教会の礼拝にやってきます。

「明石」ではまだ土地は決まっていませんが、教会は霊的に前進しています。村田司祭(注・俊雄)から私宛の年末の年度報告によると、彼が二年半前赴任した当時は、日曜日朝の会衆は平均四人だったのが、このクリスマスは十四人が深夜の聖餐式に参列し、内十二人が陪餐し、クリスマスの朝10時

には十六人が参列、さらに三人が陪餐、一人が洗礼を受けたそうです。もちろん、この増え方もたいしたことはないように聞こえますが、それでも日本ではかなりいい方で、教会として使われている牧師館の部屋が、窮屈なくらい込み合います。村田司祭は、定住の教役者がいないために正しい道からそれたり、迷っていた信者を一つの市だけで十人見つけ、その内七人が復帰し、受聖餐者になっています。この地方部の教会も教役者もいない市に、同じように司祭を置くことができたら同じようなことが起こるのは確実です。このように町や村から離れている市が、なんと十六もあるのです。この十六のうち少なくとも四ヶ所は、広大なストロング司祭の働く地域の中にあるのです。彼が援軍を求め続けるはずです。神学院には、六人の青年がいろいろな段階の教育を受けていますが、もし彼ら全員が今年中に働けるようになるとしても(実際には一人もそんな状態ではないのですが)、彼らに俸給を払うことができないのです。自給する力が増すにつれて、少しづつ教役者の数を増やしていくしかありません。私がただ望んでいることは、明石のように母国からの特別な援助で、少なくとももう一つ定住教役者のいる拠点をつくる方法を見つけることです。明石は今も名目上は、神戸の聖ミカエル教会の伝道所ですが、今年の六月に独立することになっています。

12月に、うれしいことにラブアン(Labuan)とサラワクの主教が、神戸の英語会衆のオール・セインツ教会の十日間の伝道説教会を訪問して下さいました。人々の心は、英国で起こっている不況のことで一杯で、説教会の効果はいま一つでしたが、私の知る範囲では、主教は多くの人々のために大きな助けとなり、一つの成果として、日曜日朝8時の礼拝は、月一回唱詠聖餐式にすることになりました。この礼拝(唱詠ではない)と晩祷は、永年この地の英国人が多く出席する礼拝だったのです。主教ご自身もご訪問を楽しまれたと思います。先週、休暇から帰任中の韓国の主教の短いご訪問がありました。

東京で4月28日の夜から30日のお昼まで開催される(組織成立)五十周年の感謝集会を心待ちにしています。この日は、日本全国から全聖職と認可されている教役者と、各教会から信徒代表一人ずつが参加します。これは多分放送されると思いますが、唱詠晩祷で始まり、29日の朝は、団体陪餐のある感謝の唱詠聖餐式があります。この日の午後は、全体が五つの部門に別れて、将来の計画と問題について討議をします。そして最後の日の朝、市内各教会での早朝聖餐式の後、いくつか講義があり、その後の集まりでは、各国の聖公会からの挨拶があります。米国、英国や他の国から主教方がおいでになり、出席して下さればいいと思っています。

春から又休暇の連続が始まると、効果的な働きが制限されることになります。休暇の制度は、宣教師の健康と元気回復のためだけではなく、母国との連絡を保つためにも良いと確信はしていますが、当地での戦力が減少してしまうのも本当です。まずミス・リーが行きます。ここを4月上旬にたって、カナダを経由し夏の初めにお国に着きます。そして四ヶ月後、ストロング司祭とミス・スミスが続くはずです。我々は、この冬母国で大流行したインフルエンザから逃れることができました。ミス・ウイリアムズは先月盲腸の手術を受けましたが、予後が少し悪く、直るでしょうが少し時間がかかりそうです。

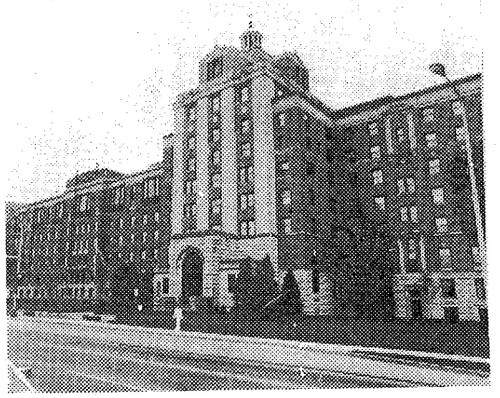
この機会にもう一度、クリスマスに手紙を下さった方、贈り物を送って下さった方、後援会からの貴重な図書のために寄附をして下さった方にお礼を申したいと思います。お一人お一人に返事を書くまでに時間がかかると思いますので、それまでは、この私の心からの感謝の言葉でお許し下さい。

いつも皆さんに感謝している友である

在神主教　✠バジル

発病・離日・手術・逝去

書簡42号が書かれて数年、日本は第二次世界大戦に突入せんとする時代で、バジル主教にも各方面から辞任を求める声が投げられてきたが、主教は『私は神によってこの職に任ぜられたのですから』と断わり続けておられたという。しかし主教は、この頃ガンにおかされ、15年9月、手術を受けるため渡米。その後一旦帰任されたが、翌16年9月、再渡米。リバプール出身の英国人外科医メイヨー兄弟の病院で、当時、外科に関しては世界一、二と云われていたミネソタ州ロチェスターのメイヨ・クリニックで手術を受け、のち英国に帰られ、オックスフォードの病院でなくなられた。今も、同クリニックには、師のカルテが保存されているそうである。(佐藤)



【昔のままの病院本館】

バジル監督を語る

八代斌助主教記

一九六〇年二月から九回にわたって「神のおとずれ」に掲載されたものからの抜粋。

どんな主教でも、その義務の一つは建築の事業なのだ。これは世界中同じことで、主教ともなれば何もせずに神々しくしておればよいのだがそうも行かないのだ。

バジル監督の建築事業の最初のものは、須磨聖ヨハネ教会であった。次に造り出したのが境の教会で、これは火事で焼けたおかげで、一千円を監督さんが出されて出来たのがあそこであった。続いて、岡山の聖オーガスチン教会の建築が始まった。その次が、高知聖パウロ教会で、この建築は確かに立派なものであった。これは、楠瀬という歯医者がやったものだ。入歯の上手な人で、それだけに鉄骨の組み方でも堂に入ったもの。

続いてなされた建築は、松山の聖アンデレ教会の建築で、このためには、松山で先生をしていた同期生であったリチャードという宣教師が大分金を出されたものだ。彼は、南東京の宣教師であったが、第一次世界戦争の時に、教会を助けるためにマッチの買い占めをやって、あべこべに大損をして、ミッションに苦労をかけたものなのだ。そのために、宣教師を辞めて学校の先生をしていたが、やはり同期生であったので、この人を管理人にして、吉田照子師を婦人伝道師に任命して、この教会を始めたのであった。

次は、下関の聖フランシス・ザビエル教会で、これはケンヨンという松蔭の先生であった人が始められ、緒方政枝さんが行かれ、ストロング、ストランクス、ボールス、ホームス、シメオンといったような外国人宣教師が次々に赴任し、日本人では角瀬、袴田、加藤、末好、岡上といった面々が赴任していた。ここは建築を新しくしたのではなく、支那料理屋を買い取ったもので、面白い教会であった。

◇　◇　◇

何としても、バジル監督が一番金を使ったのは松蔭女子学院で、現在の青谷口に移転している校舎の新築の費用は、監督のお父さんの財産を使ったものだ。土地は、現在の披済会病院になっている土地を売ったもので購入したが、建築は全部バジル監督がなされた。ただS・P・Gミッションが、別個に寄宿舎と宣教師館を別の土建業者に建てさせた。かように、ミッションの所有と別個に、全然監督個人の財産をもって学校を建てたものだ。

◇　◇　◇

バジル監督は、沢山日本に来た宣教師達の中でも、家柄といい、交際範囲といい、非常に優秀な育ちであった。ケンブリッヂ大学を出て、特に天文学にくわしい御方であり、ウエルスの神学校を出られた。

お父さんが弁護士であられただけに、手紙の書き方は、決して略字を書かないで、きちんきちんと書いていられた。字は上手な方ではなく、活字のように細かい字を書く人で、ヘーズレット監督のような豪快な字でなく、又うまみのある字でもなく、いわば白米の御飯に沢庵漬といったような字であった。字が小さいだけに性格も小さくきれいで、清潔そのものであった。

さて、バジル監督の性格であるが、第一に、自分の領域を犯されるということに非常な脅威をもっていた。それを守ろうという努力のものすごい意欲を示していた。それは私生活においても、公の生活においても非常にはっきりしたものがあった。私生活について語れば、五年にいっぺんの賜暇休暇で英国に帰られたある年のことであった。その間ヘーズレット監督が管理監督として神戸地方部を管理された。その時までのバジル監督の便所は、御無礼な話だが、バケツを中に入れて、一日それがすんだら、藤本のばあさんがそれを片付けねばならないような原始的なものであった。

ヘーズレット監督はたまりかねて、自分の金で全部水洗便所に直してしまった。相談をされたので「バジル監督はどんなに喜ばれるでしょう」というておいたものだが、さて、いよいよお帰りになって、最初によびつけられて、口を開くや否や、あの例の“Not your business.”という言葉が出てきた。なるほどあの御方の私生活に自分が参画するなんて、これは俺の仕事ではないはずであったと、しみじみ思ったものだ。女中さんとか、秘書とかに対して、よその人間がかれこれ親しくするのを非常に嫌われていた。自分の邸を人が使うというようなことも嫌われていたし、その点は、徹底したものであった。

◇　◇　◇

公の事でも同じで、一番困るのが人事問題であった。昭和六年から十五年、主教になるまで自分が常置委員長を勤めていたが、一番困ったのは人事問題の決済が長いことだ。常置委員会にかけるまでに、宣教師と相談し、自分が呼ばれ、移動される聖職たちがひそかに相談をうける。それからいよいよ決済が出来るのが半年から一年かかってしまう。その中に、そういった転任の噂が出るとすぽっとそれをやめてしまう。その点の身のかわし方の早さはすばらしいもので、自分の権限と、自分に参考意見を聞かせるものの限界をはっきり掴みすぎていた。そのため、監督さんから転任なんかの希望をきかれて、こっそり細君にしゃべって、それが洩れるとか、或いは気の早い宣教師がおしゃべりしたあとは、天罰てき面で、収拾出来ない人事を行ってしまう。「恐ろしいなあ」としばしば感じたことがある。

それでいて、ご自分の行動などに対して、実に見事なほどかじめがついていた。そういったことのけじめは、今更尊敬に価する。

◇　◇　◇

同時にまた、部下の聖職に対しては実にきつかった。それもC・M・Sの方に対しては遠慮しがちであったが、直系のS・P・Gに対しては実に厳格であった。あちらこちらの講演に、静想講話に、伝道説教にと自分には多くの要望があったが、その度毎に許可をとらなければならなかった。自分のパリッシュを離れることは、その主教の許可なしに出来ないことで、その点非常に厳格に取り扱われたことでは、いま深く感謝するものである。

ただあまりにもハイチャーチであられたので、C・M・S関係の教会に対しては非常に遠慮がちであられたのだ。ただし、キャソリックの原則に感謝する限りは毅然たるもので、ときどき困った問題が起きていた。

山陰のある宣教師は、どうしても晩に聖餐式をすると云う、バジル監督は

朝でなければならないと云うので、それでも自分に「私はへりくだって、あの宣教師のいう通り晩に聖餐式をしました。ですが、朝から晩まで寝ていました。長い断食をして、聖餐式をしました」といったようなふうであったが、それだけに、地方の教会の親しみとか、楽しい集いとかいったものに協力することは出来なかったと思う。

◇　◇　◇

霊的指導者シンプソン神父というのが、バジル監督にふさわしい名称であったと思う。

バジル監督は、確かにビカステス、オードレ、ヘーズレットといったような偉大な英国の主教たちに比べてスケールは小さかったし、華々しい功績というようなものが目立ってはいないが、この人だけが、日本に来た主教の中で、母教会において確固たる牧師としての地盤をもっていた人で、いいかえれば、バジル監督の偉さは、牧師としての偉さであったのだ。

現在の聖ペテロ教会の古い人たちは知っているであろうと思うが、アレン司祭の賜暇休暇のさいには、いつも管理司祭をつとめられていた。祈祷会にまで出席されて、感話を述べていたが、牧師をつとめるということが、どれくらいバジル監督にとって楽しいことであったかわからない。

特に、同監督の偉さは、信徒の告白を聞くすばらしい霊的訓練をもっていたことだ。罪人を愛し、一人一人に適切な訓練を与えていくことは、とうていい一朝一夕の付焼刃的なことで出来るものではない。従って、どこの教会の信者でも、何かあれば監督のところに個人的な相談に行っていた。遠く山陰や下関、四国あたりから、その教会の牧師に隠れてまで信者たちが来訪していた。ある敬虔な信者が「監督さんが、じっと私の話を聞いていた時、あの澄みきった目がイエスさまのそれのように柔らかで、しかもけわしさもかねていました」と云うていた。

◇　◇　◇

自分がすばらしいといつも感じたことは、どんなに大きな問題があらわれてきても、いつも平然としていられることだ。恐らく人を殺すという罪も、神の名を濫りに云ったという罪も、この人にとっては、同じ程度の胸の痛みであったかのようにすら思われる。

出征する軍人たちが、あの英米人をスパイのごとく考えていたときにすら、監督のところに最後の祈りに来ていたものだ。日ノ丸の波にゆれ、ビールと汗のにおいのあの駅頭で、じっと片隅に（その態度はスパイのように見えたであろう）一身を祖国に奉献する兵士を見守っていた姿は、すばらしい牧師シンプソンという感じであった。

当時のこと　あれこれ

佐藤家の人々

「愛の園」広瀬なおみ

書簡31号についてお尋ねしたところ、お寄せ下さった手紙。

お便り拝見いたしました。

山間部の農家は佐藤さんと申します。ご両親のお年寄り夫婦と若夫婦子供二人の家庭でした。若い主人が、林と書いてしげると読む方で、東京で看護婦・助産婦・保健婦をしておられたお姉さん（門田様）のお宅に行かれましたとき信仰をすすめられ、勇気づけられて、帰途岡山の聖オーガスチン教会に八代欽之允司祭を訪ねられて、一家族全部信者になられました。父上が一二（いちじ）さん、かね子さんという長女がありました。私達も、八代司祭様の御伴をして月一回、何度か参りました。

土塀に弾よけがしてあったり、トイレに刀掛けが置いてありました程の相当な農家でございました。ときどき、夜十一時頃から伝道集会が開かれ、谷一つへだてて向うの山の中腹、横の谷をへだてた隣りからというような近所の人たち十五・六人の集りがありました。佐藤さんからクリスマスには、近所にある南天山から南天をお届け下さったことを懐かしく思っております。只今佐藤家の方々は殆ど永眠されております。

◇　◇　◇

ご一家がおられた久米郡大垪和（はが）村は、昭和三十年に隣村三ケ村が合併して、現在は久米郡中央町となりました由です。私が八代欽之允司祭様と在任中は、佐藤様は山村におられましたが、大洪水のときは無害でしたと存じます。

昭和十六年一月、覚前司祭様が岡山に赴任なさいました頃には、佐藤さんは家・田畑を処分して岡山に出ていらしたと存じます。当時、若主人も老主人も永眠せられて、おばあさんと孫娘さんが岡山市に住んでいらして、孫娘さんが亡くなられてのち戦時中は、東京から岡山郡部に住んでいらした門田さん（若主人の姉上）とおばあさんが一緒に暮していられたと存じます。

戦後、門田さんは、明石にありました愛光園という教団の教会立の養老院の看護婦として、母上と共にいらして、ご老母を見送られてから群馬県の病院に勤められて、働けなくなられてから、魚住に移っていた愛光園に入っていられました。聖公会の信者さんの方も三人程いらっしゃいましたので、ときどきお見舞に参りました。八代欽一牧師様といっしょに、クリスマス前やイースター後の聖餐にお伴させて頂いたこともございます。

◇　◇　◇

私の岡山赴任の事情は、岡山で八代欽之允司祭様とミス・ボールスとミス・ホームズとで婦人伝道師養成をしておられましたが、八代司祭様とお二人の宣教師様と意見が食い違いましたため、宣教師と生徒さんたちが姫路に移られました上に、婦人伝道師として働いておられた市川さんと申す方が天主教の方に移られ、聖公会の信者方をたびたび訪問して引抜き活動をしておられたときでした。（私の宅にもみえて、引

抜きのお話を雄弁になさいました程でしたが。）

郡部をたくさん持った教会に、お足のお悪い八代司祭様お一人では御困難なためとのことで赴任いたしたようなことでした。市川さんの懸命の努力にもかかわらず、天主教にかわられた方は、同姉の導かれた一家族だけでしたことは本当に感謝でございました。

◇　◇　◇

私が岡山に参りましたとき、ちょうど会館が落成いたしましたときで、それまで禁酒会館で開かれておりました八代司祭様の論語解説のかわりに、会館で聖書講義を始められ、男子二十名女子十名程の出席者でした。また、その後、岡山県邑久郡長島に国立癩療養所ができ、草津や熊本の療養所から聖公会信者の患者さんがたくさん来ておられるから来てくれるようにとの要請があり、月一回司祭様のお伴をして約十年間参りました。参りました日は、夜六時から説教会、出席者は少ないときは百名あまり、多い日は百五十名から二百名。職員宿舎の方で一泊して、翌朝六時聖餐式、朝食を頂いて八時頃の舟で虫明に渡り、バスで帰岡いたしました。

◇　◇　◇

岡山の洪水のときの婦人教役者は私でした。旭川上流の農村三ヶ村は全滅で、岡山市に入って初めは一ヶ所でしたのに、後に二ヶ所堤防が切れましたため、思いがけない町々がおそわれました。私の家は旭川に面して石段の上にあり、向いの家の玄関より、鴨居の辺が入口になっていましたので、明治二十一年の大洪水のときさえ無事だったほどだから大丈夫でしょうと、隣のお年寄りの方が云っておられる程でしたから、支度だけして、二階に運ぶべきものは運び、水を汲んで、お米も洗っておきました。水が玄関の土間にチョロチョロ入りかけましたら、だんだん早く、床上四尺ほどになりました。ミシンの上や大火鉢の上に積んで置いたたたみも、火鉢やミシンが浮き、すっかり駄目になりました。

二階の窓から川を眺めておりますと、上流からわら屋根の上に乗って助けを求めている人、鶏小屋の上の鶏、沢山のわら屋根がつぎつぎと流されておりました。

後楽園も泥沼となり、公園裏の町々もすっかり大被害をうけました。

◇　◇　◇

昭和十二・三年頃、山本早太司祭様が二・三年岡山にいらして福山に移られました。十六年頃覚前司祭様が赴任なさいまして間もないとき、中道淑夫司祭様が二年程いらして姫路に移られましたと思います。

お役にたちますかどうかわかりませんが、もし幾らかでもお役に立てば幸せと存じます。

「下松」のことなど

沖縄　千代修女

40号「下関」周辺の働きについて頂いたお便り。

この「下松」に来られた方は、蜂谷ふみ子夫人です。大層信仰厚く、このお宅には礼拝堂があり、ミサの道具一切が備えられていて、月一回そこでミサがありました。戦後、御主人は神戸に行かれ、芦屋の教会に籍を移しましたが、カトリックにかわられました。

お二人とも今は亡くなられました。

奥さんは私とずーっと交わりがあり、ナザレの会友となって、ミカエル教会での会友の会には必ず来られ、八代斌助主教様と親交がありました。箕面のガラシヤ病院で二、三年前に亡くなりました。

ふみ子夫人のお里の家が、神戸エピファニー・シスターのいた家で、シスター・エレナ・フランシスという方のお導きで聖公会に入られた方です。御主人も聖徒のような信者で、お子様がなく、神戸では聖ペテロの信者だったかと思います。有名な信者でしたし、「下松」では、ストロング神父様の大崇拝者でした。ご主人は、何とかコーハンという会社（戦時中大層大切な）の社長の次の方でした。

◇　◇　◇

「下松」の蜂谷さんのところに女中に行った人は、松島藤江さんという娘さんでした。ある日、私宅の玄関に現われて、私がいつも町を歩いているのを見てお話ししたいと思って来たと云い、すぐ近くのお店に勤めている人でした。その時十九才位。そして、信仰に入り、戦争の初期に結婚。私はその時（昭和16年6月）もう下関を去り、ナザレへ入るべく高知へ墓参に帰っておりました。

藤江さんのご主人は戦争に出征して肺病になって帰り、亡くなり、二人の子供を連れて洋裁をして生活して「宇部」に住んでいました。すぐ近くにカトリックの教会があり、戦時下、下関の司祭様も来られず、宇部の中心人物であった婦人も亡くなり、カトリックの神父様が親切に親切にして下さったこともあって、カトリックになり、現在二人の子供の男の子は上智大学、女の子は幼稚園の先生になる学校を出て、しばらくカトリックの幼稚園に働いていましたが、今は結婚して、皆しあわせに東京で暮しており、ときどき、東京で私を訪ねて来てくれます。

◇　◇　◇

元田さんは、戦後、日立に行かれたように思います。東京・阿佐ヶ谷聖ペテロ教会に、元田監督のご長男の未亡人や家族がいらっしゃいます。「下松」は蜂谷さんのお家を中心に実に小さくても熱心な集いでした。

「宇部」には、山県さんという一家が中心で、奥様は友の会のリーダーで、大層立派な方でしたが、長男が東大に行っていて肺病になり、妹の百合江さんにうつり、たった二人のお子さんが亡くなり、ご主人はすっかり失望して信仰もなくなり、奥様が孤軍奮闘しておられましたが、戦時中、奥様も亡くなり、信徒もチリジリとなって、戦後、私が訪ねて行ったとき、山県さんの立派なお屋敷さえどこだったか、どうなったかわからず、私は、松島藤江さんとだけ会って戦時中のことを聞きました。　ストロング神父様は、「宇部」「下松」「萩」「山口」に月に一度ミサに行かれ、私もたいてい同行させていただきました。

高松の想い出

神戸　日下初子

33号に見える同姉のお許しをえて、高松聖ヤコブ教会三十年誌から転載させて頂いた。

昭和十三年春、夫の転任に従って北海道の旭川から高松市幸町に着きまし

た。落ち着くと松蔭女子学院のミス・リーから紹介されたクリストファ氏夫人を訪ねました。そこで松蔭の古い卒業生といって明山せつさんを紹介されました。覚前司祭の従姉とかで嬉しく、その後何かにつけてお頼り申し上げ、親元のようにお世話さまになりました。今の発様のお母様でした。小柄で優しくて、お花やお茶や畑や、何でもおできになるのです。カラフトにいらしたこともあるし、何年か絶望的な病気を養生なさったこともあり、頼もしい方でした。高松では保護司とか何とか社会奉仕的のお仕事もいろいろしていらっしゃるようでした。明山氏は水産試験場長、お子様は四人。

又、園田様という農事試験場長のご家族、奥様のご活躍ぶりはどなたもよくご存じでしょう。

岡田さんというやさしいオルガンのうまい学生さん（注：岡田重夫氏）が近くの高松高商にいて、ときどき遊びに見えました。神戸の大きな質屋さんの息子さんでした。

高松には教会がないので、牧師様が月に一度来て下さることになり、明山、園田、日下が当番をつとめて、以上の方々が集まって下さいました。八代欽之允先生は広瀬ナオミさんを連れて岡山から、姫路からは袴田先生、また八代先生のあとには覚前信三先生がいらして下さいました。

（後略）

室戸台風で

洲本　上本欽一

35号に出てくる「洲本」の養鶏場は、上本左門氏の養鶏場であった。洲本真光教会の信徒であるご当主欽一氏（写真）からお便りをいただいた。古本正夫司祭の初枝夫人は、左門氏の長女にあたる。

この記事の、淡路島のある信者一家が、台風で家と全てのものを失いました。この一家は大きな養鶏場を持っていました云々とあるのは、察するところ小生の家であることは間違いないと思います。

当時は、亡父（左門氏）と旧制中学卒業間なしの小生が、養鶏に従事していました。家と養鶏場は、約八〇〇米離れていましたので、住居の被害は小さくて済みましたが、三棟あった鶏舎のうち一番広い一棟が全倒壊。鶏の死んだのは一〇〇羽程度であったと思いますが、生きていた鶏も風雨にさらされ、卵を産まなくなったのは事実です。

その時、教会の方からお見舞金をいただきましたが、誰からとも名前は明かしてくれませんでした。

幸か不幸か、当時まだ父に資金的余力があったので、直ぐに鶏舎を建て直したので、どうやら復興いたしました。もし資金がなかったならば、恐らく倒産する程でした。復興が早かったためか、市の方からは、被害届が大き過ぎるということで、なんの援助もありませんでした。

歴史座談会から

9月16日、神戸に中道、小池、八代主教、覚前、古本、米村司祭においでいただいて、教会の歴史を語る一夕を開くことができた。以下は、その座談の抄録。

書簡（下）に関して

● 書簡23号その他によると、当時の教会の給与が非常に低かったとありますが……。

○ 同時代の巡査の給料を基準にしていると聞いたことがあるが、たしかにあまりよくなかったね。私が英国へ留学したときは（昭10年）七十五円、そのうち三十五円が家族渡しだった。（古本）

○ 昭和八年、C・M・Sからの給与は、たしか五十円で、そのほかに家賃というものが五円ついていた。（小池）

○ そんなことだったから、どこかへ行くときに、二等の汽車賃をもらって三等で行って、それでいろいろ余分のものを買っていました。（古本）

○ しかし、当時アメリカのミッション系はよかったんですが、英国教会系は悪かった。例えば旅費なんかも、アメリカ・ミッション系では、兼牧している教会に行ったりするとき、人力に乗って行ったりなんかするけど、私のおやじ（小池耕造師）なんか、そんなことはなかった。自転車にのって、四十キロの道を、雨が降ると空ばっかり見て、レインコートもないから、雨のやむのを待って、自転車で帰ってくるようなことだった。

S・P・Gもそうだったけれども、旅費なんてキッチリ計算してくれる。下関のストロングさんなんてのはそんな人だった。（小池）

● 第一次大戦のあとの不景気で、S・P・GもC・M・Sも援助削減がきびしかったようですが……。

○ C・M・SとS・P・Gとアメリカ・ミッションはどこに金を使っていたかということは、いろんなところに現われていましたね。アメリカ・ミッションの教会は、土地建物は大きなものは、わりあいにちゃんと作っているんです。その点、正反対なのがC・M・S、小屋でもいいから伝道すればいいという調子なんです。

その結果は、どういう具合になるかというと、伝道々々と福音的な伝道を強調していたなかには、消えていったものも多かったんです。アメリカ・ミッションの場合は、少なくとも大きな建物だけは残った。大正の関東大震災のあと、東京では大きな教会アメリカ・ミッション系の教会はみな復興したんです。当時八万円くらいの建物をみな作ったんです。その頃の八万円というのは大変なお金なんです。

ところがS・P・Gの方は、聖餐式とか教会の組織というものに重きを置いてましたが、それはそれで、ある程度残っていくものがあるんです。（小池）

● 書簡のあちこちに現れているのですけれども、S・P・GとC・M・Sの両者の関係ですが……。

○ いろいろありました。あの信岡修

吉司祭が、伝道師で松江の教会に行っていたときのことですが、当時の松江の牧師は永野武二郎。松江はバックストンの教化したところで、聖公会の中でも、普通のエバンジェリカルな教会ではないのです。讃美歌を使い、夜の集会では、リバイバル聖歌を使っていた。信岡師が行ってみると、早祷の祈祷台が横を向いているのが普通なのに、松江は会衆の方を向いている。信岡師が、それを横向きに直すと、永野牧師が「けしからんことをするな」と云って正面に向けかえたということがあった。（小池）

●小池主教様が伝道師時代、大阪に移られるとき、バジル主教が非常に惜しまれたようですが……。（40号）

○あの時、主教は英国に帰っておられたんですが、日本に帰ってこられて、私は神戸に呼びだされたんです。ごはんを食べさせてもらって、それから、「お前、やっぱり行くのか」といわれるから、「はい、行きます」というと、それならしょうがない、行ってからも神戸地方部のために祈りを続けよといわれて、それでお別れしたんです。

●教会自給の問題が始まったときには、現職の長老がいったん退職して、もう一度新任の牧師になってもらうという操作で、教区の予算がふくれあがるのを抑えようとしたこともあるようですが……。

○さあ、八十円か九十円までにはならなかったんではないか。その頃、大阪で一番いいのは川口教会の百五十円で、その他の大きい教会で百四十円。私なんか西宮では、伝道師として八十円か八十五円だかもらっていた。（小池）

○わしの親父は、月給百円。所得税を取られていた。所得税をとられると衆議院選挙に投票権があったもので、当時投票権のある長老はそう沢山なかった。（八代）

●大原辰三師のこと……。

○大原先生は、そもそも松江の人なんですが、神学校へ行かずに松江で伝道師になったんですが、聖職になってからは、千葉県の北条の牧師になった。それは同じC・M・Sの関係、当時は教区というよりミッションの関係で人を動かしていたからいたから、南東京地方部の千葉県の一部はC・M・Sの働きの場であったのです。千葉へ行く前、伝道師のとき松江で結婚されたんです。その奥さんの姉さんは、鹿児島出身の西力造さんの奥さんでした。

この人の息子さんが、徳島の高専に入って、うちの教会(聖テモテ)に来ていて、息子が大学に入ったととても喜んで期待しておられたんですが、戦争ののちの校庭のごみ処理中に、不発弾が爆発して亡くなりました。気の毒だったですよ。（古本）

●高知の教会には、秋田哲三先生に、赤岡から洲本へ転任せよという、バジル監督の手紙が残っていますが……。

○赤岡にHというお医者さんがいて、赤岡教会の中心の人物だったんだけれども、二号さんを持っていてね。それを、婦人矯風会から攻撃されて、聖公会は何をしとるかという調子でね。そのときHさんは、もう少し待ってくれ

たら、自分でキチンとすると云っていたんだけど、結局、陪餐禁止にしたんだろうね。そんなことが原因だったらしい。（覚前）

○堀六郎さんのことが出てきていたけれども、インマヌエルでは、堀さんのあとに、小笠原三郎という人がきてね。のちに熊本に行った人だったけれども、奥さんは、「いたや」というひとで、婦人伝道師をしていた。大変な熱血漢で、牧師館にかけてあった教育勅語を、こんなもの置いとくことはないとのけてしまったために、ようけ来よった師範学校の生徒が、そんな教会に行かんということになって、信者が半分になってしまったことがあった。

それを、あとから来た寺本房吉先生が、ちくりちくりと長いことかかって元へ戻したもんだ。（古本）

○小笠原さんは、思想的に赤いといわれていたところへ、当時の師範学校は右翼だったからね。

戦時下の教会云……

●昭和十五年に、教務院の教育部長であった須貝先生から各教会に、日曜学校調査資料の提出が促され、その中に、今や時代は大きく変換しつつあるが、今のままでよいのかという質問があったのですが、当時、当局から日曜学校に何か干渉がありましたか……。

○あったなかったと云うより、出来なかったですよ。とにかく教会へ来ることが出来なかった。特高が来たから、来るのは年寄りくらいのもので、子供たちは来れなかった。おとなでも、男は当時は町内会の仕事やら何やらで、教会へ来るひまがなかった。うるさいから来てくれない。（古本）

●当局の圧力を感じられるようになったのは、いつ頃からですか……。

○昭和十一年から十四年まで、西宮の教会におったのですが、特高がやって来た。仏教会は、報国なんとかという戦争協力の説教などやっていたのです。その頃、日曜にはわれわれ在郷軍人は、学校の庭に集められて訓練を受けていた。日曜日にそういうことをすると、私共は大事な行事があるので出来ないと、在郷軍人会長に申し入れたのですが、そういうことを云うとただではすまんぞと云われました。

そんなことが始まりで、だんだん締めつけられるようになって来たのです。

十八年、十九年頃になると、牧師は炭坑のような所へ行かせられていたのです。大阪では、山崎牧師が炭坑へ行った。私はそんな所へ行かせられないように、自分からすすんで神戸の工場へ工員になって働きに行った。そして、そのかわり、日曜には工場を休んで、礼拝して、夜は訪問したのです。

ある日、工場へ電話がかかってきて、家内が、「いま警察が家に来ているから帰って来い」と云うから、帰ってみたら、特高が家宅捜索をしていた。引出しの中から、日記から、本から、手紙から、大風呂敷に背負わされて連れていかれた。そして、九時頃、大勢に囲まれて尋問をうけた。その日の夕方帰されたが、「お前、日曜日に工場を休んでいるが、どういうわけだ。おかしい。徴用のがれのために工場に勤めているにちがいない。けしからん。」というわけで、その時から、朝六時に礼拝をして、七時の始業にとんで行く。

そんな時でも、礼拝には、一人、二人、…四人、少なくとも五人くらいの人が来ていました。男子一人、あとは婦人ですけどね。その婦人というのは大体四十才ぐらいでした。（小池）

●昭和十九年頃は、私共の年代、小学校五、六年でも、憲兵や特高の動きを意識できるようになっていたのですが、もっとそれ以前、小池主教さんが、満州事変のあと調査に行かれたわけですが、事変前後に、キリスト教に対する当局の動きの中で、おやっと思われるようなへんなことはありませんでしたか……。

○その頃はまだありませんでした。神学校で応召した人がいましたが、それほど変だなあと思うことはありませんでした。

けれど、昭和十一年はまだよかったけれど、昭和十四年に、西宮の教会から芦屋の教会にかわることになって、後任を決めるために話し合いに行こうと思って、敦賀の駅で乗り換えるために待っているとき、憲兵につかまった。人相のせいかもしれないが、僕は何度もつかまっている。その都度、かんべんしてもらっているが…（笑い）。朝鮮でもつかまっている。べつに、カラーをつけていたわけでもないんだけどもね。

●どんな尋問をうけられたのですか。

○たんに、お前のしていることは分かっているぞ、と云うようなことです。剣付鉄砲を持った兵隊に囲まれてね。（小池）

○合同問題は、神戸教区に限って非合同問題とすべきだね、文部省の不信感が強く感じられ、むしろ内務官僚や警察官僚のほうが聖公会に好意的であったし、内務官僚の中から、ずいぶん各県知事が生れていて、日英関係、ことにカンタベリーのことをよく知っていて好意的であったと思う。（八代）

○十三、四年、まだ私が境にいた頃、マン主教が来て話をされるときには、必ず特高が来た。聴衆が帰ってから入ってきて、どんな話をしたかを聞くので、「そんなに聞きたかったら、あんた、礼拝に出て話を聞いたらいい」と云ったもんだ……。（笑い）（米村）

○市や県の警察や憲兵の間で縄張り争いをして、自分たちの成績（キリスト教関係者の摘発）を上げるために競争していたきらいもあるけど、全体として、人を教会に行かせないという眼目を中心に行動していたと思うよ。学校でもどこでもね。（古本）

○いろいろなことがあった。昭和二十年八月五日の晩、息子と母が危篤だというんで、浜田に向かって汽車に乗っていた。私が出発した直後に空襲があって戦災に会ったが、私の教会と周りだけが爆撃からまぬがれた。帰ってから聞くと、教会が合図をしたので爆弾を落とさなかったんだという。そんなデマがとんだものです。（小池）

○多くの人は、戦争中は礼拝に出られなかったもんですよ。出れば何かと云われた。（米村）

○当時は、なぐり殺そうが、けり殺そうがなんともない時代だったからね。（小池）

△合同問題……

○合同派が毎日のように、入らんか入らんかと云ってきてうるさかった。教団に入らんか。絶対に入らんと云ったが、手紙が来るやら、書類が来るやらで、十七、八年頃、結局みんなの教会は、私共聖公会は教区が主体、主教が主催するので勝手なことはできないとつっぱなしていたのだが……。

徳島では、合同派の主教になった横田さんの縁戚関係の人が多かったので、その人々は合同派に行ったのです。ですから大変多かった。鳴門も入った。私しか残らず、皆教団に行った。牧師はみな徴用にとられていたし、牧師は私しかおらず、残っているのはお年寄りしかなかった。あとは、軍需工場にとられてしまっていた。（古本）

○教会の中に、国策に沿うことが信仰的だと考える人たちがいた。だから合同することが信仰的だというぐあいに云う人もいた。（小池）

○神学的なことではないんです。国家のために尽くすものが信仰者だ。信仰者は国家に尽くすことだという論理です。絶対的なものは国家だというわけです。私は何度も警察にひっぱられたが、「お前の神と、天皇とどっちが上だ」という、お決まりのことを聞かれたものです。私はごまかして、神と天皇とは次元の違うものだと云った。むこうは何も云えなかったけどね。一般社会的にも、地域的にもそうだった。（小池）

●合同へ行った人たちの中には、時局に乗り遅れたらいかん、聖公会はだめになる、という時の情勢に流される向きも多かったということをききますが……。

○そうです。一般社会的にも、地域的にも、実利的な教区、同じミッション系でも比較的自由主義的な新しがりやの人々が合同に走ったと云えるでしょう。（小池）

●今日は大変ありがとうございました。これを機会に、たびたび先生方のお話をうかがい、教区の歴史を生きたものにできたらと願っております。

要覧にみる　神戸地方部
昭和九年の教会と教役者

（教役者名の上の○印は、教会で招聘したもの）

監督　神戸市神戸區中山手通六ノ三三
バジル　Rt.Rev.Basil D.D.

名称	信徒数	所在地・教役者
聖ミカエル教会	二九七	神戸市神戸區中山手通六ー三三 長老　○八代斌助 小笠原晴子 ミス・ファウルス
明石伝道地	ー	明石市太寺一ー三、三八二 長老　村田俊雄
聖ペテロ教会	一二五	神戸市葺合區旗塚通六丁目三ー二 長老　イ・アレン 袴田観一 緒方政枝
昇天教会	二二二	同湊區下祇園町四五六 長老　覺前信三 三宅ふくえ ミス・ストークス
聖ヨハネ教会	一三〇	同　須磨區稲葉町四ー十三 長老　中野忠治 鹽原以滿子
聖マリヤ教会	九五	神戸市外御影町高羽平野十三 長老（不在）F・ケテルウエル 同シ・ゼ・ストランクス 武田八重
顕榮教会	八三	姫路市五軒邸三七 長老　牧野與三郎 ミス・ボールス ミス・ホームス 太田りう 吉田照子
眞光教会	九二	兵庫縣津名郡洲本町内通町甲六四四 長老　秋田哲三 竹田丈
聖オーガスチン教会	一一五	岡山市弓ノ町三ー五七 長老　○八代欽之允 広瀬ナオミ

兵庫縣有馬郡鹽瀬村名鹽、高見静治方。同氷上郡和田村小野尻、有田藤藏方。

津名郡尾崎村、上宮方。三原郡市村、土井方。福良町、平瀬方。

加古郡高砂町、鐘紡保養院。同曾根町、波多野方。揖保郡網干駅前、田中方。赤穂郡相生町、工藤方。明石郡土山學園、日比野方。但馬生野町、藤巻方。加東郡上東條村、岸本眞三郎方。

高松市西濱新町五四四、明山方。岡山縣久米郡大塀和村、佐藤方。同玉島町新町、池田方。同邑久郡鹿忍町、益田方。

大洲聖公會	七八	愛媛縣喜多郡大洲町王子岡 長老　竹内宗六 瀧野よしを
聖アンデレ教会	四九	松山市南持田町一〇二 長老ジ・エヌ・ストロング 執事　信岡修吉 岡井ちゑ
聖パウロ教会	一一二	高知市北與力町六七九 長老　中道政市 武内繁子 末好時信
赤岡聖公会	四九	高知縣赤岡町小横町 長老　中道政市 武内繁子
インマヌエル教会	七九	長老　寺本房吉 ミス・リチャードソン 大川松枝
佐古教会	五二	同　南佐古町八丁目 長老　古本正夫
聖保羅教会	一七四	徳島縣撫養町南濱二二 長老　寺本房吉 益田喜代吉

宇和島。八幡濱。成妙。

今治市。

高知縣安藝郡馬上村、上杉勝方。同縣同郡同村、藤戸重徳方。

徳島市塀裏町土手外二四

聖愛教会	二一	同　美馬郡脇町南町 長老　寺本房吉 ミス・リチャードソン
永生教会	三八	同　那賀郡冨岡町 長老　東新町一二二 吉本要太郎
福山基督教会	三三	福山市米屋町三三七 長老　横田金熊
降臨教会	一六〇	廣島市大手町五ノ五五 長老　○山内豊吉 小池俊男 ミス・ウォージントン
呉信愛教会	一五一	呉市今西通六丁目一 長老　片山民治郎 ミス・バッグス 有田梅子
聖フランシス・ザビエル教会	四四	下關市名池山 長老ジ・エヌ・ストロング 加藤九十九
米子基督教会	九〇	米子市加茂町一一四 長老　粟飯原龜一 阿部浄子
境基督教会	三八	鳥取縣西伯郡境町末廣町二七 長老イ・ジ・ハッチンソン 執事　伊墻八束

天應。阿賀。警固屋。

山口市。宇部市新川。萩市。

島根縣安来町、聖愛會。鳥取縣淀江町會館。同溝口町、野坂方。

u 上本 …… 59
「宇和島」……11,34
v バイエル(Fr.Viall, Kenneth)……45
ボールズ(Miss Voules, Jessie E.)
……3,15,36,41,51,
75,78,87,88
w ワッディ(Canon Waddy, Stacy)
……37,39,54
ウォーカー(Mr.and Mrs.Walker)
…… 5,15,24,41,64
ウォーラー(Fr.Waller) ……33
ウォルトン(Fr.Walton) ……46,88
ウォルシュ・G・主教 …… 47
ワッツ(Fr.Watts, Frederick)
…… 21,40,71
ウイリヤムス(Miss Williams, A.)
……56,61,76,97
ウッド(Wood, Violet)…… 36
ウォージントン(Miss Worthington H)
……4,25
y 山県セツ …… 44
「山口」……44
山内(豊吉・司祭)……25
八代(欽之允・司祭)……2,6,11,40,49
八代(斌助・司祭)
……13,18,22,33,48,56,73
横田金熊(司祭)…… 94
米村勇雄(伝道師)……65,73
吉田照子(伝道師)…… 15
吉本要太郎(司祭)…… 74

廣瀬基督教會	二八	島根縣能義郡廣瀬町 中町九一六 長老イ・ジ・ハッチンソン
松江基督教會	一〇三	松江市殿町大手前 長老 永野武二郎 長崎泉
隠岐聖公會	六	隠岐國西郷町西町 長老 藤原金市方。 永野武二郎
濱田基督教會	七三	島根縣那賀郡濱田町県内 長老 永野武二郎 小池耕造 ミス・ナッシュ

安濃郡大田町。美濃郡益田町。鹿足郡日原村。

o 「岡山」…… 39,50,59,91
奥田勇 ……27
大原辰三(司祭)……83,94
太田りう(伝道師)…… 3,15
岡井ちえ(伝道師)……15,29
「大洲」 ……10,33
オーバース(Mr.and Mrs.Overs)… 83
p パロット(Mr.Parrott, Frederick)65
パターソン(Miss Paterson)……22
パ-シング将軍(General Pershing)53
聖ペテロ教会「葺合」
… 2,7,9,11,12,14,20,21,23
27,35,50,56,64,80,81
プール学院 ……59,60,63,83
q クイック司祭(Rev.Quick, Keith) 44
r ライフシュナイダー主教
(Bp.Reifsnider)……31,77
リチャード(Fr.Richards, W. A.)
…… 2,6,10,21,36,38
立教大学 …… 31
s 「境」(上道キリスト教会)……63,79
「西条」 …… 90
桜井健(神父)…… 45
佐々木鎮次主教 ……68,76
サンダース(Miss Sanders)
…… 15,24,65,72
サウンダース(Miss Saunders, Hilda)
…… 45,72
佐藤林 ……39,60
スコット(Fr.Scott, John Joseph)
…… 20,47
s 「下関」…… 18,20,23,27,28,39,
44,53,58,95
新 邦好 ……94
松蔭女学校 …… 17,59,72,76,
79,89,91,95
昇天教会 …… 50
シメオン(Sr.Simeon)……24,65,79
スミス(Miss Smith, Eva Burgh)
…… 4,24,51,97
ストークス(Miss Stokes, K. S. E.)
……5,24,45,51,75
78,87,88
ストランクス(Fr.Stranks)
……20,24,35,45,51,65
ストロング(Fr.Storong, George N.)
2,14,20,23,27,29,33,38,43,
58,86,87,90,94,96,97
末好時信(神学生)……26,30,44,66
「須磨」(聖ヨハネ教会)……24,50
「洲本」……1,59,91
t 「高松」 ……49
竹内宗六(司祭)…… 10
竹田 丈(伝道師)……40
竹田鉄三(司祭)…… 45
武内繁子(伝道師)…… 15
田中順次、キチノ、義一、マサエ、
光夫、清子、和子…… 74
トイスラー(Dr.Teusler, R.)…52,53
「徳島」 ……35
「冨岡」 ……74
u 「宇部」 ……44
植村義久…… 66

人名・地名・教会名索引

e エドワーズ(Miss Edwards, N.)72,76
エガートン(Lady Egerton, M.)51,61
エッセン(Miss Essen, Mabei E.)…5
エピファニー修女会 …… 61
f フィールド(Mr.Field)…… 12
フローレンス(Sr.Florence)……65
フォード(Fr.Ford)…21,36,45,51,61
フォス主教(Bp.Foss, H.J.) … 8,54
ファウルス(Miss Fowells, A.)31,36
フランセス(Sr.Frannces C.Eleanor)
……15,24
「福山」…… 92,94
古本(正夫・司祭)……30,39,73,78,86
g ゲイル(Fr.Gale, William H.)…… 5
h 蜂谷 …… 90
袴田(ステパノ・観一)42,51,55,66,93
「函館」 …… 47
ハインズ夫人(Mrs.Haines)…… 72
ハミルトン主教(Bp.Hamilton, H.)
…… 38,47
ヘーズレット主教(Bp.Heaslett, S.)
……38,63,70,81,83,92,94
ハインド(Fr.Hind, J.)……53
林勇幸、喜代子、幸雄、静香…49,67
姫路顕栄教会 ……3,11,91
「広島」…… 25,29
広瀬(なおみ) ……60
ホームズ(Miss Holmes, Mary)
3,15,25,36,41,56,61,65,75
a 「明石」…… 48,55,79,91,95,96
秋田(哲三・司祭) …… 11,13,18
アレン(Fr.Allen, Eric)
9,10,13,14,20,21
27,41,65,86,87
オール・セインツ教会
36,40,61,65,70,96
「有馬」…… 50,56,70
b バッジャー神父(Fr.Edwin Badger)
……77,82,86
バーグス(Miss Baggs)
……83
バーバー(Miss Barber,Mrs.Quick)
……4,5,41,44,51
ベイリス(Miss Bayliss)……24,25
ベッキンガム(Beckingham)
…… 1
ビカステス主教(Bp.Bickersteth) 38
ビンステッド主教(Bp.N.Binsted)
…… 53,62
バートン修道院長(Fr.Spence Burton)
……45
c セシル主教(Bp.Cecil) ……46
クリストファー(R.C.Christopher)50
コンスタンス修女(Sr.Constance, E.)
……73
d ダブルディ(Miss Doubleday, S.) 83
デゥルイット(Miss Druitt, I.M.)
……45,51,72,76

h 堀六郎(司祭)…… 40,42,48
ハッチンソン司祭(Hutchinson, E.)
……46,47,63
i 伊壇八束 ……30,39,79,83
「今治」 ……43,90
j ジョンソン夫人(Mrs.Johnson)……22
k 加藤九十九…… 27,42,51
ケニオン(Miss Kennion, Jessie O.)
…… 18,23,31,35,44,61
ケテルウエル(Fr.Kettlewell, Fred)
… 11,13,18,21,24,41,47,50
56,61,64,88
木村兵三 …… 45
小池(耕造・伝道師)……86
小池俊男(伝道師)…… 25,30,85
「神戸」…… 3,91,52,58,86
昇天教会 …… 25,56
「高知」(聖パウロ)……2,6,9,12,63
「下松」 ……87,90
国広文吾(執事)…… 19,23,42
近藤松広…… 90
日下初子…… 50
l リー(Bp.Lea, Arthur) ……68
リー(Miss Lea, Leonora E.)
……5,24,41,45,76,97
聖ルカ病院…… 52
m 牧野(与三郎・司祭) ……13,18
マン(Rev.Mann, John C.)…47,73,76
マーガレット(Sr.Mardaret)……65
益田喜代吉(伝道師)…… 84
「松江」……83
松井(米太郎・主教)……68
m 「松山」 ……3,6,10,14,27,38,43
48,90,94,95
マキム主教(Bp.Mckim, J.)
……38,47,60,77,82
マーサー司祭(Fr.Merder)……21
ミカエル教会 ……13,17,50,64,80
「御影」…5,10,12,13,17,50,64,80,88
「三木」……55
三戸千代子 …… 44
南岡政枝 …… 87
「宮島」……29
モンクハウス(Miss Monkhouse)… 22
モース，ウオルター…… 45
元田(作之進・主教) ……90
村田俊雄(司祭)…… 48,55,79,95,96
n 永野(武二郎・司祭)……83
「長浜」……49
「長島」 ……2
名出保太郎(主教)…… 8,68
中道政市(司祭)…… 15,42,66
中山愛子…… 29
「鳴門」 ……94,84
ナッシュ(Miss Nash, Elizabeth)…4
「新居浜」の藤井…… 90
根岸 ……90
信岡修吉(伝道師)
……10,14,30,39,43,90,93
野村忠子 …… 28
ノリス主教(Bp.Norris)…… 8
野瀬秀敏(司祭)…… 33
o 小川 ……90
岡上千代(伝道師)…… 65

写真資料について……

原本には写真は掲載されていません。教区資料や、関係教会・個人のご好意で文中に以下の写真を挿入できました。

頁		所　蔵
	【バジル主教。岡山聖オーガスチン教会献堂式で。1929年】	昇天教会
4	【教役者修養会。 推定1932年頃】	教区
5	【ミス・ナッシュ。松江で、1925年頃】	松江教会
6	【高知聖パウロ教会献堂式。1932年】	高知教会
8	【フォス主教送別会。1923年頃】	教区
9	【第１７聖公会総会。1932年】	教区
11	【大洲・竹内宗六司祭。1937年】	大洲教会
14	【松江・信岡修吉師。1931年】	松江教会
16	【呉信愛教会。戦前、市内岩方通にあった教会堂。1927年】	呉信愛教会
18	【ミス・ストークス、パーカー、ケニオン。】	昇天教会
19	【青聯大会・国広文吾師。1931年】	小池虔二師
20	【スコット司祭】	高橋 巌氏
21	【聖ペテロ教会献堂式のプロセッション。】	教区
26	【広島降臨教会の教役者。1933年】	小池主教
28	【改築前の下関聖フランシス・ザビエル教会と教役者】	下関教会
32	【六甲・全国聖公会青年連盟大会。1933年】	教区
34	【大洲聖公会。年代不詳】	大洲教会
43	【高知聖パウロ教会の会衆。昭10年代】	高知教会
46	【ウォルトン司祭】	呉信愛教会
48	【若きマン司祭と家族。明治年代・米子で】	小池主教
48	【明石・野村氏宅での日曜学校】	教区
54	【フォス主教、堀六郎司祭と大洲信徒】	大洲教会
57	【教役者修養会・有馬。1934年】	教区
64	【境大火慰問。1935年】	境・権田家
66	【松江信徒・永野武二郎司祭と米村勇雄伝道師。1935年】	松江教会
67	【御影聖マリヤ教会の信徒と教役者。1935年頃】	教区
69	【聖公会神学院の教職員】	教区
69	【若き日のミス・リー。1935年頃】	教区
70	【ヘーズレット主教。年代不詳】	教区
73	【聖テモテ教会の信徒と古本正夫司祭。1933年】	古本正夫師
74	【冨岡永生教会信徒と吉本要太郎長老夫妻。年代不詳】	冨岡教会
80	【聖マリヤ・マグダレン教会でミス・シメオン。年代不詳】	明石教会
83	【ミス・バッグスとミス・ダブルデー】	古本正夫師
84	【大原辰三司祭と藤本寿作司祭】	松江教会
84	【益田喜代吉伝道師】	鳴門教会
86	【小池耕造師と小池俊男伝道師。1936年】	小池虔二師
87	【ミス・バーバー。昇天教会婦人会で。】	
93	【袴田観一執事。1937年】	億川家
94	【横田金熊司祭】	鳴門教会
97	【メイヨ・クリニック】	教区

感謝・資料写真などの提供。

この書簡集(上)(下)のためにと、多くの方から、教区の歴史資料としても大変貴重な写真のご寄贈をいただいたり、心よく複写させていただいたりしました。書簡集の中に掲載することができたのはごく一部でしたが、すべて教区の歴史資料として大切に保存させていただきます。

また、書簡中に登場します教役者・信徒の方々がどなたであるのかを、各方面にお尋ねしましたところ、多くの方からご親切なご教示をいただきました。その一部は、巻末に「当時のことあれこれ」として掲載しました。文中の（注：　）の多くは、このご協力によるものです。

ご協力に心から感謝申し上げます。

談話や手紙などをいただいた方々。

中道淑夫主教　小池俊男主教　八代欽一主教　覚前信三司祭
古本正夫司祭　米村勇雄司祭　児玉 正 司祭　入交源治司祭
岡崎 正 司祭　長門一二三司祭　広瀬なおみ伝道師
吉田照子伝道師　塩原以満伝道師　千 代 修 女
永沼輝子伝道師　日 下 初 子 姉　上 本 欽 一 氏

資料写真を提供して下さった方々。

小池俊男主教　小池虔二司祭　古本正夫司祭　児玉 正 司祭
神戸・億川家　米子・高橋巌氏　境港・権田家
松江基督教会　神戸昇天教会　下関聖フランシス・ザビエル教会
高知聖パウロ教会　明石聖マリヤ・マグダレン教会
広島復活教会　富岡キリスト教会　大洲聖公会
鳴門聖パウロ教会　姫路顕栄教会　呉信愛教会

その他、資料探しを手伝って下さった方々。

管区事務所　中村 豊 司祭　吉田雅人司祭　小南 晃 司祭

感謝・翻訳ご奉仕。

八代欽一主教	29号
藤田謙次氏	30号
岡崎　正　司祭	26, 27, 28号
西川正文司祭	37, 38, 39, 40号
佐藤　愛二郎	33, 35, 36, 41, 42号
佐藤真一司祭	23, 24, 25, 31, 32, 34号

索引作製　　佐藤芳子

神戸教区歴史編纂委員会
顧問　八代欽一主教
○　佐藤真一司祭
西川正文司祭
林普佐夫司祭
西海雅彦執事

Letters to the
Kobe Fellowship (下)　　非売品

1987年 1月15日　初版発行

発行者　日本聖公会神戸教区
歴史編纂委員会

印刷所　高知・関西印刷

発行所　日本聖公会神戸教区